

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第423集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成14年度)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成14年度)



写真1 早坂平遺跡・旧石器出土状況(後期旧石器時代後半)



写真2 力持遺跡・深さ2mの住居跡(縄文時代中期前葉)



写真3 大橋遺跡・南盛土遺構断面(縄文時代晩期中葉)



写真4 島田Ⅱ遺跡・鉄製品(平安時代)

序

四国4県に匹敵する広大な面積を有する岩手県は、埋蔵文化財の宝庫と言われておりますが、これら先人達が遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務でもあります。

また、一方では幹線道路網や農業基盤整備など、社会資本を充実させることも行政上の重要な施策となっております。このため埋蔵文化財の保存・保護と地域社会の進展との調整や調和が今日的な課題でもあります。

こうした見地から、(財)岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による調整と指導のもとに、道路建設や農地整備などによってやむを得ず、消滅していく遺跡について発掘調査を実施し、記録保存する措置をとって参りました。平成14年度は、県内22市町村におよぶ53遺跡に対して発掘調査を実施いたしました。

調査した遺跡の時代区分は、後期旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代、中世、近世までと多時期に亘っておりますが、この中で特に注目される遺跡としては、昨年度からの継続調査をして参りました山形村早坂平遺跡が挙げられます。この遺跡は、後期旧石器時代における検出遺構の中から国内最大級の長さ32.2cmの斧形石器が出し注目を集めております。また、住田町館遺跡からは、県内では出土例の希な縄文時代前期後半の土器(大木3・4式)を伴った、形状が縦長の長軸10mを超す人形住居跡を検出し、更に縄文時代晩期中頃の遺跡である北上市大橋遺跡からは、長さ60cmの大形石棒を伴った配石遺構を検出するとともに、同時期の盛土遺構と捨て場から土器や石器をはじめとする大量の遺物が出土するなど、貴重な遺跡の発見がありました。その他としては、北上市金附遺跡で弥生時代の捨て場、水沢市中華入遺跡から5世紀末の住居跡や平安時代の水田面などの多くの貴重な遺構を検出しております。

この発掘調査略報は、調査本報告書の発刊に先立ちまして、今年度に調査を行った遺跡の調査概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、広く多くの方々にも活用され、埋蔵文化財に対してのご理解を一層深めていただく一助となれば幸いです。

終わりにりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会及び関係各位に対しまして、衷心より感謝申し上げます。

平成15年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

目 次

序

平成14年度の調査結果について

I. 国土交通省関係

- | | | | |
|------------------------|----|-----------------------|----|
| (1) 仁昌寺Ⅲ遺跡(一戸町)…………… | 5 | (5) 杉の堂遺跡(水沢市)…………… | 15 |
| (2) 五月館跡(一戸町)…………… | 7 | (6) 大清水上遺跡(胆沢町)…………… | 17 |
| (3) 力持遺跡(菅代村)…………… | 9 | (7) 河崎の櫓擬定地(川崎村)…………… | 21 |
| (4) 滝の沢地区遺跡群(北上市)…………… | 13 | | |

II. 公団・公社関係

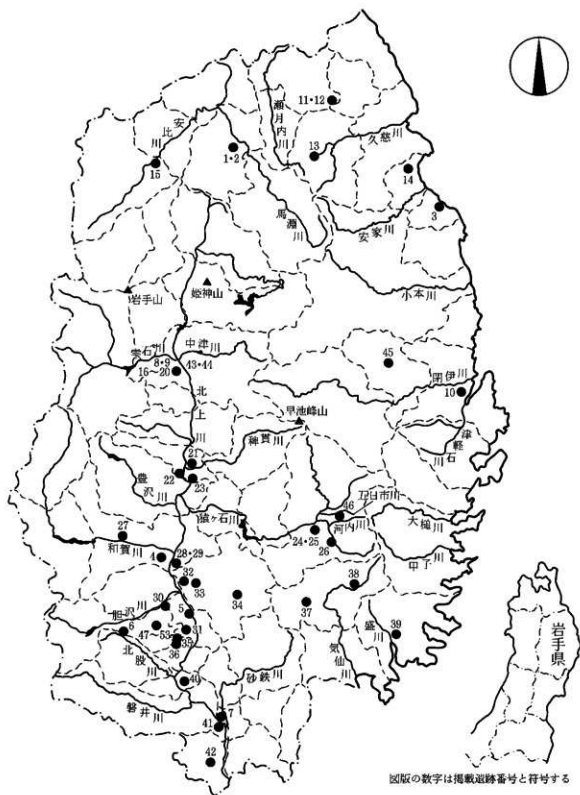
- | | | | |
|---------------------------|----|----------------------|----|
| (8) 矢盛遺跡第3次調査(盛岡市)…………… | 27 | (10) 島田Ⅱ遺跡(宮古市)…………… | 33 |
| (9) 熊堂B遺跡第14次調査(盛岡市)…………… | 29 | | |

III. 岩手県・市関係

- | | | | |
|----------------------------|----|---------------------------|-----|
| (11) 玉川向遺跡(軽米町)…………… | 39 | (27) 大槻遺跡(北上市)…………… | 91 |
| (12) 梅の木沢遺跡(軽米町)…………… | 41 | (28) 金附遺跡(北上市)…………… | 95 |
| (13) 早坂平遺跡(山形村)…………… | 43 | (29) 金附遺跡(北上市)…………… | 97 |
| (14) 平清水Ⅱ遺跡(野田村)…………… | 47 | (30) 中平入遺跡第2次調査(水沢市)…………… | 99 |
| (15) 北の城館跡(安代町)…………… | 49 | (31) 島田Ⅱ遺跡(水沢市)…………… | 103 |
| (16) 熊堂B遺跡第15次調査(盛岡市)…………… | 53 | (32) 広岡前遺跡(江刺市)…………… | 105 |
| (17) 台太郎遺跡第44次調査(盛岡市)…………… | 57 | (33) 宝性寺跡(江刺市)…………… | 107 |
| (18) 飯岡沢田遺跡 | | (34) 大中田遺跡(江刺市)…………… | 111 |
| 第5次調査(盛岡市)…………… | 61 | (35) 明後沢遺跡群 | |
| (19) 野古A遺跡第15次調査(盛岡市)…………… | 65 | 第16次調査(前沢町)…………… | 115 |
| (20) 飯岡林崎Ⅱ遺跡 | | (36) 寺ノ上遺跡(前沢町)…………… | 121 |
| 第3次調査(盛岡市)…………… | 69 | (37) 館遺跡(住田町)…………… | 125 |
| (21) 月の淵Ⅰ遺跡(石鳥谷町)…………… | 73 | (38) 小松Ⅰ遺跡(住田町)…………… | 129 |
| (22) 宿遺跡(石鳥谷町)…………… | 77 | (39) 長谷堂貝塚(大船渡市)…………… | 133 |
| (23) 高畑遺跡(石鳥谷町)…………… | 81 | (40) 下構遺跡第2次調査(平泉町)…………… | 135 |
| (24) 九重沢遺跡(遠野市)…………… | 85 | (41) 楊生新城館跡(一関市)…………… | 139 |
| (25) 新洞Ⅱ遺跡(遠野市)…………… | 87 | (42) 五輪堂遺跡(花巻町)…………… | 141 |
| (26) 平倉観音遺跡(遠野市)…………… | 89 | | |

IV. 本報告

- | | | | |
|--------------------------|-----|-----------------------|-----|
| (43) 矢盛遺跡第4次調査(盛岡市)…………… | 147 | (49) 鶴供養遺跡(胆沢町)…………… | 213 |
| (44) 稲荷遺跡第5次調査(盛岡市)…………… | 163 | (50) 駒込遺跡(胆沢町)…………… | 215 |
| (45) 永田Ⅲ遺跡(新里村)…………… | 181 | (51) 二の沢Ⅱ遺跡(胆沢町)…………… | 217 |
| (46) 中土淵遺跡(遠野市)…………… | 195 | (52) 竹地子遺跡(胆沢町)…………… | 219 |
| (47) 西風遺跡(胆沢町)…………… | 207 | (53) 主計谷地遺跡(胆沢町)…………… | 221 |
| (48) 二の台遺跡(胆沢町)…………… | 209 | | |



平成14年度調査道跡位置図

平成14年度の調査結果について

平成14年度の発掘調査事業は、年度当初49遺跡191,636㎡を対象としてスタートし、最終的には53遺跡162,415㎡を調査して終了した。委託者の計画変更などが要因となり調査遺跡数は増加したものの、調査終了面積は結果的に減少している。これは、調査未了によって次年度に繰越さざるを得なかった遺跡がかなりの数に上ったためである。

今年度発掘調査を実施した54遺跡のなかで、特徴的な遺跡を時代ごとに紹介すると次のようになる。旧石器時代では、北上山地北部の山形村甲坂平遺跡（13）で調査が行われ、後期旧石器時代後半期と考えられる石刃石器群を中心に、約2万点に及ぶ石器が発見されている。この石刃石器群は、在地の豊富な黒色頁岩を多用し、大形の石核・石刃を大量につくり出している。

縄文時代の遺跡の調査は住田町小松1遺跡（38）、胆沢町大清水上遺跡（6）、菅代村力持遺跡（3）、大船渡市長谷堂日塚（39）、北上市大橋遺跡（27）などで実施され、各遺跡とも多数の遺構・遺物が発見されている。3年日の継続調査となった小松1遺跡は、早期末・前期初頭を主体とする大規模な集落跡で、住居跡等の遺構が厚い雑性堆積物に挟まれ層位的に発見された。前期後葉大木5式期の円環状集落として知られる大清水上遺跡では範圍確認調査が行われ、大形住居跡群のほかに小形住居跡群が分布すること、南端に遺物包含層が存在することなどが明らかになった。力持遺跡は前期から中期にかけての大集落跡で、今年度分だけで大小併せ100棟強の住居跡が発見された。長谷堂日塚は中期と晩期にまたがる集落跡で、中期末葉を中心に、大形の住居跡・土坑などが多数検出されている。晩期中葉を主体とする大橋遺跡では、2箇所の大規模な遺物包含層のほかに、2地点で盛土遺構が発見されている。この盛土遺構は、土器などの遺物や焼土・炭化物を含む土を層状に積み上げたもので、内部から住居跡の跡り床、石囲炉などが層位的に検出されている。

弥生時代の遺構としては、北上市念附遺跡（28・29）から前期の遺物包含層、上器棺墓などが発見されている。この遺物包含層は最大厚が1.3mに達し、東西約50mの範囲に広がる大規模なもので、来年度に調査を再開する予定となっている。

古墳時代の遺構は水沢市巾半入遺跡（30）で中期の住居跡が検出された。過年度の調査で、掘り出された方形の区画帯を中心とした中期の集落跡が確認されており、今回の住居跡はこの集落の東端にあつた方である。

奈良・平安時代の遺跡は水沢市杉の堂遺跡（5）、盛岡市飯岡林崎Ⅱ遺跡（20）、石烏谷町日の淵1遺跡（21）、宮古市品田Ⅱ遺跡（10）など数多くの遺跡が調査された。奈良・平安時代の住居跡等が多数発見された杉の堂遺跡では、貯蔵施設と考えられる一部の竪穴状遺構から穀類・豆類・木の実など多量の食料が出土した。志波城跡に近接する飯岡林崎Ⅱ遺跡は平安時代初めの集落跡で、多数の住居跡やそれに伴う大量の炭化米などが発見された。日の淵1遺跡は区画の堀を伴う平安時代の集落跡で、灰軸陶器、墨書・刻書土器など稀有な遺物が出土している。平安時代の大規模な鉄生産遺跡となった品田Ⅱ遺跡では、4年間の調査で200棟を超える住居をはじめ、工房、製鉄が、鍛冶炉、炭窯などの鉄生産関連遺構が多数発見されている。

中・近世の遺跡としては、安代町北の城館跡（15）、前沢町寺ノ上遺跡（36）などで中世城館の調査を実施したほか、軽米町梅の木沢遺跡（12）で近世鉄山、平泉町下構遺跡（40）で近世屋敷の調査を行った。また、前沢町明後沢遺跡群（35）では、奥州藤原氏の時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が発見されている。

平成14年度調査遺跡の概要は以上のとおりであるが、その詳細については、平成15年度以降に発行する本報告書を参照していただければ幸いである。なお、検出遺構、出土遺物とも見込みより少なかった11遺跡については、本書をもって本報告に代えている。

（調査第一課長 佐々木 勝）

I. 国土交通省関係

(1) 仁昌寺Ⅲ遺跡

所在地 一戸町小島谷仁昌寺66-10ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 国道4号小島谷バイパス建設
発掘調査期間 平成14年6月17日～10月4日
調査対象面積 6,250㎡
発掘調査面積 6,250㎡
遺跡番号・略号 J F30-2061・NSJⅢ-02
調査担当者 飯坂一重・原美津子
協力機関 一戸町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一戸・葛巻

1. 遺跡の立地

仁昌寺Ⅲ遺跡はIGRいわて銀河鉄道（旧JR東北本線）一戸駅の南方約4.9km、平糠川によって形成された砂礫段丘の背後の東向き緩斜面に立地している。標高は211～222mで、平糠川との比高は約36mである。現況は畑地・果樹園である。本遺跡の北には沢を隔てて中屋敷上遺跡、南東には今年度までに調査した仁昌寺遺跡、仁昌寺Ⅱ遺跡、五月館跡が近接している。

2. 調査の概要

検出した遺構は竪穴住居跡6棟、土坑45基、集石遺構（平安？）1基である。

＜竪穴住居跡＞ 調査区北部で6棟検出された。重複や削平により壁・床が壊されているものが多いが、平面形はほぼ円形で、規模はおよそ4～5mと推測される。時期は出土遺物から判断して、中期後葉から後期初頭の間に属するものと思われる。炉は5棟で確認され、石囲炉3基、石組複式炉1基、土器埋設複式炉1基である。

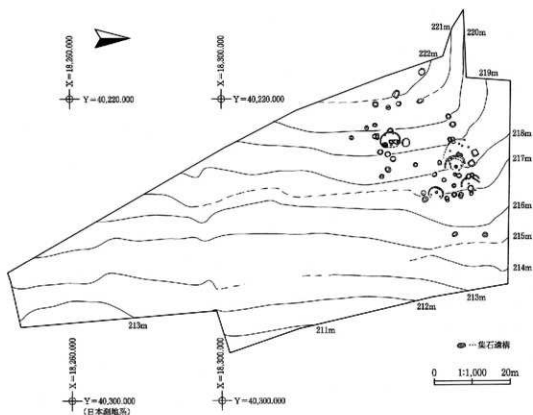
＜土坑＞ 調査区北部を中心に45基検出された。平面形は円形を基調とし、断面形は皿状26基、ピーカー状12基、フラスコ状7基である。個々の住居跡との関連性は明らかではないが、周辺に位置している。

＜集石遺構＞ 被熱した礫の集合が、竪穴住居跡精査中に検出された。礫の広がり約1.5×1.2mの不整形で、それらの礫を取り除くと黄土が形成され、一部レンガ状に硬化していた。周辺から刀子、鉄滓が出土しており、何らかの鍛冶施設であったことが推測されるが、壁と床はかろうじて埋土断面で確認できただけで、全体像は把握できなかった。形状は不明であるが、断面から推測するに、およそ5.4×3.1mの広がりであったと思われる。時期は周辺から土師器壺が出土していることも考え合わせ、平安時代頃のものである可能性が高い。

＜出土遺物＞ 今回の調査では、縄文時代中期後葉～後期初頭と晩期の土器・石器・土製品、土師器、鉄製品・鉄滓、古銭、近世～近代の陶磁器である。出土量は全体で大コンテナ約3箱分と、遺構数に比べ極めて少ない。竪穴住居跡内に小～中形の小ぶりの土器が多く残されているのも特徴であろう。床あるいは床から出土するもののほか、炉の掘り込み部から小形の壺と磨・敷石が、また住居跡の壁際から赤色顔料が入った小形の壺が出土している。

3. まとめ

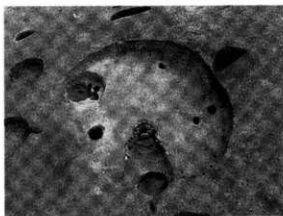
今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡が6棟検出された。重複の状況と出土遺物から、数時期にわたり断続的に居住地になっていたことがうかがえる。現況の階段状地形を造成するために大きく削られており、段差部分では遺構は少なかった。遺構の配置を調査区全体の地形と合わせ見ると、北部は尾根状地形に遺構が集中しており、この尾根沿いに調査区外へ集落が続いていくものと推測される。調査区南～中央部は緩やかな落ち込み地形であり、遺構は確認されず遺物も少量であった。



仁昌寺Ⅲ遺跡遺構配置図



調査区遠景



竪穴住居跡

仁昌寺Ⅲ検出遺構

(2) ^{きつきたてあと}五月館跡

所在地	一戸町小鳥谷字上里47-13ほか
委託者	国土交通省東北地方整備局 岩手工事事務所
事業名	国道4号小鳥谷バイパス建設
発掘調査期間	平成14年4月11日～6月28日
調査対象面積	7,942㎡
発掘調査面積	7,942㎡
遺跡番号・略号	JF40-0005・STT-02
調査担当者	飯坂一重・原美津子
協力機関	一戸町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一戸・葛巻

1. 遺跡の立地

五月館跡は、IGRいわて銀河鉄道一戸駅の南方約5.3km、八戸自動車道一戸インターチェンジの南方約7.7kmの地点に位置し、国道4号と町道（旧奥州街道）に挟まれた丘陵部に立地している。五月館の南側は平権川の断崖を呈し、東側は数段の急斜面、北側もV字形の断崖、西側は狭い鞍部から山地に続いている。調査区の標高は約188～234mである。遺跡の現況は山林であるが、東側下段は畑地である。調査区のうち北東向きの斜面は、昭和50年代までぶどう畑として利用されていた。

2. 調査の概要

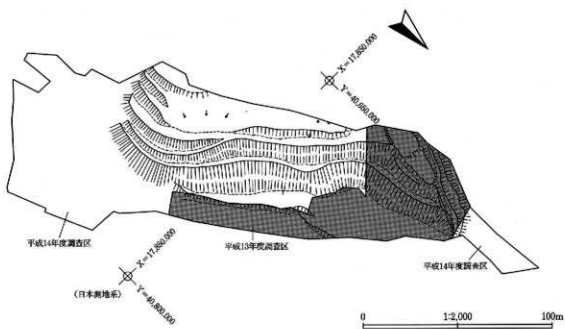
五月館跡の調査は平成13年度から12,450㎡を対象として開始され、昨年度は4,508㎡を終了している。今年度は南東側の7,942㎡の調査を行った。今回の調査で検出した遺構は土坑4基である。また、自然地形の曲輪状平坦地を7箇所確認している。調査区南側の国道に接した低地部分の調査は、地表観察とトレンチ調査を行った。その結果遺構は確認できなかったため、これをもって調査終了としている。

<土坑> 4基検出された。3基は西側上段部調査区境付近から検出された。縄文時代のもと思われる。他の1基は調査区中央部から検出された。平面形は4基とも円形で、時期は不明である。

<曲輪状平坦地> 自然地形によるなだらかな斜面となっている平坦地である。北東側に向かって階段状に7箇所確認した。

3. まとめ

今回の調査で五月館跡は縄文時代と中世の複合遺跡であることが明らかになった。五月館は、『二戸志』によると延暦・弘仁期の遠田公五月に由来するといわれ、遠田公五月が坂上田村麻呂の征討軍に協力し、その軍事拠点として利用されたと伝えられている。また、天正年間に小鳥谷摂津が居城した小鳥谷館が五月館ともされているが、文書による資料はない。今回の調査では中世城館に関する遺構は確認できなかった。しかし調査区外の上段部に堀跡を確認しており、館が存在した可能性があると思われるが、その範囲は上段部に限られるものと推定される。



五月館跡遺構配置図



調査区全景



基本土層



土坑



完掘平面

五月館跡検出遺構

(3) ちからもち 力持遺跡

所在地	下閉伊郡普代村第16地割字天拝坂 28番地5ほか
委託者	国土交通省東北地方整備局 三陸国道工事事務所
事業名	普代バイパス
発掘調査期間	平成14年4月15日～11月26日
調査対象面積	2,400㎡
発掘調査面積	1,000㎡
遺跡番号・略号	J G92-0137・TM-02
調査担当者	星 雅之・丸山直美・菊池 賢 駒木野智寛・斎藤麻紀子・石崎高臣
協力機関	普代村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中野田

1 遺跡の立地

力持遺跡は、三陸鉄道北リアス線普代駅の北約2km、力持海岸から西に約1.5km、力持川の河口付近に見られる小起伏山地が解析された小規模な谷底平野地形に立地する。標高は55～68mである。調査区の現況は畑地、林、荒地、宅地である。

2 調査の概要

今年度検出した遺構は、竪穴住居跡111棟、土坑123基、柱穴土坑30基、焼土遺構14基、列石1基、集石6基である。検出された遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉～中期末葉に比定される。

<竪穴住居跡> 今年度の調査区全域から検出されており、旧地形的にみて比較的急傾を呈する場所や、等高線を切る方向に竪穴の長軸を持つように構築された竪穴住居跡が珍しくない。主体となる時期は中期前葉～中葉である。前期と中期に大別して記述する。

縄文時代前期は、平面形が方形基調を中心に円形を呈するものが少数見られる。規模は3m程の小形から10mを越える大形のものがある。遺物は土器や石器を主体に多量に出土する。炉を持つものは地床炉で、壁際に壁柱穴若しくは壁溝が巡るものが多い。時期は、中環テフラ降下以前（土器から大木2式期と推定される）と降下後（円筒下層式期全般）に大別される。特記事項として、前期中葉の1棟からベンチ状の構造を持つものが確認されている。

縄文時代中期は、①初頭～中葉（円筒上層a式～大木8a式期）と②後葉～末葉（大木9～10式期）に大別される。主体は前葉～中葉である。①の時期について、平面形は長方形や隅丸長方形を呈するいわゆるロングハウスを主体とするが、大木8a式の段階で卵形、円形、不整形円形などが現れ、ロングハウスは次第に減少する。規模は3～12mまでのものが見られる。炉は竪穴の構造によりその位置に相違があるものの、竪穴の長軸線上にのることでは規則性が窺える。種類は石囲炉と石囲埋設土器炉と地床炉があり、炉を複数基持つ竪穴住居跡もある。概して花崗岩を偏平な形に整形した後、石の下方（地面に埋め込む側）をさらに先鋭味に仕上げ炉石とし、床面に炉石の形状に則した掘り方を設けて配置している。

②の時期について、平面形は円形を基調とし楕円形・多角形があり、規模は3.5～9mのものがある。炉は、複式炉と石囲炉があり、複式炉を主体とする。

<土坑> 123基が検出されている。基本的には調査区全体に点散的に分布する傾向であるが、調査区西端部の急斜面地付近に70基近くが密集するなど、その占地には考察の余地があり検討課題の一つである。

規模は直径1.5m以上、深さ1.5m以上を測る人形のフラスコピットが多い。底面の中央に単独で副穴を持つものと副穴から溝が壁に向かって延びるものがあり、溝の本数は1～4本まで見られる。

<柱穴状土坑> 30基検出された。全て小形のもので、竪穴本体は破壊された竪穴住居跡に伴う柱穴と推定される。

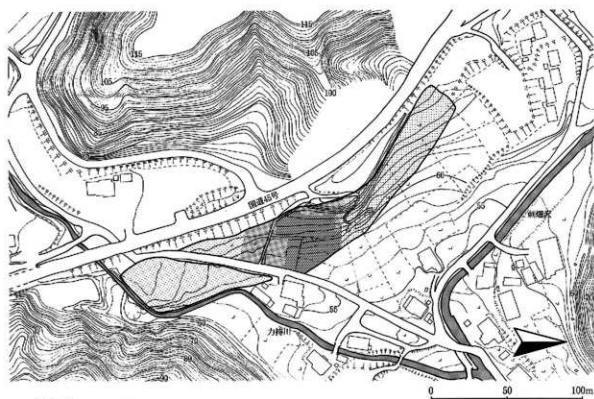
<焼土遺構> 調査区中央部で14基検出された。焼土の広がる規模は、30～120cmまでがある。周辺の状況から判断して、屋外炉などではなく、竪穴本体は消失した竪穴住居跡の炉である可能性が高い。

<列石・集石> 列石としたものは、中期前葉の竪穴住居跡の覆土中に大きめの礫が直線的な配列を見るものに命名した。集石としたものは、中期前葉～中葉の竪穴住居跡の覆土中に大きめの礫が集められているものに命名した。その内の3基については、集石の中央付近から焼土を検出している。集石の下部から土坑を確認したものはない。腐屎墓的な性格の遺構である可能性も考えられ、検討を要する。

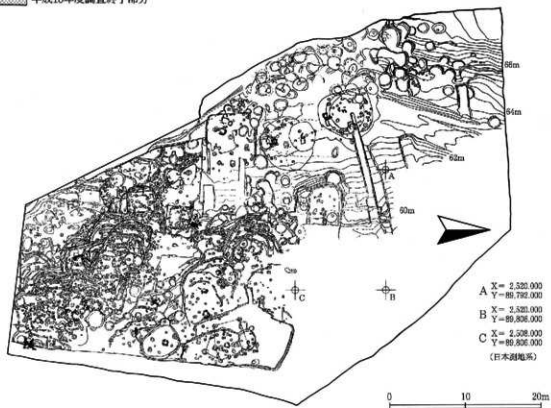
<出土遺物> 遺物は、縄文土器300箱分(大コンテナで換算)、土製品16点、石器2,698点、石製品137点、チップ・フレーク約12箱分、琥珀数十点、黒曜石数点、鹿角製ヘラ1点、獣骨類、貝類である。土器は縄文時代早期の物見台式に相当する小片が数点出土している以外は、前期中葉から中期末葉のものである。大木8a式が最も多く、次いで円筒上層b～c式、円筒下層d式の順となる。土製品はミニチュア土器、円筒状土製品などである。石器は石鏃、尖頭器、石匙、石錐、石鏃、削搔器、ピエス・エスキュー、異形石器、磨製石斧、半円状扁平打製石器、磨石、敲石、石皿、台石、凹石など多種にわたる。石製品は玦状耳飾り、石冠、石刀、石棒、有孔石製品、翡翠製ペンダントなどである。琥珀は全て小破片で、製品での出土は確認されていない。獣骨はシカ、イノシシ、苧サメ・ホウジロウサメの骨等である。貝類は岩礁性のムラサキインコなどが出土している。

3 まとめ

今年度の調査により、集落の中心部分の様相がより明らかとなってきた。現段階での遺跡の空間占地などについて、2年間の調査成果からまとめてみたい。合わせて来年度調査に向けての課題を幾つか述べることにする。竪穴住居跡は、前期全葉及び中期末葉が一段高い面に相当する調査区中央より西側に占地されているが、本遺跡が最も隆盛したと思われる中期前葉～中葉においては、その占地が大幅に広がりをみせる。後葉については竪穴住居跡自体の検出数も少なくははっきりしない。フラスコピットについては前述したとおりであるが、時期により集中的に作られる範囲が異なる可能性も考えられる。捨て場について、昨年度の調査略報には北部・東部捨て場の2箇所と記載したが、今年度一部精査に着手した東部捨て場と呼称した空間は中期中葉を主体とした竪穴住居群であることがわかった。本校をもって訂正するとともに、遺物の廃棄傾向がより強くなったと判断される。中期中葉までは大規模な捨て場の一定の空間を形成せず、廃屋に廃棄される様相であるが、その後の中期後葉～末葉の捨て場の有無については現段階では明確ではない。墓域についてその所在や実態は不明のままであるが、今年度竪穴住居跡の覆土中で検出された列石・集石遺構に腐屎墓的な性格を検討する余地がある。また、2年間で約550箱分の土器が出土し、平成15年度調査においても多量の出土が見込まれる。円筒式土器と大木式土器の並行関係などの問題に対して、寄与する資料になると思われる。



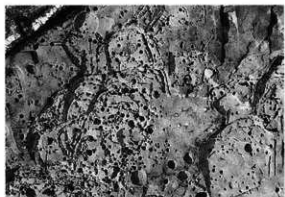
- 平成15年度調査予定部分
- 平成14年度調査終了部分
- 平成13年度調査終了部分



力持遺跡遺構配置図



遺跡全景



竪穴住居跡群(前期～中期)



竪穴住居跡群(中期)



石囲炉を2基持つ竪穴住居跡(中期)



フラスコビット群

力持遺跡検出遺構

(4) 滝の沢地区遺跡群

所在地 北上市大堤地内
委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 国道4号拡幅事業
発掘調査期間 平成14年9月2日～12月6日
調査対象面積 1,646㎡
発掘調査面積 1,646㎡
遺跡番号・略号 ME75-0373・TS-02
調査担当者 村木 敬・青山紀和
協力機関 北上市教育委員会



1. 遺跡の立地

滝の沢地区遺跡群は、北上駅から南西に約3kmに位置し、和賀川によって形成された河岸段丘上に立地している。標高は78m前後で、現況は宅地・畑地である。

2. 調査の概要

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居5棟・埋設土器6基・集石遺構3基・溝1条・陥し穴1基・土坑12基・焼土7基・柱穴状ピット196基・包含層1箇所、時期不明の柱穴状ピット14基検出された。

<竪穴住居跡> 縄文時代前期末から中期初頭に属する竪穴住居が5棟検出された。このうち住居の壁が残存し平面形を捉えられたもので円形を呈するものが2棟、楕円形を呈するものが2棟ある。炉跡が確認された2棟は地床炉を伴うものであった。それ以外は焼土と柱穴の配置で住居と捉えられたものが1棟ある。

<埋設土器> 調査区北側で6基検出した。包含層中から4基、地山において2基確認した。その中には、石錘が5点埋納されているものや入れ子があるものがあった。

<陥し穴> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ約1m×幅0.7m、深さ1.2m、底面中央に逆茂木痕を有するものである。

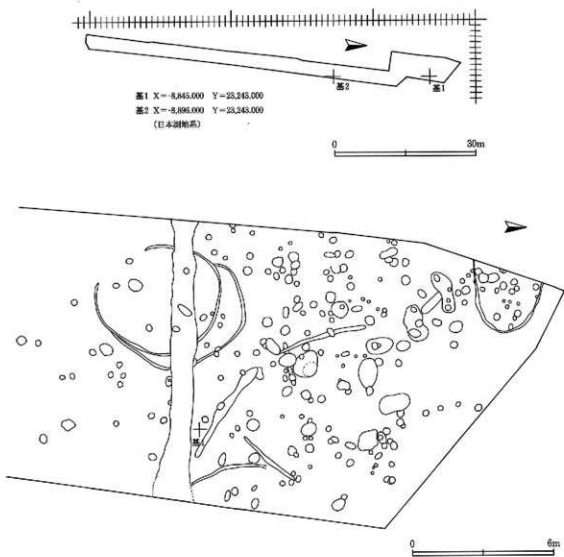
<柱穴状ピット> 調査区南側と中央で時期不明のものが14基検出された。調査区北側では縄文時代に属する196基が確認され、上記の竪穴住居内に伴うものも含めている。

<包含層> 調査区北端で確認され、削平を受けずに残っていた面積約190㎡がそれに当たる。遺物出土層は4層存在しており、層厚は約30～50cmである。遺物は主に上層から中層にかけては調査区全面から、下層から地山にかけては中央より北側でまとも出土しているのを確認した。

<出土遺物> 遺物は主に包含層中から出土したのもので、土器が中コンテナ74箱、石器（礫石器を含む）が中コンテナ71箱出土している。また、土製品は土偶や耳栓、石製品は缺状耳飾や垂飾などがある。

3. まとめ

今回の調査によって、縄文前期末から中期初頭の遺構や遺物が確認できた。従来から北上市教育委員会によって得られた調査成果と同様のものではあった。今後の整理はそれらの成果と比較検討しながら行い、その様子を明らかにしていきたい。



滝の沢地区遺跡群 グリッド配置図(上)・遺構配置図(下)



滝の沢地区遺跡群検出遺構

(5) 杉^{すぎ}の堂^{どう}遺跡

所在地 水沢市神明町2丁目58-4ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 国道4号水沢東バイパス
発掘調査期間 平成14年4月16日～9月4日
調査対象面積 6,626㎡
発掘調査面積 6,626㎡
遺跡番号・略号 NE27-0100・SD-02
調査担当者 丸山直美・齋藤麻紀子
協力機関 水沢市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

杉の堂遺跡はJR東北本線水沢駅の東方約1.6km、東北新幹線水沢江刺駅の西方約2.2kmの地点に位置し、扇状地の北東部扇端に形成された水沢高位段丘の北向き段丘崖縁辺に立地する。遺跡の標高は41～43mで、東側を南流する北上川との比高は11mほどである。

2. 調査の概要

杉の堂遺跡は昭和55年に早稲田大学の桜井清彦氏らによる調査が行われて以来、縄文時代晩期から古代を中心とする遺跡として周知されている。今年度検出した主な遺構は、竪穴住居跡25棟・竪穴状遺構4棟・土坑8基・方形周溝3基（以上古代）、溝跡1条・陥し穴状遺構1基（以上時期不明）である。

<竪穴住居跡> 調査区全域より25棟（奈良10棟、平安15棟）を検出した。平面形はすべて方形を基調とし、規模は一辺約3～7mを測る。カマドの形態は煙道がほぼ平坦な角度をもって煙出し部へと延びるものが多く、壁面付近で短く立ち上がるものも少数ながら存在する。平安時代の住居跡では、断面が長方形を呈する「平角材」を主柱穴として用いたものが1棟確認されている。

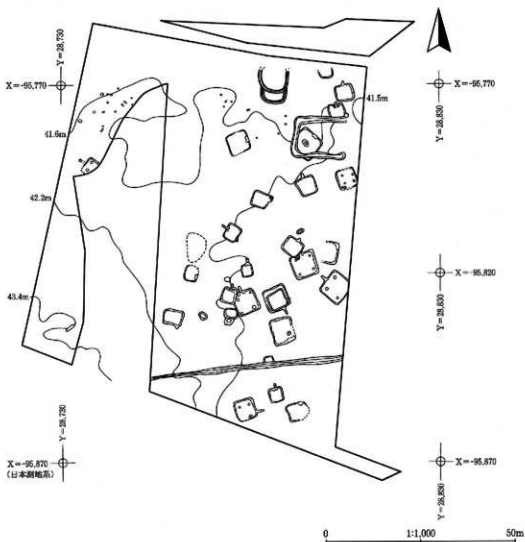
<竪穴状遺構> 調査区南～中央部にかけて4棟を検出した。うち1棟の床面から米や雑穀類（ソバ・アワなど）、豆類、クルミ、トチなど堅果類が出土している。床面中央部からは大甕が出土しており、これらのことから食料庫といったような性格が想定される。

<方形周溝> 調査区北東側より3基検出した。このうち1基は平面形がカタカナの「コ」の字形をしており、長さ12×10m、幅1mを測る。埋土下位～上位にかけてはかわらけが10個体以上出土しており、灯明皿として使用された痕跡を認めるものが存在する。

<出土遺物> 今回の調査で出土した遺物の総数は、中コンテナ35箱分である。内訳は土師器、須恵器、かわらけ、陶磁器、石器、鉄製品、古銭で、ほとんどが遺構内からの出土である。

3. まとめ

今回の調査では、杉の堂遺跡の載る段丘北側縁辺が、主に奈良・平安時代の居住域として利用されていたことが判明した。なかでも平安時代の竪穴住居跡において県内では検出例の少ない「平角材」を用いた柱穴の存在が確認されたこと、竪穴状遺構から炭化種子がまとまって出土したことは特筆される。



杉の堂遺跡遺構配置図



調査区全景(北から)



遺物出土状況

杉の堂遺跡検出遺構・出土遺物

おもしろずかみ
(6) 大清水上遺跡

所在地 胆沢郡胆沢町若柳字慶存ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
胆沢ダム工事事務所
事業名 胆沢ダム建設
発掘調査期間 平成14年4月11日～11月19日
調査対象面積 12,000㎡
発掘調査面積 5,000㎡
遺跡番号・略号 NE22-2286・OSK02
調査担当者 佐藤淳一・立花 裕
協力機関 胆沢町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 焼石岳

1. 遺跡の立地

大清水上遺跡はJR東北本線水沢駅から西へ約20km、胆沢川によって形成された段丘面に位置する。標高は約280mで、調査前の状況は水源涵養保安林として植林された林地ならびに荒地であった。

2. 調査の概要

調査は平成12年度から行われており、今年度は12,000㎡が調査区として設定された。確認された遺構は竪穴住居跡27棟、土坑62基、陥し穴40基、埋設土器1基、捨て場2箇所などである。

<竪穴住居跡> 昨年度までに検出されていたものを含め、全部で27棟検出し、20棟の調査を終了した。これらの主体となるのは大形住居跡で、平面形は楕円形をなすもの、長方形（隅丸長方形含む）をなすものと大きく二種類に分けられ、規模については長さ（長軸）10～15m前後のものが中心である。周溝の巡り方や覆土の状況などから、これらの住居跡は重複しており、ほぼ同じ場所で建てかえもしくは拡張が行われたことがうかがわれる。

一方、今年度調査によって新たに小形の竪穴住居跡の存在が明らかとなった。これらは、①平面形は円形で規模は直径3～4m程度、深さ30～40cm程度である。②柱穴は住居の中心部分に1基だけ確認される。③炉（火を焚いた施設）を持たない。④建てかえや拡張を行っている。などの特徴を持っている。さらに、これらの住居跡が、広場の周囲に円環状に配置される大形住居帯に隣接してさらにその外側の帯域に立地しているということを確認した。炉を有していないことから、この遺構が住居として認定されるべきかどうか問題となるが、他の貯蔵穴や陥し穴などの遺構と比べ、規模や構築状況などにおいて明らかにその様相が異なっているため、現段階では住居跡と判断している。この小形竪穴住居跡は昨年、一昨年もいくつか確認しており、立地条件や規格などについて明確な規則性があまり認められないと判断していた。しかしながら、今回の調査によって小形竪穴住居跡の立地にかかわる特徴や事実がある程度明らかとなったことから、大形住居跡と関連性の高い建物であるという推測ができる。遺構数は、集落における全住居跡数70棟中15棟を占める。

<土坑> 63基検出し、40基の調査を終了した。竪穴住居跡に隣接もしくは重複して発見されることが多い。貯蔵穴には底面に排水用と思われる溝と中央部に小穴を有するものがある。そのほか掘り込みが浅く、覆土

に大量の遺物を含み、遺物廃棄を連想させる土坑も確認している。

<陥し穴> 40基検出し、33基の調査を終了した。内訳は溝状をなすものが8基で、上端が楕円形で底面が長方形をなすものを25基確認した。底面が長方形をなす陥し穴は、底面に複数の小穴を持つタイプ、底面中央に1つの小穴を持つタイプ、底面に小穴を伴わないタイプという三種類が確認されている。このほか、円形をなし底面中央に小穴を1つ持つものも確認している。陥し穴のうち竪穴住居跡と重複しているものほとんどは、竪穴住居跡の覆土を掘り込んで構築されており、住居跡よりも新しい時期のものが多い。

<埋設土器> 今年度調査で1基確認されており、昨年度までと合わせると合計7基にのぼる。これらはいずれも大形住居内の壁際や壁に隣接した外側から発見されており、住居跡との関連を考える上で興味深い。

<捨て場> ため池に近い南側の調査区で2箇所確認した。1箇所は大形住居帯の中で、住居跡(408号住)と重複しており、比較的狭い範囲(5×5m程度)に集中的に遺物が廃棄されていた。もう1箇所は大形住居帯の南側で、ため池に向かう斜面で確認されており、いずれも土器をはじめとする人製の遺物が、折り重なるようにして出土した。この捨て場は、調査区のさらに南側(ため池)まで続いているものと考えられるが、掘り進むと湧水してしまうため、その範囲については確認することができなかった。

<出土遺物> 大コンテナで土器は65箱、石器は60箱、その他(土製品、石製品等)1箱の出土である。土器は縄文時代前期後葉の大木5式が主体である。地文は燃糸文が圧倒的に多い。石器に関しては磨石、凹石、石皿、石鎌などの礫石器が計1,000点、剥片石器は、定形・不定形の製品が計600点余り出土し、そのほかにフレイクが大コンテナで計3箱出土している。土製品については有孔土製品(土甕)2点、土偶3点のほか両面に刺突や沈線を施した板状の製品(上偶の一部の可能性もある)が1点出土している。石製品では磨製石斧、石剣、袂状耳飾りが計20点のほか、一昨年も出土した燕尾形石製品が1点出土した。

3. まとめ

今年度の調査結果は、次のようにまとめられる。

①広場を中心とする集落の範囲がほぼ確定された。

広場を中心とする南北方向への集落(ここでは住居域をさす)の広がり、半径50~60m程度であることが判明した。この数値は、昨年度までの調査によって明らかとなっている東西方向への広がりとはほぼ同様であり、この範囲内において、広場を中心として同心円状に住居が展開する集落であることが明らかとなった。

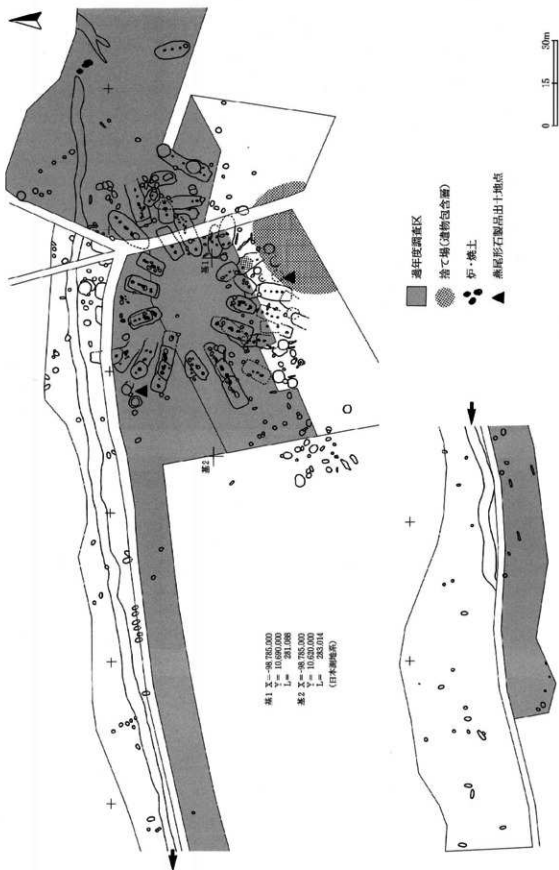
②小形竪穴住居跡の存在が明らかとなった。

仮をもたず、中央部に1本だけ柱穴があるなど他では類例のない特徴を持つ小形の竪穴住居跡が確認された。この小形竪穴住居は、広場を取り囲む大形住居帯のさらに外側に隣接する形で配置されている。

③遺物包含層(捨て場)の存在が明らかとなった。

ため池に近い南側調査区の斜面で、大量の遺物を含んだ土層、いわゆる「捨て場(遺物包含層)」を確認した。捨て場の存在は、この集落が日常生活を営んでいた具体的な証拠であり、大清水上遺跡の集落が「定住集落」として機能していたことを裏付ける貴重な資料といえる。

今回の調査の結果、一昨年度から続く一連の遺構群の様相がほぼ明らかとなった。これらの調査成果は、当時の集落規模や集落機能などを考えていく上で貴重な資料になるものと思われる。3ヶ年分の遺構数の合計は竪穴住居跡約70棟、土坑・陥し穴約300基を数え、遺物量は大コンテナで土器・石器合わせて250箱にのぼる。調査は来年度まで継続される予定であり、遺跡のさらなる解明が期待される。



大清水上遺跡遺構配置図



遺跡遠景



大形住居跡



小形住居跡



捨て場遺物出土状況



埋設土器出土状況

大清水上遺跡検出遺構・遺物出土状況

かわさき さくぎてい
(7) 河崎の柵擬定地

所在地 東磐井郡川崎村門崎字鏡子
236-1 ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 床上浸水対策特別対策事業
発掘調査期間 平成14年4月16日～11月29日
調査対象面積 10,000㎡
発掘調査面積 1,300㎡
遺跡番号・略号 O E09-1173・KSG-02
調査担当者 瀧 浩二郎・鈴木裕明
協力機関 川崎村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一関・千厩

1. 遺跡の立地

本遺跡は川崎村役場の西北西約1kmに位置し、北上川左岸の自然堤防上に立地している。調査前の遺跡の状況は畑地である。

2. 調査の概要

本年度検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡が2棟、土坑29基、溝状遺構4条、掘立柱建物跡1棟、柱穴101基、炉跡・焼土遺構4基、埋設土器3基である。

<竪穴住居跡> 調査区中央部で2棟検出されている。1棟はカマド付近のみの残存であるが、もう1棟は残存状況が良く、全体の規模は3.2×3.0m、地面から床までの深さが35～40cmあり、形状は方形を呈する。カマドは東側壁面に設けられているが、煙道は東壁面・北壁面の2箇所があり、当初北壁中央部に設けられていたカマドが住居を拡張した際に東壁に移設されたものと考えられる。遺物は土師器環・甕の破片が多く、須恵器環・甕の破片は少ない。遺構の時期は出土遺物から平安時代に属する。

<掘立柱建物跡・柱穴> 調査区中央部と東部から柱穴が101基検出されている。11基は調査区西部の縄文面からの検出である。調査区中央部で検出された建物跡の規模は 奥行4.2×桁行6mで、時期は検出された面から近世以降と思われる。

<土坑> 29基検出されている。形状は円形、楕円形、長方形を呈する。規模は最大で開口部径2.42×2.08m、底径2.2×1.8mある。深さは50～70cmのものが多い。遺構の時期は縄文時代が5基、平安時代が1基で他は近世である。遺構の用途については不明である。

<炉跡・焼土遺構> 調査区西側の縄文時代後期の面から4基検出されている。このうち1基は複数の石を方形に配置した石囲炉である。焼土やその周辺からは、炭化物とともに獣骨が多量出土している。

<溝跡> 調査区西部、中央部から4条検出されている。長さは最大で18.3m、幅は71cm、深さは約28cmである。時期は近世から近代と思われる。

<埋設土器> 調査区西部から3基検出されている。1基は縄文時代晩期面、他は縄文時代後期面でどれも倒立した状態で検出された。土器内部の埋土から出土した遺物はない。

＜出土遺物＞ 縄文時代の遺物は、土器が大コンテナで140箱、石器が大コンテナで7箱、他に土製品、石製品、炭化した種子、骨角器などが出土している。土器は縄文時代後期前葉から晩期後葉までのもので、大半が遺構外からの出土である。土製品はミニチュア土器、土偶、土製耳飾り、土鏝、土製玉類のほかイノシシ形土製品が1点出土している。石器は凹石、磨石、石皿などの礫石器が計50点、これに対し石鏃、石匙、石鏃などの剥片石器は計1,000点以上を数える。石製品は磨製石斧、石剣、円盤状石製品、石製玉類などが出土している。骨角器は鹿角製の根挟みや鯨の骨で作られた棒状の製品（儀礼用具？）、サメの歯で作られた垂れ飾りなど5点出土している。他に食料としたと思われる動物の骨はシカ、イノシシ、ウサギ、タヌキ等の獣骨が大半で、他に鳥類や魚類の骨が少量出土している。平安時代の遺物は土師器・須恵器が大コンテナ2箱分、他に住居跡から鉄製品（刀子・釘）が出土している。中世の遺物はかわらけが小コンテナ1箱分、他に中国産磁器や国産陶器の破片が少量出土している。かわらけは12世紀末から13世紀前半代のもので遺構には伴わない。陶磁器は中世末から近世・近代までのもので約140点出土している。中世末～近世前半にかけては瀬戸・美濃産陶器と肥前産磁器が多く出土し、18世紀以降になると肥前産陶磁器と大塚相馬陶磁器が多く搬入されたようである。

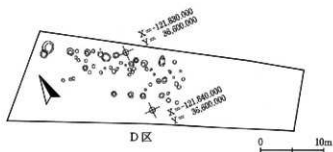
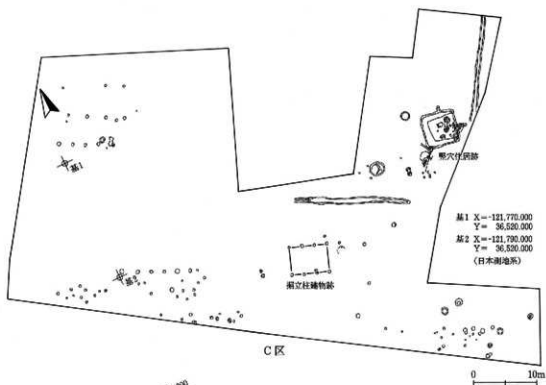
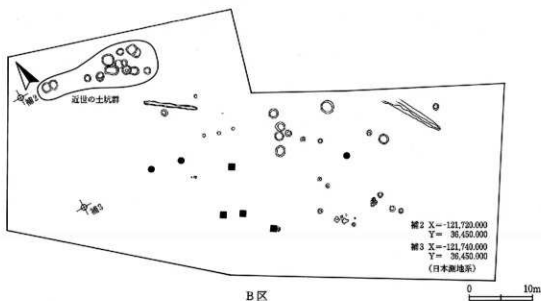
3. まとめ

今回の調査では、11世紀後半、安倍貞任が東野井郡における重要な要としたと伝えられる「河崎の櫓」に伴う遺構・遺物は発見されなかったが、縄文時代から現在に至るまで、断続的に人々に生活の場として利用されていたことが検出した遺構や出土遺物から判明した。縄文時代後期から晩期にかけては、多量の土器や石器の他に炉跡や焼土周辺からは食料にしていたと思われる炭化した種子や動物の骨など、当時の生活の様子を知る上で貴重な遺物が多く見つかっている。平安時代は9世紀の竪穴住居跡を昨年に続き2棟検出し、集落が形成されていたことが確認された。集落の規模や性格の特定については至っておらず、周辺の調査結果を待ちたい。中世のかわらけが出土した周辺からは中国産青磁・白磁の破片や国産陶器が出土している。中世末から近世の遺構検出からは建物を構成すると思われる柱穴が多数検出され、周辺から国産陶磁器、中国産磁器が出土している。

この地は縄文時代以来、北上川の狭窄に伴う度重なる氾濫によって、現在では広大な自然堤防となっており、来年度に継続して調査が行われる調査区中央部の自然堤防上部平坦面～後背面が、本遺跡の中心的空間と推定される。今後の調査では縄文時代の生活の様子を始め、各時代における調査の成果が期待され、本遺跡の性格がより明らかになるものと思われる。



河崎の櫓擬定地調査区配置図



- 凡例
- 土坑
 - 柱礎土器
 - ◎ 土坑
 - 礎石・柱礎遺跡
 - 柱穴

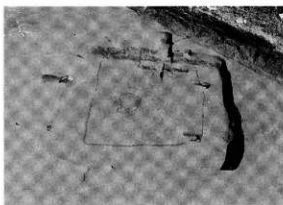
河崎の櫛擬定地遺構配置図



調査区全景



調査B区近景



平安時代の竪穴住居跡



土器出土状況



骨出土状況

河崎の柵擬定地検出遺構・出土遺物

II. 公団・公社関係

(8) 矢盛遺跡第3次調査

所在地	盛岡市飯岡新田第2地割才川
委託者	地域振興整備公団 手取総合 岩手総合開発事務所
事業名	盛岡市新都市計画整備事業
発掘調査期間	平成14年6月3日～8月6日
調査対象面積	1,560㎡
発掘調査面積	1,560㎡
遺跡番号・略号	LE26-0139・IYM-02-3
調査担当者	半澤武彦・久慈泰彦
協力機関	盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南約3kmに位置し、雫石川南岸の河岸段丘面上に立地している。標高は122m前後で、調査前の土地利用状況は旧水田・住宅地を埋め立てたゲートボール場および公共用地となっていた。調査区は1～1.5m程度の盛土が施されているが、これは20年ほど前に存在した旧郡南村（現盛岡市）村営住宅の基礎および廃材等の埋め立てによるものであり、雑物が大量に含まれ調査には困難を極めた。調査区の北東側は、前年度まで継続して調査が行われた飯岡才川・細谷地両遺跡と隣接している。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構が13基、中世～近世のものと思われる素掘りの井戸跡が1基、近世の掘立柱建物跡が3棟、および時期不明の土坑が2基となっている。

<陥し穴状遺構> 調査区の中央を貫く旧河道（古代以前のものとは推定）の西側において、旧河道と並行するように、平面形が溝状で横断面形が緩やかなV字またはU字状を呈する縄文時代の陥し穴状遺構が13基検出された。開口部の幅は長軸2.9～3.8m、短軸0.3～0.6m、深さ0.7～1.1mで、断続的に一定の間隔において分布する様子がうかがわれ、開口部から底部に向かって長軸方向にのみ底が広がるいわゆるフラスコ形をした形態のものが多い。いずれの遺構からも出土遺物はなく逆茂木の痕跡等も見られなかった。

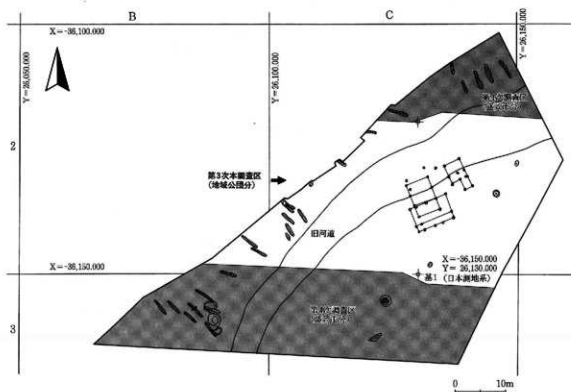
<井戸跡> 調査区の東端から、開口部径約1.2m、底径約1mの素掘りの井戸跡が検出された。井筒や石組みの痕跡はなく、底部から15～16世紀頃のものとは推定される播り鉢片や近世の木桶の一部が出土した。

<掘立柱建物跡> 調査区中央の旧河道と重なるように、3棟の掘立柱建物跡が検出された。いずれも規模は小さく、小形の家屋または付属小屋としての性格が考えられ、上述した素掘りの井戸跡や、並行調査の第4次調査区域内から検出された底部に木柱をもつ近世の井戸跡も、本建物跡との関連が推察される。

<出土遺物> 井戸跡底部から中世（15～16世紀頃）のものと思われる播り鉢片や近世の木桶の一部、および掘立柱建物跡の柱穴内部から近世の肥前産と思われる陶磁器片が出土している。

3. まとめ

本遺跡の延長上にある細谷地遺跡第5次調査区においても、旧河道に沿って同様な遺構の分布状況が見て取れることから、未調査の隣接地域でも旧地形を反映した類似する遺構分布が展開していく可能性が高い。



陥し穴状遺構 (縄文)



井戸跡 (中世～近世)



獨立柱建物跡 (近世)



完掘全景

矢盛遺跡 3次遺構配置図及びひ検出遺構

(9) ^{くまどう}熊堂 B 遺跡第14次調査

所在地 盛岡市本宮字稲荷45-2 ほか
委託者 地域振興整備公団 手取総合
岩手総合開発事務所
事業名 盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間 平成14年6月17日～9月6日
調査対象面積 1,954㎡
発掘調査面積 1,954㎡
遺跡番号・略号 LE16-2118・OKO-02-14
調査担当者 石崎高臣
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

熊堂B遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南西約2km、雫石川右岸の河岸段丘上に所在しており、北緯39度40分・東経141度8分付近に位置している。今次調査区は東西約50m・南北約105mの範囲にわたり、大きく北区・中央区・南区の3つに分かれる。南区の東西は、並行して調査が行われた15次調査区と隣接している。標高は124mで、雫石川との比高は約6mとなる。調査以前は宅地だった。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡6棟、竪穴状遺構1棟、土坑11基、溝6条である。

<竪穴住居跡> 北区・中央区で各1棟、南区で4棟を検出した。おおよその床面積は、南区の1棟が約22.5㎡、他は約16.0㎡・10.5㎡(2棟)・12.3㎡と、1棟が中形であるものの、他は小形に分類される(北区の1棟は、その北半が削平のため床面積は不明)。カマドは、北区の1棟が西向きである以外は、他は南東もしくは東向きである。煙道は、北区の1棟が掬り貫き式で、他は掘り込み式である。時期については出土遺物および遺構の切り合い関係から、北区の1棟が奈良時代、他は平安時代と考えられる。中央区の1棟のカマド燃焼部から土師器環が倒位にて3点重ねられた状態で出土している。また、一番下の土器の直下には17.1×15.4×9.2cmの石が置かれていた。一部の赤い変色部は被熱痕で、支脚として使用されたものと考えられる。3点の環は支脚の高さを調節するために用いられたのであろう。埋土の状況から、自然堆積ではなく、人為的に埋め戻されたものと判断される。

<竪穴状遺構> 南区で1棟検出した。平面形は、長軸2.74m、短軸2.53mの正方形に近い長方形である。遺構の中央部に、88cm×62cmの楕円形を呈する、深さ43cmのピットが掘りこまれている。出土遺物から平安時代に属すると考えられるが、ピット及び建物の性格については不明である。

<土坑> 11基を検出した。規模は、直径が約40cm～2.10m、深さが約10～70cmである。平面形は、円形・楕円のものも多く、不整形のものもある。2基以外から遺物は出土しておらず、また時期を比定しうる遺構との切り合い関係もほとんどないため、大部分については具体的な時期は不明である。遺物が出土している2基については平安時代のものと考えられる。

<溝> 6条を検出した。東西方向にほぼ並行する3条は、本次調査と並行して進められた15次調査区でも

検出されている。本次調査区での規模は、長さ約10m（南の1条は1m）、幅約70cm～1m、深さ約10～30cmである。南北方向の溝2条の規模は、長さはいずれも約20m、幅は約75～95cm・約70～180cm、深さはいずれも約10～30cmである。東西方向の3条は15次調査区で奈良時代の住居をきっており、また中央の埋土上層から9世紀代の土器が出土していることから、8世紀末～9世紀前半に機能していたものと考えられる。南北方向の2条は、ともに東西方向の溝2条と平安時代の竪穴住居跡に切られているので、奈良時代のものと考えられる。

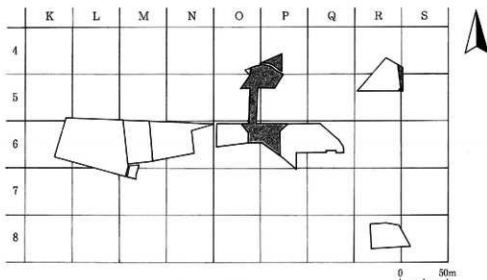
<その他> 中央区で検出された竪穴住居跡の南側の遺構検出面から、ロクロ成形された土師器甕が口を北に向けて横倒しになった状態で出土した。中には6.3×8.4cmの石が入っていた。土師器甕は10世紀代のもので、体部外面に正位で「生万」と焼成後に刻まれている。周辺には掘方などは確認できなかったが、刻書が施されていることから何らかの祭祀が執り行われたことを想定し、それに関する遺構と判断した。

<出土遺物> 縄文土器、土師器・須恵器、鉄製品、石器が出土している。ただし、大部分は土師器で、破片まで含め概数であるが、48.3kgが出土している。器種は、土師器が坏・甕を中心とし、他に高台付坏が数点見られるのみである。須恵器については大甕が中心である。ほとんどが破片であるが、中央区の竪穴住居跡から出土したものは口縁部から体部にかけてのものである。復元推定口径は約22cm。鉄製品は4点出土しているが、刀子と釘の他は鏝の付着が著しく、どのような製品かは不明である。墨書土器・刻書土器が7点出土している。

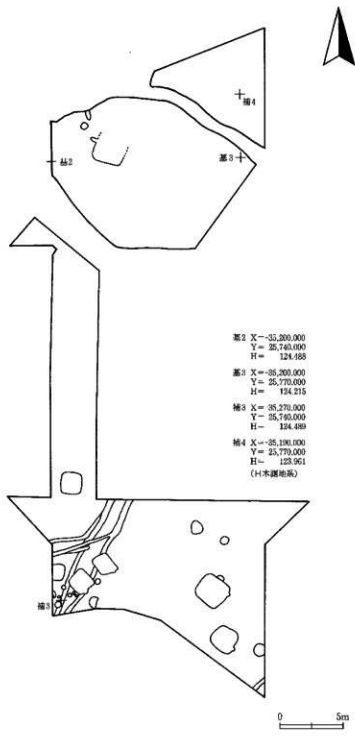
3. まとめ

今次調査では主に平安時代の竪穴住居跡を中心とする古代の集落を検出した。竪穴住居跡の特徴としては、おおむね床面積が狭い小形のものが多いということがあげられる。従来より、岩手県下の古代集落では平安時代となる9世紀代に入ると、住居が小形化する傾向があることが指摘されている。今次調査では、そうした指摘を確認できたといえる。

北区で検出された竪穴住居跡は、旧河道が埋没した上に占地している。当住居跡は奈良時代に属するので、河道はそれ以前に埋没していたことになる。本遺跡の西方2kmに位置する志波城は、雫石川の氾濫でしばしば水害を被っていたという（『日本後紀』弘仁2年（811）閏12月辛丑条）。もちろん、本遺跡で検出された旧河道が雫石川のそれでないことは明らかだが、本遺跡周辺は、9世紀初頭以前から、雫石川に注ぐ小河川の氾濫や河道の移動が活発だったのではないかと推測される。



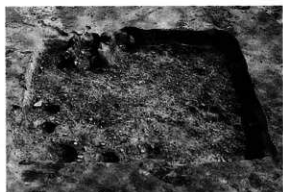
調査区範囲及びグリッド配置図



熊堂B遺跡第14次調査遺構配置図



調査区全景



中央区検出竪穴住居跡(上)及び
カマド内土器出土状況(下)



「生万」銘刻書土師器(上)及び
出土状況(下)

熊堂B遺跡第14次調査検出遺構・出土遺物

(10) ^{しまだ} 島田Ⅱ遺跡

所在地	宮古市大字八木沢第四地割ほか
委託者	岩手県住宅供給公社
事業名	宮古恒大地区宅地造成事業
発掘調査期間	平成14年4月9日～8月22日
発掘対象面積	5,900㎡
発掘調査面積	5,900㎡
遺跡番号・略号	L G43-0388・SMDⅡ-02
調査担当者	小山内 透・亀大二郎・小林弘卓
協力機関	宮古市教育委員会 宮古市都市計画課



遺跡位置 1:50,000 宮古

1. 遺跡の立地

島田Ⅱ遺跡は、JR東日本宮古駅の南方約2.5kmに位置し、北東部には島田遺跡の調査が行われた県立宮古大が隣接する。遺跡は北方向に樹枝状に延びる複数の尾根と、その谷あいからなり、標高は16～84m、今年度調査区では40～62mを測る。遺跡の現況は急勾配の山林で、一部は伐採用道路となっていた。

2. 調査の概要

調査開始から4年、最終年度となる今年度調査で検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡46棟、竪穴状遺構7棟、工房跡15棟、鉄生産関連炉跡10基、炭窯16基、炉跡・焼土遺構16基、土坑類38基、磨崖(土)場2箇所、貝層5箇所、溝跡1条である。

<竪穴住居跡> 過去の調査同様、竪穴住居跡の大半は尾根上に位置し、谷部のものも含めて地形的な制約によるものか、重複が著しい。平面形は隅丸方形、規模は一辺4～5m前後のものが多く、最小は一辺約2mを測る。斜面に位置するものや重複の多いものでは平面形・規模が不明瞭なものもある。東尾根上に位置するものでは4本配置の主柱穴や周溝のあるものが比較的多く確認され、カマドは北壁中央設けが大半を占める特徴的な規則性が認められ、これらのほとんどは人為的な堆積の様相を呈していた。カマド本体は石を芯材としたものと粘土で構築されたものがあるが、ほとんどの遺存状況は良くない。煙道は大半が割り貫き式だが、煙道を伴わないものも数棟確認された。焼失住居は4棟、精錬・鍛錬鍛冶炉跡が検出されたものも2棟ある。

<工房跡・竪穴状遺構> 昨年度調査で未了となった西側の谷部に大半が位置する。やはり、地形上の制約のためか重複が著しい。平面形・規模は立地や重複により不明瞭ではあるが、およそ隅丸の長方形や方形を呈し、長軸3～5m、短軸2～4mを測る。工房跡としたものは掘り込まれた炉跡や地床炉が検出されたもので、鍛錬鍛冶炉を伴うものが2棟ある。周辺状況と出土遺物から2棟以外も鉄生産に関連する工房跡の可能性が高いと思われる。

<鉄生産関連炉跡・炉跡> 製鉄炉1基、精錬鍛冶炉1基、鍛錬鍛冶炉8基を検出した。製鉄炉は東端谷の斜面に立地するが、炉底部と前底部のみを検出した。炉は還元状態で直径約20cm、深さ約5cm程の円形で碗形を呈するが地下構造はない。前底部は炉から傾斜しながら低くなり、直径約70cm程の略円形を呈する。こ

の斜面上方には長さ約3m、幅約40cm程のテラス状の平場があり、鞍座と考えられる。また炉の斜面下方には製鉄滓が主体となる4m程の範囲で最大厚50cm程のマウンド状の廃滓場が広がる。精錬鍛冶炉は製鉄炉上方尾根上の堅穴住居跡にあり、直径約30cm、深さ約20cmの円形で楕形を呈し、同程度の浅い前庭部をもつ。上部構造は消失し不明だが、壁面は還元が著しく、地下構造はない。鍛錬鍛冶炉の大半は西側の谷部に位置するが、鉄砧石の抜き取り穴や足入れ穴などが確認されたものは1基のみで、鍛造剥片の確認された炉単体のものが多く、長軸40cm以下、短軸30cm前後、深さ約10cm型の略楕円形で楕形を呈する。

<炉跡> 炉跡としたものは土坑状の掘り込みの底面が部分的に焼土化しているもので、ほとんどが東尾根と谷部に位置し、製鉄炉の周辺に多く分布していた。平面形・規模は30～70cmほどの円形で、深さ約20cmの楕形を呈し、埋まりきる途中の土坑などの窪みを利用しているものもある。

<炭窯> 炭窯は底面や壁面の一部が焼土化し、埋土中に多量の炭を含むことから、簡便な木炭焼成土坑と考えられるものである。大半が東尾根の製鉄炉に近い所に多く分布し、平面形は楕円形と長方形、規模は幅約1m、長さは2～8mとバラエティに富む。堅穴住居が埋まりきる前のくぼみを利用して構築したのももある。

<土坑類> 土坑類は調査区各区に位置し、平面形・規模は直径1～2m前後の円形と一辺約1.5mの方形基調のものが多く、底面は平坦で断面形は筒状や箱形を呈し、深さは約1mほどで、大きいものほど深くなっている。

<貝層> 堅穴住居や土坑に廃棄された50cmほどの範囲で厚さ5cm程度のもので、1箇所での量と種類は少なく、イガイ科の一種、ムラサキキンコ、エゾアワビ、クチバガイなどが出土した。

<出土遺物> 今回の調査で出土した遺物は、縄文土器・石器、平安時代の上器器・須恵器、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓類などがある。

縄文土器は小コンテナ1箱、石器は石鎌1点が主に谷部から出土した。土師器は甕・坏類が大コンテナ11箱、須恵器は甕・壺類が大コンテナ1箱、土製品は羽口が大コンテナ2箱、支脚が数点、炉壁は小コンテナ1箱、石製品は砥石・鉄砧石・要石・磨石・敲石などが大コンテナ6箱、鉄製品は鉄鎌・釣り針・鋤先・刀子・釘・鉄斧・紡錘車・祭具などが約100点、鉄滓類は製鉄滓・鍛冶滓・楕形滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片など大コンテナ約16箱出土した。土器類のほとんどは堅穴住居跡から、鉄製品は遺構内出土が多く、炉壁・鉄滓類は大半が西側と東端谷部の廃滓場から出土しており、遺構と関連した出土状況を示している。

3. まとめ

過去の調査結果同様、今年度も尾根頂部は堅穴住居群の居住域、谷部は工跡や製鉄炉、鍛冶炉などの生産域という場の使い分けが追確認された。さらに谷部生産域では遺構の種類別の分布状況から、遺跡の西部と東部は製鉄地区、中央部は鍛冶地区という様相が窺われ、また製鉄地区では尾根上・谷部でも楕円形や長方形の炭窯が集中する傾向にあり、製鉄炉と大型炭窯の関連性が考えられる。

また、今年度調査した東尾根の遺構密度から、集落はさらに東側に広がると推測され、製鉄が主となる地区の可能性が高く、今後東側の調査が行われることがあれば、本地区の過去の製鉄業に関する一大集落の様相がさらに解明できるものと思われる。



基1 X=-42,300.000
Y= 96,400.000
基2 X=-42,330.000
Y= 96,400.000
(日本測地系)

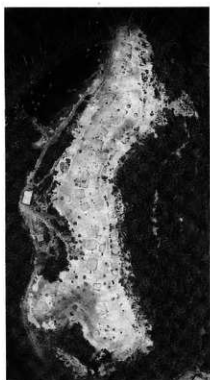


- 凡例
- △ 壑穴住居跡
 - 工房跡・壑穴状遺構
 - 炭窯
 - ◆ 鉄生産関連何跡
 - ▲ 焼土遺構・灰跡
 - 土坑
 - * 貝屑
 - 排水場

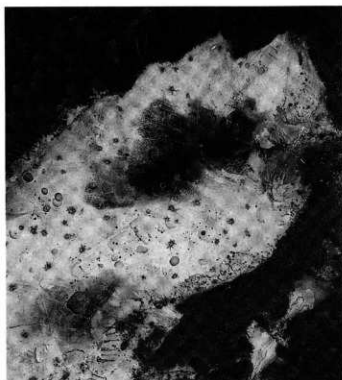


0 1:1,500 30m

島田Ⅱ遺跡遺構配置図



赤28区全景



赤25区全景



製鉄炉完掘



鍛冶炉完掘



竪穴住居跡・カマド完掘



遺物出土状況(鋤先)

島田Ⅱ遺跡検出遺構・遺物出土状況

Ⅲ. 岩手県・市関係

たまがわむかい
(11) 玉川向遺跡

所在地 軽米町大字小軽米第17地割字
玉川向平85-1ほか
委託者 二戸地方振興局土木部
事業名 荒廃砂防事業
発掘調査期間 平成14年4月12日～6月17日
調査対象面積 1,000㎡
発掘調査面積 1,000㎡
遺跡番号・略号 J F 15-0334・TMK-02
調査担当者 村木 敬・青山紀和
協力機関 軽米町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中大野

1. 遺跡の立地

玉川向遺跡は、軽米町役場より南東約20km、山形村との境に位置している。遺跡はウチナイ沢と西流する沢の合流部の下流に形成されたウチナイ沢の右岸、標高350m前後の河岸段丘上に立地している。梅の木沢遺跡の50m下流にあり、現況は原野である。

2. 調査の概要

今回の調査によって縄文時代の陥し穴4基・焼土遺構2・埋設土器1基・土坑4基、縄文時代晩期末から弥生時代初頭の竪穴住居が8棟検出された。

<竪穴住居跡> 西に張り出す段丘の縁辺に重複して検出された8棟は、全て縄文時代晩期末から弥生時代初頭のものである。平面形を把握できた住居は3棟あるが住居上部の大半は削平を受けほぼ床面のみ、他の5棟は半壊の状態を確認できた。前者の平面形は円形を呈し、規模は長軸4～6mである。うちの2棟は石囲い炉や地床炉、柱穴を伴う。後者の平面形は半円形を確認、規模は長軸で3～5mである。

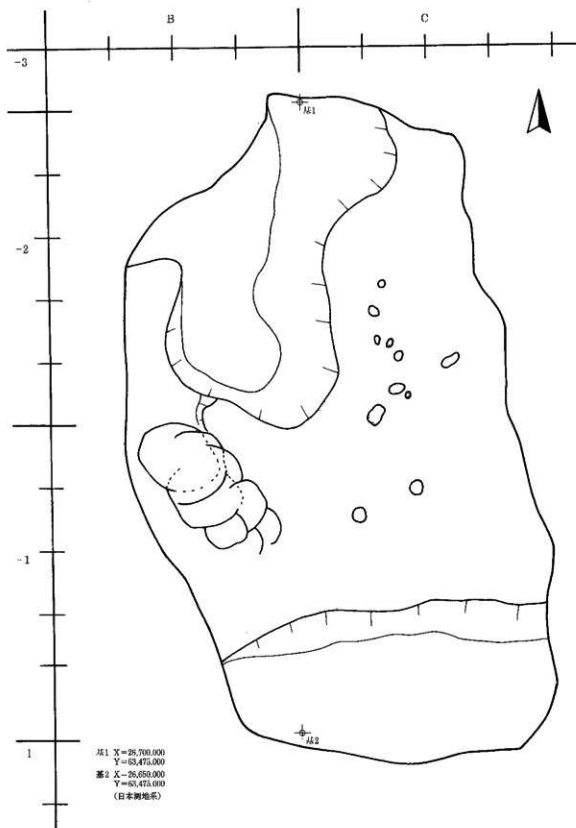
<陥し穴> 楕円形や円形を呈するものが各2基、段丘上部にある平坦部から北と東に下っていく斜面際でそれぞれ検出された。規模は前者が約1.5m、後者が約1mである。これらの中で逆茂木痕を有するものが3基ある。

<その他> 縄文時代に属すると考えられる焼土遺構2基と埋設土器1基、土坑4基が段丘上部の北斜面で検出された。

<出土遺物> 本遺跡から土器や石器が大コンテナ10箱出土している。主に縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する土器や石器で、竪穴住居から大コンテナ9箱出土している。また、縄文時代中期末から後期初頭にかけての土器や石器が大コンテナ1箱遺構外から出土している。その他縄文時代の石器の中に、南部浮石堆積層より下層から槍先形尖頭器1点、またその上層からは磨製石斧が2点出土している。

3. まとめ

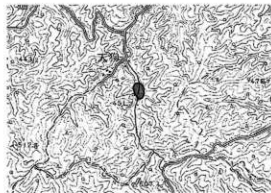
今回の調査では、縄文時代の遺構や遺物、縄文時代晩期末から弥生時代初頭の竪穴住居を確認することができた。特に当該期を中心とした竪穴住居跡が検出され、小規模ではあるが山間で確認されたのは貴重な成果と言える。今後は周辺地域と比較検証していくことで本遺跡の様相がより明らかになるものと思われる。



玉川向遺跡遺構配置図

(12) 梅の木沢遺跡

所在地 軽米町大字小軽米第17地割字
玉川向平87-1ほか
委託者 二戸地方振興局土木部
事業名 荒唐砂防事業
発掘調査期間 平成14年5月22日～6月17日
調査対象面積 2,200㎡
発掘調査面積 1,000㎡
遺跡番号・略号 J F 15-0344・UKS-01
調査担当者 村木 敬・青山紀和
協力機関 軽米町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中大野

1. 遺跡の立地

梅の木沢遺跡は、軽米町役場より南東約20km、山形村との境に位置している。遺跡はウチナイ沢と山から東流する沢とが合流する地点の上流、標高350m前後の河岸段丘上に立地している。玉川向遺跡の約50m上流にあり、現況は山林・原野である。

2. 調査の概要

今回は、昨年検出した高殿と鍛冶工房を確認した範囲に限定して遺構検出を行い、それらの詳細な配置の把握に務めた。また、平行して高殿の西壁付近にトレンチを設定しその掘り下げ及び押し柱1基の半載を行った。以下に今回得られた成果をまとめておく。

高殿内において製鉄炉1基、押し柱4基、焼土2基を検出し、製鉄炉を中心とした各配置が確認できた。高殿内の床面には黄褐色粘土が貼られており、その貼り床から想定すると平面形は隅丸四角形の丸打ちで、その規模は南北約18×東西約16mある。

製鉄炉は高殿のほぼ中央に位置し、その規模は長軸で3～4m、平面形は楕円形を呈する。その中央の両脇には輪座、両端には湯溜りがそれぞれ確認されている。その製鉄炉を取り囲むように規模が約7～8mの焼土範囲を確認したが、それは製鉄炉の掘り方と考えられる。また、その黄褐色粘土と製鉄炉の間にも焼土範囲があり、これは高殿を構築する際に形成されたものと思われる。

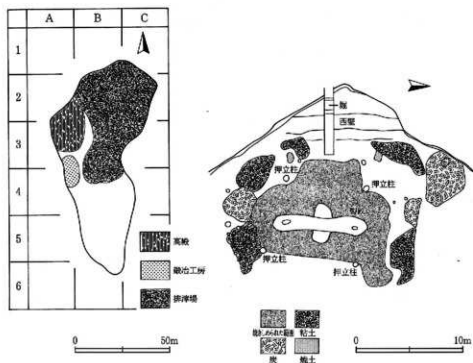
押し柱は平面形は円形を呈し、規模が長さ約1m、深さ約1.5mを測る。直径約0.4mの柱痕を確認できた。この底面には柱材が残存している状況を確認した。

高殿の西壁と思われた範囲より調査区際までトレンチを入れた結果、規模が幅1m、深さ1mの堀を確認することができた。この堀は背後を流れる沢から高殿を守るために作られたものと考えられる。

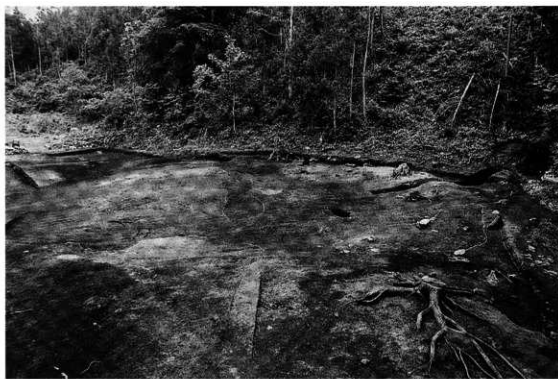
鍛冶工房は、昨年検出した調査区西側、高殿の南側の緩斜面に存在している。本年度も遺構検出に留まったが、焼土が等間隔に配置され、その周辺から柱穴が複数検出されている状況を確認した。

3. まとめ

昨年度より継続して行われた結果、高殿内部の配置構造が明らかになり少しずつではあるが近世鉄山の様相を把握することができた。来年度調査を行うことで、鉄山全体の様相が明らかになるものと思われる。



梅の木沢遺跡・高殿内遺構配置図



梅の木沢遺跡・高殿検出状況

はやさかたい
(13) 早坂平遺跡

所在地 山形村大字川井第4地割37番地
5ほか
委託者 久慈地方振興局土木部
事業名 地方特定道路整備(代行)
発掘調査期間 平成14年4月8日～12月6日
調査対象面積 1,280㎡
発掘調査面積 1,352㎡
遺跡番号・略号 J F46-0039・HST-02
調査担当者 北村忠昭・米田 寛・長村克稔
協力機関 山形村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中関

1. 遺跡の立地

早坂平遺跡は、山形村役場から北東に約3km離れた山形村川井地内に所在し、村内を南西から北東に流れる川井川と、村内をほぼ南から北に流れる遠別川によって形成された標高220～240mの河岸段丘面上に立地する。遺跡の現況は畑地である。本遺跡の遠別川対岸には、本遺跡で出土する石器の主たる石材である黒色頁岩の露頭が確認されている。なお、今年度の調査区も昨年度と同様、平成元年に早坂平遺跡調査団によって調査された地点の西側にあたる。

2. 調査の概要

今年度の発掘調査で、後期旧石器時代と縄文時代の遺構や遺物が検出された。

後期旧石器時代の調査では、地面を掘りこんで作る住居跡や陥し穴のような遺構は検出されなかったが、遺物の密集部が検出され、これらを操作概念としての遺構としてカウントしている。カウントされた遺構は石器集中20箇所以上、礫群4箇所である。

縄文時代の調査で検出された遺構は、陥し穴状遺構7基、土坑4基、焼土遺構1基である。

<石器集中> 北側調査区で2箇所、西側調査区で2箇所、北東側調査区で1箇所、南側調査区で少なくとも15箇所確認された。時期は石器集中から出土する遺物の形態学的な知見によれば、ほぼ同一時期で今から約2万7千年～1万8年前と考えられる。石材の観点から見ると9割は遺跡周辺で採取される頁岩(黒色頁岩)であるが、北側の1箇所ではほとんどが黒色頁岩以外の頁岩で占められており、西側の1箇所では黒色頁岩以外の頁岩と黒曜石が大半を占めている。

<礫群> 南側調査区で4箇所検出した。礫群は4箇所とも南側調査区の東側に密集している。礫群を構成する礫は火を受けた痕跡を持つものが多い。石器集中と同一層で確認され、同時期のものと思われる。

<陥し穴状遺構> 北側調査区から縄文時代の陥し穴状遺構が7基検出した。平面形は溝状のものが6基、円形のものが1基である。時期については、溝状の陥し穴状遺構は昨年度と同様、中期末以降である。円形の陥し穴状遺構は溝状のものを切っているのが後期以降と思われる。

<土坑> 北側調査区で2基、北東斜面部で1基、南側調査区で1基検出した。時期は検出状況、出土遺物などから縄文時代中期以降と思われる。

<焼土遺構> 北東斜面部から1基検出された。時期は、遺構が道路造成によって削平されて検出面がはつきりしないことと、出土遺物がなため不明である。

<出土遺物> 出土した遺物は旧石器（雑群を構成する種や座標データを記録している石器、約2万点含む）が大コンテナで40箱、縄文土器が大コンテナで1箱、縄文時代の石器が大コンテナで4箱である。

後期旧石器時代の遺物はナイフ形石器、石刃、細石刃、石核、調整痕のある剥片、微細剥離痕のある剥片、剥片、砕片、彫刻刀形石器、彫刻刀形石器削片、搔器、彫搔器、削器、斧形石器、敲石、焼け煉等である。早坂平遺跡は黒色頁岩の原産地遺跡であるが、遺物の大半は黒色頁岩製で、9割以上が未加工の石刃、剥片、砕片、石核で占められている。一方、奥羽山脈方面から搬入されたと考えられる頁岩等はナイフ形石器、彫刻刀形石器、搔器、彫搔器等、ツールの比率が高い。

黒色頁岩製のツールは非常に少ないが、豊富な石材資源を背景として大形のものが目立つ。中でも斧形石器は、長さ32.2cm、幅12.3cm、厚さ7.2cm、重量3249gと日本の後期旧石器時代における斧形石器のなかでも最大級に属する資料である。

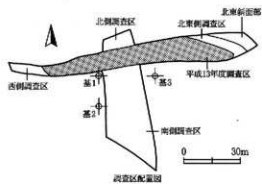
縄文時代の遺物は昨年度と同様、前期前葉から中期末を中心とした土器と石器が出土した。土器は破片資料が多く、完形もしくは完形に近い状態で復元できる資料はほとんどなかった。石器は石鏃、石鏃などの剥片石器や磨製石斧などの石核石器、磨石、敲石などの礫塊石器、石核、剥片等が出土している。

3. まとめ

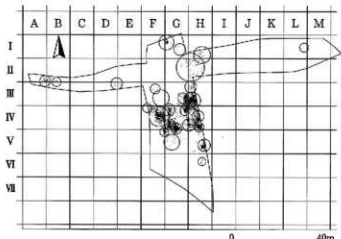
縄文時代については、昨年度のような集落は確認されなかったが、遺跡の北側に更に7基の陥し穴状遺構が検出され、中期末以降の狩りの場が川井川側の段丘崖まで広がるのが明らかになってきた。

旧石器時代については、平成13・14年度の発掘調査によって、荒屋系細石刃石器群と黒色頁岩を多用する石刃石器群が出土した。現在までの成果と課題は次のようなものが挙げられる。①荒屋系細石刃石器群の分布は日本海側に偏重し、今後もその傾向は変わらないであろうが、本遺跡での発見によって太平洋側の波及ルートを考察するうえで欠かすことのできない資料となるであろう。②黒色頁岩を多用する石刃石器群の相対年代は今のところ明確には決め難いものの、後期旧石器時代前半期までは遅らぬと思われる。③大形の斧形石器・石核・石刃の存在は、早坂平遺跡が豊富な石材資源を背景に大量の石材消費を可能とする場所に立地することを示している。④石器集中の形成は、様ではなく、堆積物としての遺物という視点から検討を要する。⑤東北部での雑群の出土は珍しく、石器集中との相関を検討する必要がある。⑥東北部の旧石器遺跡数は多くないものの、可能な限り北上山地東麓域に適應した旧石器集団の行動形態を検討していく。

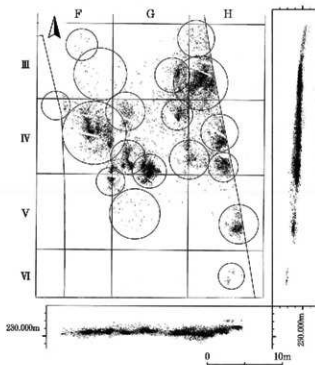
現在、火山灰分析、AMS年代測定、黒曜石産地同定などの理化学分析を行っている。また、石器集中に関しては接合・母岩分類などによる遺構間分析などの整理作業を継続中であり、今後更に具体的なデータを明らかにしていきたい。



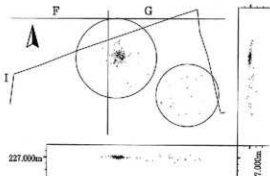
调查区配置图



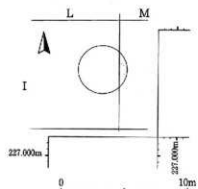
旧石器出土分布图(平成13年・14年度)



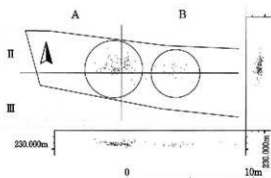
旧石器出土分布图(南侧调查区)



旧石器出土分布图(北侧调查区)

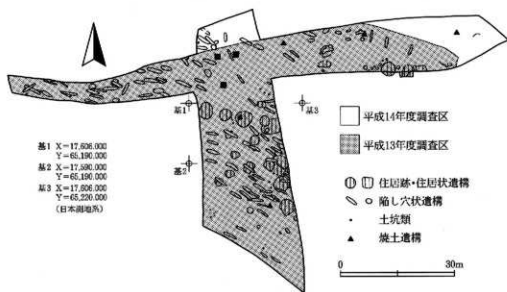


旧石器出土分布图(北侧调查区・北东调查区)



旧石器出土分布图(西侧调查区)

早坂平遺跡 調査区配置図・旧石器出土分布図



早坂平遺跡 遺構配置図(縄文時代)



遺跡遠景(北から)



陥し穴状遺構



IVHグリッド石器集中(下部中央が斧形石器)



ナイフ形石器出土状況

早坂平遺跡 遺構配置図及び検出遺構・出土遺物

ひらしみず
(14) 平清水Ⅱ遺跡

所在地 九戸郡野田村大字野田第22地割
53番地ほか
委託者 久慈地方振興局
久慈農村整備事務所
事業名 ふるさと農道野田地区
発掘調査期間 平成14年8月1日～11月15日
調査対象面積 950㎡
発掘調査面積 950㎡
遺跡番号・略号 J G60-0224・HSMⅡ-02
調査担当者 金子昭彦・星 幸文・坂部恵造
協力機関 野田村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中野田

1. 遺跡の立地

平清水Ⅱ遺跡は、三陸鉄道陸中野田駅の南西約2.5kmにある。明内川右岸の河岸段丘上にあり、段丘上は東流する沢に開析されなだらかな丘陵状を呈す。遺跡は、このなだらかな丘陵の北端にある。今回の調査範囲は遺跡の北限に沿い、明内川に下る崖際に位置し、川との比高は約20m、現況は山林と水田である。

2. 調査の概要

今年度精査した遺構は、竪穴住居跡4棟、住居状遺構1基、土坑73基、溝状の陥し穴状遺構2基、灰跡5基、焼土25基である。陥し穴状遺構は縄文時代中期の可能性があり、その他はほとんどが縄文時代前期中葉～中期前葉（特に前期末～中期初頭）になるものと思われる（土坑のうち1基は早期かも知れない）。

<竪穴住居跡> 土器埋設炉が3つ以上並ぶもの、周溝が巡るものなどがある（配置図参照）。

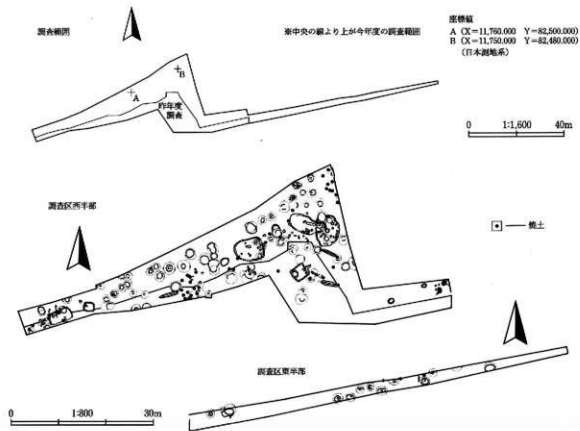
<土坑> 大部分がフラスコ状で口が極端に狭いのが特徴的である。楕円形の墓壇然としたものもあり、底面から一抱えもある白色粘土板、その少し上から同様の礫が発見され、円筒下層b2式期と推測される。

<出土遺物> 縄文土器が大コンテナ（30×40×30cm）20箱出土した。早期貝殻文土器が1点フラスコ状土坑から出土している以外はほとんど全て前期中葉～中期前葉で、前期末～中期初頭（円筒下層d1式～上層a1式）が主体を占める。石器類は、中コンテナ（30×40×20cm）14箱出土している。その他、円盤状石製品1点、土偶？1点、琥珀が約20点出土しているが加工品かどうかは不明である。

3. まとめ

昨年の調査成果を合わせると、調査面積は1,350㎡、竪穴住居跡4棟、住居状遺構1基、土坑104基、陥し穴状遺構7基、灰跡8基、焼土41基となる。この他、古代（平安時代か）の遺構があり、竪穴住居跡2棟、住居状遺構1基、土坑1基が検出されている。遺物は、縄文土器が大コンテナ37箱（五領ヶ台式系土器片あり）、石器類が中コンテナ20箱、土師器約20点、土偶2点、石製垂飾品1点、コハク約30点となる。

今回、縄文時代前期中葉～中期前葉の村の跡、縄文時代中期（以降）の狩りの場、古代の村の跡が主として発見された。特に注目されるのは、口が極端に狭いフラスコ状土坑が多い点と五領ヶ台式系土器片である。



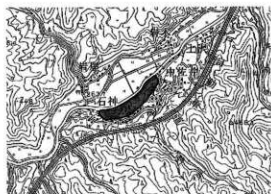
平清水Ⅱ遺跡遺構配置図



平清水Ⅱ遺跡調査範囲全景

きた じょうやかたあと
(15) 北の城館跡

所在地 岩手郡安代町字石神43-1ほか
委託者 盛岡地方振興局
盛岡農村整備事務所
事業名 中山間地域総合整備事業浅沢地区
発掘調査期間 平成14年7月1日～10月11日
調査対象面積 3,920㎡
発掘調査面積 3,920㎡
遺跡番号・略号 J E55-1261・K J Y-02
調査担当者 佐々木信一・野中真盛
協力機関 安代町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 荒屋

1. 遺跡の立地

北の城館跡は、JR花輪線荒屋新町駅の北東約4kmに位置し、安比川右岸の河岸段丘上に立地している。標高は289m～291m、遺跡の現況は畑、山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡3棟（平安時代2棟、中世1棟）、住居状遺構1棟、土坑9基、柱穴状小土坑6基、堀跡4条、溝跡1条である。出土した遺物は大量コンテナ1箱分、内訳は縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品である。

＜竪穴住居跡＞ 平安時代の竪穴住居跡は調査区域中央部から2棟検出された。そのうち1棟は床面だけの検出で、掘り方とカマド燃焼部の焼土だけが残存している。規模・形状は1辺が約4.5mの隅丸方形と考えられる。主柱穴4個も検出されている。規模は径26×30cm～34×37cm、深さ56.5～72.5cmである。もう1棟は遺構の半分が調査区域外であり、全体の形状は明確でないが、1辺が約7.5mの隅丸方形と推定される。実際には幅20～47cm、深さ4.3～17.2cmの壁溝が巡っている。北東壁中央部にはカマドが設置されていたと考えられ、袖部の芯材に使用された礎が5個残存しており、燃焼部には厚さ10cmの焼土も確認された。

中世の竪穴住居跡は調査区域南西部隅から1棟検出された。規模・形状は1辺が約3mの隅丸方形である。壁際から柱穴が8個検出された。炉跡は検出されなかった。

＜住居状遺構＞ 調査区域北東部から1棟検出された。規模・形状は1辺が約3mの隅丸方形で、深さは約90cmである。北東壁中央部は張り出しており、入り口と考えられる。埋土中位に十和田a降下火山灰が含まれていることから平安時代と考えられるが、形状から中世の可能性もある。

＜土坑＞ 調査区域南西部隅と中央部から9基検出された。形状は円形、楕円形、隅丸方形で、規模は径50×67cm～2.6×3.0m、深さ30.5～65cmである。9基のうち1基は平安時代の竪穴住居跡に切られていること、もう1基は住居状遺構の床面から検出されたことから、これら2基は平安時代もしくはそれ以前の可能性がある。残り7基については時期や性格については不明である。

＜柱穴状小土坑＞ 調査区域南西部隅から6基検出された。形状はほぼ円形で、規模は径39×41cm～43×52cm、深さ29.6～68.2cmである。時期や性格については不明である。

<堀跡> 調査区域中央部から2条、郭南東側のテラス状の部分から1条、北東部隅の平地から1条検出された。中央部から検出された2条は郭の南西側からの検出で、二重の空堀と考えられる。薬研堀で、向きは北西-南東である。規模は外堀が幅5~5.5m、深さ1.5~2m、内堀が幅6~8.7m、深さ2.35~4.1mである。郭の南東側のテラス状の部分から検出された1条は、薬研堀で、向きは南西-北東であり、規模は幅3.65~5.7m、深さ63~146.6cmである。北東部隅から検出された1条は、箱薬研堀で、郭の平地の縁際を緩い弧を描くように南東-北西に巡っている。規模は幅1.75~2.56m、深さ86~125.6cmである。

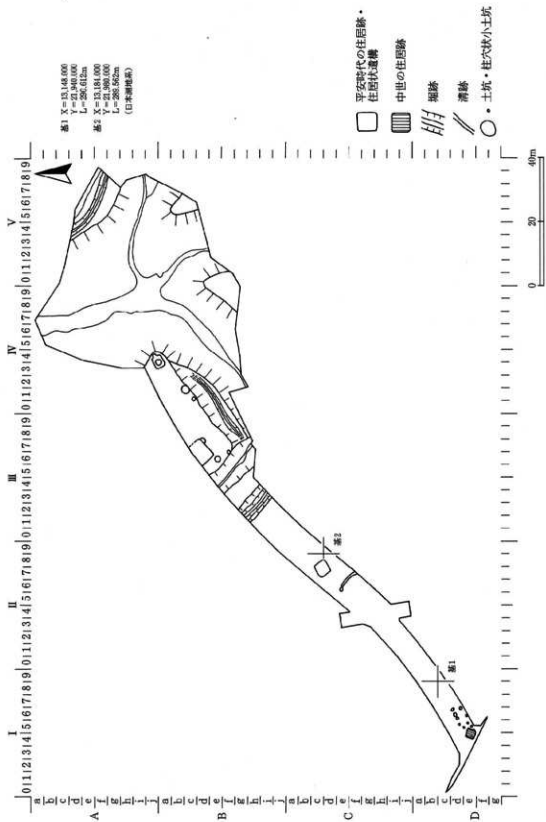
<溝跡> 調査区域中央部から1条検出された。向きは北西-南東で、南東端は調査区域外へ延びている。規模は全長7m、上幅25~60cm、下幅13~48cm、深さ7.2~32.2cmである。時期や性格については不明である。

<出土遺物> 大コンテナで1箱出土しており、遺構内からの山土が多い。内訳は縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品で、土師器が多い。縄文土器は、前期、中期、後期の深鉢、晩期の浅鉢、石器は石鏃と石鏃である。土師器は坏と甕、須恵器は甕と壺である。鉄製品は刀と刀子である。

3. まとめ

今回の調査は、館跡の一部の発掘調査のため館の全体像はとらえられなかったが、郭の平地の存在、堀跡の形状・規模、テラスの存在等、貴重な資料を得ることができた。また、平安時代の竪穴住居跡が検出されたことから、複合遺跡であることもわかった。

地形から考え、本調査区域の北西側から館跡に伴う遺構が検出される可能性がある。



北の城館跡遺構配置図



調査区域全景



平安時代の竪穴住居跡



中世の竪穴住居跡



住居状遺構



堀跡

北の城館跡検出遺構

くまどう
(16) 熊堂B遺跡第15次調査

所在地	盛岡市本宮字稲荷44-4ほか
委託者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事業名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成14年4月10日～8月31日
調査対象面積	11,178㎡
発掘調査面積	6,235㎡
遺跡番号・略号	LE16-2118・OKO-02-15
調査担当者	長村克稔・阿部眞澄・安藤由紀夫 菊池賢
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

熊堂B遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南西約2km、雫石川右岸の河岸段丘上に所在しており、北緯39度40分・東経141度8分付近に位置している。今次調査区は、並行して調査が行われた第14次調査区をはさむ形で東からB区・D区・E区が東西310m・南北50mの範囲にわたる。また、B区より約140m南東の地点に東西40m・南北30mの範囲でA区が、同じく約100m北東に東西50m・南北35mの範囲でF区がそれぞれ設定されている。標高は122～124mで、雫石川との比高は約4～6mとなる。調査以前は宅地だった。

2. 調査の概要

検出した遺構は調査未了範囲を含むE区を除くと、竪穴住居跡7棟、土坑41基、溝13条、柱穴状ピット約120基である。遺構は調査区にまんべんなく広がっているわけではなく、主にD区に集中して見られた。

<竪穴住居跡> A区で2棟、B区で1棟、D区で4棟を検出した。おおよその床面積は、B区の1棟が25.9㎡、D区の3棟は約7.0㎡・17.6㎡・41.6㎡である（他の3棟は調査区外に広がっているため不明）。カマドは、A区の1棟が北東である他は、B・D区の4棟はすべて西向きであった（A・D区の各1棟はカマド未検出）。煙道は、B区の1棟が掘り込み式である他は、すべて割り貫き式である。時期については出土遺物および遺構の切り合い関係から、B・D区の3棟が奈良時代、A区の2棟とD区の1棟が平安時代と考えられる。D区の北西にある1棟は、遺物の出土が土器の小破片1点のみで、具体的な時期については不明だが、カマドの方向から奈良時代と推測される。B区の1棟は、床面直上から炭化材が検出していることから焼失住居と考えられる。

<土坑> 41基を検出した。規模は、直径が60cm～3m、深さが10～60cmである。平面形は、円形・楕円のものも多く、不整形のものもある。出土した土器から、B区の3基のうち1基は奈良時代、2基は平安時代のもの、D区の1基は縄文時代晩期のものと考えられる。その他の土坑については、遺物の出土や時期を比定しうる遺構との切り合い関係がないため具体的な時期は不明である。

<溝> A区で4条、B区で1条、D区で4条、F区で1条の計10条を検出した。規模は、幅70cm～1m、深さ10～30cmで、いずれの溝も調査区域外にのびている。主に出土した土器から、D区とF区の各1条は奈良時代、A区・B区の各1条は平安時代のものと考えられる。D区の東西に走る3条は、第1次調査で検出

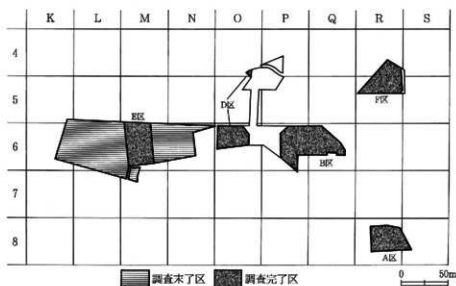
されているもので、奈良時代の住居を切っていること、埋土上層から9世紀代の土器が出土していることから8世紀末～9世紀前半に機能していたものと考えられる。その他の3条の時期については、年代が比定できる遺構との切り合い関係や出土した遺物がないことから不明である。

＜出土遺物＞ 縄文土器、土師器・須恵器、土製品、石器が出土している。ただし、大部分は土師器で、破片まで含め概数であるが、43.8kgが出土している。器種は、土師器が坏・甕を中心とし、他に高台付坏が数点見られるのみである。須恵器については大甕の破片が中心である。土製品は土製勾玉で、B区の竪穴住居跡埋土下層から2点出土している。縄文土器はD区の土坑の中からつぶれた状態で2点出土した。ほぼ全点接合したが、口縁部2分の1と底部全周が残存するのみである。石器は剥片石器が中心で、縄文時代晩期の遺構があることから当該期のものと考えられる。

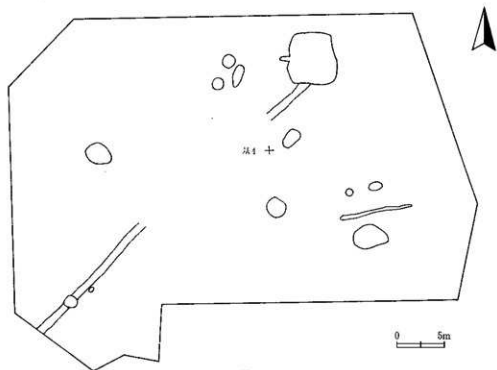
3. まとめ

今次調査では奈良・平安時代の竪穴住居跡を中心とする古代集落の検出を行った。もっとも遺構が密に分布するD区では、前述のように、3棟の奈良時代の住居が検出されているが、その特徴として、大形の住居の周辺に小形の住居が位置していることがあげられる。従来より、住居の規模が小形・均一化する平安時代以前の古代集落は、1つの大形住居の周辺に小形住居が散在するという構造を有するといわれている。今次調査ではそうした指摘を確認できたといえる。

なお、E区の調査未了域では竪穴住居跡が、調査終了域の東で12棟、同じく西で26棟検出されている。前述のようにB区・14次調査区・D区・E区は東西に並んでいるが、遺構の密度は東から西に向かって大になる傾向にある。時期差も考慮しなければならないが（E区の竪穴住居跡については検出のみで精査を行っていない）、熊堂B遺跡に展開する古代集落において、その主体部のひとつはE区周辺に展開していたものと推測される。

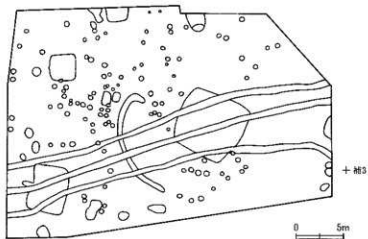
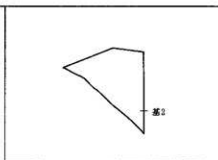


調査区範囲及びグリッド配置図



FIG

基2 X=-35,290.000
 Y= 25,740.000
 L= 124.488
 基4 X=-35,270.000
 Y= 25,800.000
 L= 124.266
 基3 X=-35,270.000
 Y= 25,740.000
 L= 124.488
 (日本測地系)



FIG

熊堂B遺跡第15次調査B・D区遺構配置図



調査区全景



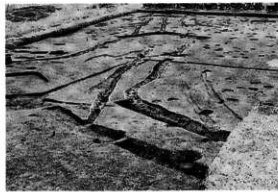
D区検出小形竪穴住居跡



同左カマド



D区検出大形竪穴住居跡



D区を東西に走る3条の溝跡

熊堂B遺跡第15次調査検出遺構・出土遺物

だいたろう
(17) 台太郎遺跡第44次調査

所在地 盛岡市向中野字八日市場41-1他
委託者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成14年4月9日～7月31日
調査対象面積 3,527㎡
発掘調査面積 2,907㎡
遺跡番号・略号 LE16-2269・ODT-02-44
調査担当者 阿部眞澄・菊池 賢
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線仙北町駅の西南約900mに位置し、雫石川南岸の河岸段丘上に立地している。調査区は宅地跡、畑地と休耕田で占められる。概ね平坦な地形であるが、中でも若干の高低差が見られ、その差が占地の状況を微妙に左右する。

2. 調査の概要

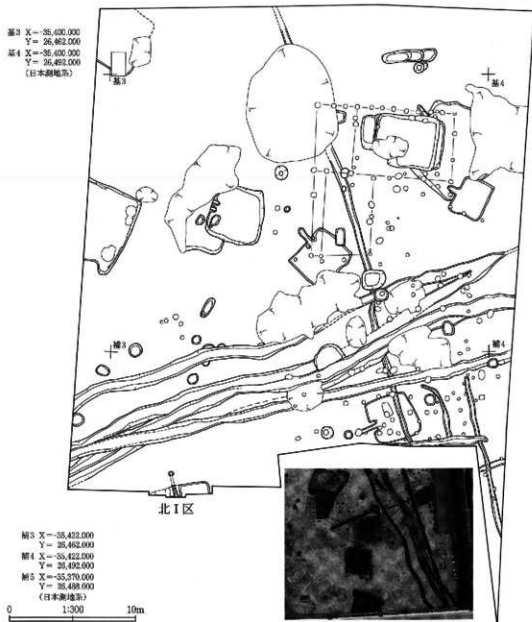
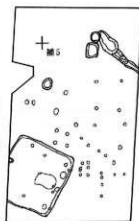
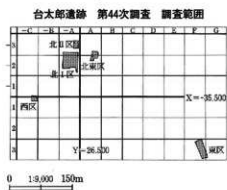
今回の調査は、住宅地の間の5区からなる。畑地であった東区を除き、建物の基礎や配水管工事の影響で遺構の残存状態はよくなった。検出した遺構は竪穴住居跡20棟（奈良時代9棟、平安時代11棟）、掘立柱建物跡3棟、土坑41基、竪穴状遺構2棟、焼土遺構2基、溝跡21条、堀跡1条、井戸跡1基と多数の柱穴である。

<竪穴住居跡> 奈良時代の竪穴住居跡は北区7棟、東区1棟と西区1棟である。規模・形状は東区が一辺約5.7×5.5mの隅丸方形、北区はそれよりやや小規模の一辺が約4～5mである。北西壁のほぼ中央にカマドを有するものが多い。出土遺物より7世紀後半～8世紀の遺構と考えられる。平安時代の竪穴住居跡は北区の3棟、北東区の6棟（一部推定）、西区の2棟である。規模・形状は一辺約2.2～4.6mの隅丸方形、カマドの向きは北西、北東と南西である。調査区が建物の跡であるため残りの状態はよくない。出土遺物より9世紀～10世紀の遺構と考えられる。調査区全体で住居間の重複は4組と多くはないが、他遺構との重複は多い。

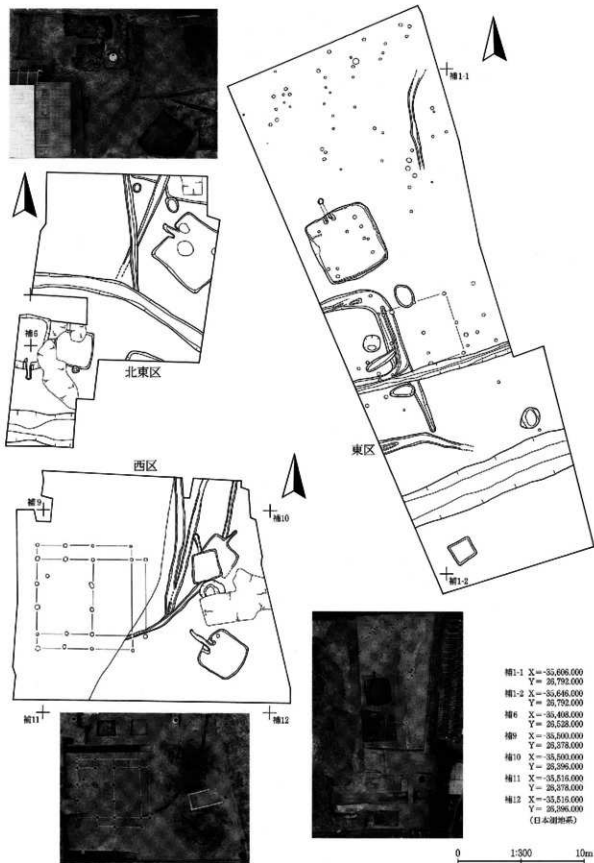
<掘立柱建物跡> 東区、西区、北区でそれぞれ1棟ずつ検出した。いずれも出土遺物は少なく時代を特定できないが、埋土の状況より東区は古代の遺構、西区は古代より新しい時代のもの、北区は竪穴状遺構と関連した近世の建物跡と考えられる。

<土坑> 調査区全体で41基検出した。形状は楕円形や円形、径0.5～1.5m、深さ30cm前後と浅いものが大部分である。北区の楕円形の土坑からはロクロ未使用の土師器（環・甕）、東区の円形土坑からは骨片が出土するが、他の土坑からの出土遺物は少なく用途は不明である。

<溝跡・堀跡> 調査区全体で21条検出した。規模は、長さ3～30m、幅0.3～1.5m、深さ0.3～0.5m、西区と東区の溝については水が流れた跡が認められるものもある。また東区では、深さ約0.8m、幅約2.5mの



台太郎遺跡第44次調査遺構配置図1



台太郎遺跡第44次調査遺構配置図 2

東西に延びる堀跡を確認した。これは台太郎遺跡の他区域の堀跡に比べやや小規模であるが、今後の調査でその性格や、遺跡全体での東区の位置・役割等が明確になっていくと考えられる。

<その他の遺構> 竪穴状遺構は東区と北Ⅰ区で各1棟検出した。東区の1棟は隅丸方形で、出土遺物より近くの竪穴住居跡と同じ奈良時代の遺構、北Ⅰ区の1棟は馬屋跡と見られる。焼土遺構は北Ⅰ区に位置し、2基とも小規模の遺構である。井戸跡1基は西区に位置する。小規模であり攪乱を受け、その全容は明確でない。

<出土遺物> 遺物は大量コンテナで6箱出土した。種類は土器（土師器・須恵器・あかやき土器）、石器（砥石）、土製品（紡錘車）、鉄製品（刀子）、陶磁器類である。北区や東区ではロクロ未使用の甍の割合が多いのに対して、北東区や西区ではロクロ使用の坏や須恵器が多くなっている。

3. まとめ

本遺跡は、奈良～平安時代を中心とした大規模な集落跡であることが明らかになってきたが、今年度の調査結果をあわせると570棟近い竪穴住居跡が調査されたことになる。以上をふまえて、今後は古代におけるムラの変遷、遺跡北西約3kmに位置する志波城及び周辺遺跡との関係など検証すべきことは多い。また、今年度東区で小規模なものであるが堀跡が検出された。この区域は台太郎遺跡の中での位置が明確になっていない部分であり、今後発掘が進むにつれ東区の遺跡全体での位置が明確になってくると考えられる。



東区 堀跡



東区 奈良時代の竪穴住居跡



北Ⅰ区 掘立柱建築物と竪穴状遺構

台太郎遺跡第44次調査検出遺構

いいおかさわだ
(18) 飯岡沢田遺跡第5次調査

所在地 盛岡市飯岡新田第1地割81-2
ほか
委託者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成14年4月9日～6月5日
調査対象面積 1,773㎡
発掘調査面積 1,773㎡
遺跡番号・略号 LE16-2169・ISD-02-5
調査担当者 半澤武彦・久慈泰彦
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南約2kmに位置し、雫石川南岸の河岸段丘面上に立地している。標高は123m前後で、調査前の土地利用状況は畑地・果樹園・休耕地となっていた。概ね全体は平坦な地形であるが、調査区の東端は段丘の縁となり1m程度の高低差がある。北側は前年度に調査を行った本遺跡第3次調査区と接し、近隣には北西方向に野古A遺跡、東方向に台太郎遺跡（ともに古代の集落跡）が分布している。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代末期～平安時代にかけての竪穴住居跡が7棟（古墳時代末期1棟・奈良時代2棟・平安時代4棟）、竪穴状遺構が3基、墓塚と思われるものも含んだ土坑が16基、溝跡が3条、規模の小さな円形周溝が1基、および近世の獨立柱建物跡が2棟と柱穴列が3列検出されている。

＜竪穴住居跡＞ 調査区の北西側に集中するように7棟の竪穴住居跡が検出された。7棟のうち古墳時代末期の1棟と奈良時代の2棟は、カマドがほぼ北西方向の壁面中央に位置しており、袖部分は芯材のない土器混じりの土で構築されたものとなっている。古墳時代末期のものと考えられる竪穴住居跡1棟からは、この時期の土器の特徴を示す丸底で内・外面に段差がある坏が出土しているが、奈良時代の住居跡と比較して、住居の構造や規模における明瞭な差異は特に認められない。調査区のほぼ中央から検出された奈良時代の住居跡1棟では、カマド袖右脇の壁面を抉るようにして造られた貯蔵穴と思われる穴が確認されている。

平安時代の4棟は、東端旧河遺付近の斜面から検出された1棟を除いて、北西側に集中して分布している。北西側3棟のうち獨立柱建物跡と重複する2棟は、カマドが南東壁面の隅にあり煙道部が燃焼部分から急に立ち上がる形態を示し、また作り替えたカマドをもつ1棟は、カマド袖部分の芯材に比較的大きな礫が多量に使用されており、カマドの位置や構造に奈良時代の住居跡との相違が明瞭に見取ることができる。

本遺跡第5次調査における竪穴住居跡の分布について、前年度の第3次調査区で見られたような大形の住居跡はなく、比較的小形～中形のものが中心となっており、それぞれが一切重複していないことも特徴として挙げられる。

＜竪穴状遺構＞ 古代の竪穴住居跡の狭間から3基の竪穴状遺構が検出された。中央の2基は埋土がごく薄い状態で検出されたことから、埋土上部がカマドを含めて削平されたものか、あるいは竪穴住居跡に付随す

るカマドを持たない施設であった可能性も考えられる。

<土坑> 調査区のほぼ全域から16基の土坑が検出された。そのうちの1基からは馬の骨と歯の一部が出土しており近世の墓塚と推測されるが、その他の土坑は出土遺物も僅かで性格や時期が不明なものが多い。

<溝跡> 大小合わせて9条検出しているが、西端の2条はそれぞれ古墳時代末期と奈良時代の竪穴住居跡に切られており、古代以前の溝跡である可能性が考えられ、2条の底には溝を構築した際についたものと思われる工具の跡が確認されている。また、北端～東端にかけての段丘面の縁に沿うように、全長約60mの溝跡が検出されているが、現在の地形と平行していることから比較的新しい時期のもので、溝の深さが一定しないことから灌漑用ではなく人為的な区画としての性格を持つ遺構と推測している。

<円形周溝> 調査区のほぼ中央付近から、径約2m・幅約40cmのやや不整形な円形周溝が検出された。南北それぞれ2箇所に溝が途切れた部分があり、西側は竪穴状遺構によって切られている。前年度の調査区から検出された同様な形態の遺構群と比較すると規模はごく小さく、時期を示すような遺物も出土していないものの、古代の遺構と推測している。

<掘立柱建物跡> 検出された2棟のうち1棟は3間×2間で、南東側の梁にあたる部分には小径の支柱穴が2基付随している。内部からは数基の柱穴状土坑も検出されているが、建物跡の部を形成するような配置は見られず、本遺構と関連しない可能性が高い。一方のやや大きな建物跡は4間×3間で、内部に3基の支柱穴が存在するが、北西隅の柱穴1基は、竪穴住居跡のカマド袖芯材の礎を朝り抜いて建てられていた。

<柱穴列> 調査区東側の段丘面の縁と平行するように3列の柱穴列が検出された。柱穴列は河川の運搬作用によってもたらされた、やや細かな砂礫層の上に千鳥配列で分布し、各柱穴は小径で浅いものが多く、南側の1列は削平を受けて消滅してしまったものも存在する。埋土は他の遺構と比較して単層のものが大半で、ごく新しい鉄製品なども一部の柱穴内から出土していることから、近世～近代にかけての遺構と考えられる。

この遺構は段丘面の縁とほぼ平行していることから、人為的な区画のために設置された柵列、もしくは長屋状の建物跡であった可能性も考えられるが詳細は不明である。

<出土遺物> 7世紀末頃～9世紀の上石器・須恵器が大部分を占め、大コンテナで8箱出土している。

古墳時代末期～奈良時代の竪穴住居跡から上石器の環・甕が出土しているが、出土遺物全体に占める割合は少なく、平安時代の住居跡からの出土数がこれらを上回っている。

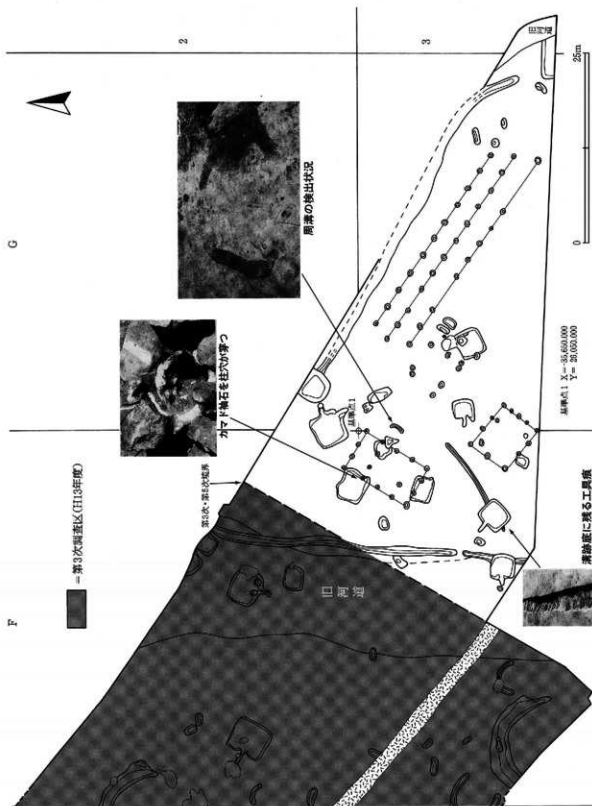
また、墓塚と推測される土坑から馬の歯と骨の一部が出土しているが、風化が著しく残存状況はよくない。

3. まとめ

今回は前年度に調査を行った区域の南東側を引き続いて実施したものである。前年度の第3次調査区は、古墳時代末期～平安時代を中心とした大規模な古代の墓塚と集落跡であった。今年度の第5次調査区は、古代以前のものとして推定される旧河道をはさんだ位置にあり、両区には1～2mの高低差が見られる。

この高低差が両調査区における遺構の分布状況にどれほどの差異をもたらすものか注目していたところであるが、前年度の一段高い第3次調査区の側には、古墳を始めとする埋葬施設や、多量の遺物が出土した大形の竪穴住居跡が存在するという特異な遺構分布の特徴が見られた。一方のやや低い位置にある本年度の第5次調査区において検出されたものは、小～中形の竪穴住居跡や近世の掘立柱建物跡などであり、小規模で不整形な円形周溝を除き、人を埋葬したものと思われる古代の古墳や墓塚等は一切検出されなかった。

2ヵ年にわたる調査を通して、古代の埋葬施設は水害を受けにくいような高燥地を選んで構築し、やや低い地形を含めた隣接する一帯に庶民の居住域が分布していた様子がうかがわれるものの、相互の時期差に大きな隔たりはなく重複も全く見られないことから、生と死の領域が重複・近接していた可能性も考えられる。



飯岡沢田遺跡5次調査グリッド及び遺構配置図



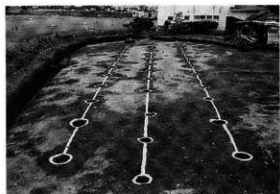
遺跡全景(北から)



竪穴住居跡(平安)



工具痕が残る溝跡(古代)



柱穴列(近世以降)



復元した竪立柱建物

飯岡沢田遺跡 5 次調査検出遺構

(19) のっこ 野古A遺跡第15次調査

所在地 盛岡市下鹿妻字北40-1ほか
委託者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘期間 平成14年8月1日～11月6日
調査対象面積 3,169㎡
発掘対象面積 3,169㎡
遺跡番号・略号 LE16-2155・ONK-02-15
調査担当者 阿部眞澄・石崎高臣・菊池賢
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

野古A遺跡は、JR東北本線仙北町駅の西約1.5km、雫石川右岸の微高地上に位置する。今次調査区は、西側がゲートボール場、北側と南東側が畑地で占められ、昨年度に行われた第12次調査区に隣接する。調査区の標高は123～125m、西側と南東側は緩やかに東に向け傾斜し、北側は微高地縁辺部にあたり北西より続く旧河道に至る。

本遺跡は、鹿妻農業用水堰を隔てて南東側に飯岡沢田遺跡、北西側に熊堂B遺跡と隣接する。周囲は盛岡南新都市計画整備事業に伴い宅地造成がすすみ、その下に調査の終了した古代の集落跡と古墳群が静かに眠る地区である。

2. 調査の概要

今次調査で検出した主な遺構は、古代の竪穴住居跡13棟（奈良時代8棟・平安時代5棟）、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1棟、焼土遺構1基、溝跡6条、土坑20基、柱穴状土坑131基、性格不明遺構1基である。基本層序は、Ⅰ層灰黄褐色土（表土・耕作土）、Ⅱ層黒色土、Ⅲ層黒褐色土、Ⅳ層黄褐色土である。Ⅲ層～Ⅳ層上面に於いて古代の遺構を検出した。

<竪穴住居跡> 竪穴住居跡は今次調査区のほぼ全域にわたって分布している。古代の遺構は、調査区北側に於いてはⅢ層中面灰白色火山灰ブロック、西側と東側ではⅢ層下面とⅣ層上面に於て、黒褐色土と黒色土の広がりで確認した。住居跡間の距離は狭いものの重複は見られず、全般に残りの状態は比較的良好である。

本遺跡における竪穴住居跡の特徴は、深く広いことである。平面形は隅丸方形で、規模は6～8m四方の大形（奈良時代3棟）、4～5m四方の中形（奈良時代3棟・平安時代4棟）、2～3m四方の小形（奈良時代2棟・平安時代1棟）に分類できる。カマドの設置位置は、奈良時代の竪穴住居跡では北西向き、平安時代の竪穴住居跡では南東向きの傾向があり、煙道は深く長いくり貫き式のものが多い。カマド軸は、平安時代のものは芯材に礫を用いるものが多いのに対し、奈良時代のそれは褐色土を主体に暗褐色土等によって構築されているものと芯材に土降器（甕）を使用しているものが見られた。作り替えは13棟中3棟（奈良時代1棟・平安時代2棟）について確認されたのみである。

また、竪穴住居跡の残存状況はよく、壁際を巡る周溝、住居内土坑や柱穴も検出することができた。

<掘立柱建物跡> 調査区北側に於いて1棟検出した。規模は2間×2間、埋土に灰白色火山灰ブロックを

含む柱穴があることから、近接する竪穴住居跡と同じく平安時代の掘立柱建物跡と考えられる。

＜竪穴状遺構＞ 調査区北側に於いて1棟検出、埋土に灰白色火山灰ブロックを含むことから、近接する竪穴住居跡や一部重複する掘立柱建物跡と同時期のものと考えられる。他の竪穴住居跡に比べ深く、投げ込まれていた土師器（甕とロクロ使用の坏）の量も多い。

＜溝跡＞ 今次調査区全体で6条検出した。調査区東側から北側の旧河道方向に流れる溝は竪穴住居跡4棟と重複し、そのいずれよりも新しい。また調査区西側の溝は、一部は欠けるものの楕円形に巡る。他4条は調査区北側に於いて旧河道に至る段丘縁と並行する位置に、残る1条は調査区を南北に縦断する。

＜土坑＞ 今次調査区全体で20基検出した。大部分は円形で出土遺物も少ない。調査区東側で検出した3基は長方形、埋土中に焼土が投げ込まれていたが、他の土坑同様遺物が少なく詳細は不明である。

＜柱穴状土坑＞ 調査区全体から検出した。規模は径約25～40cm、深さ40cm前後、埋土は褐色土を含む暗褐色土が主で、調査区北側と東側に於いては灰白色火山灰を含むものも見られる。遺物はほとんど含まれず、時期を特定出来るものは少ない。掘立柱建物跡を構成するには至らないと考えられるが、北側の一部については近接する掘立柱建物跡に関連した槽などを構成する可能性もある。

＜その他の遺構＞ 焼土遺構と性格不明の遺構がある。後者は調査区西側に位置し、埋土に焼土が認められ、長方形を呈する土坑の可能性はある。ただ、竪穴住居跡と重複しその一部が調査区外に延びていることから、全容は不明である。

＜出土遺物＞ 遺物は大コンテナで約10箱出土した。出土場所は大部分は竪穴住居跡、種類は土師器（土師器・須恵器・あかやき土器）、石器（砥石）、土製品（土玉・紡錘車）、鉄製品（釘・刀子）、陶磁器である。土師器については、奈良時代の竪穴住居跡でロクロ未使用の甕の割合が高く、平安時代の竪穴住居跡でロクロ使用の坏とあかやき土器が多い。土器と同質の粘土で作られた小型手捏ね土器状の遺物、砂底土器（土師器・甕）も出土した。

3. まとめ

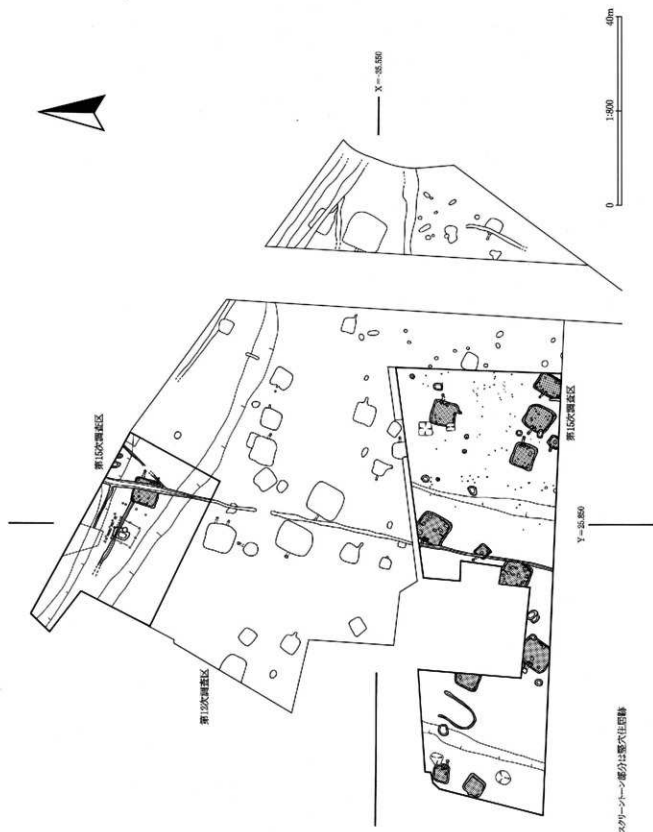
2ヶ年にわたる約10,000㎡の第12次と第15次調査により、奈良～平安時代を中心にした野古A古代集落の状況が、以下3点を中心に、ある程度明らかになってきた。

① 仙北町変電所南東及び南西部に野古A集落の中心があった。ここは、南側に向け緩やかに傾斜する微高地縁辺部にあたり、日当たりのよい場所であったであろう。

② 集落は南東・南西方向から北東にかけて広がっていった。調査結果より、カマド設置方向から識別した奈良時代の竪穴住居跡が比較的標高の高い南側に位置するのに対し、平安時代の小形竪穴住居跡は微行地縁辺部に位置していることから考えられる。

③ 集落は深くて広い竪穴住居跡で構成されている。調査区が畑地として使用された期間が長いためでもあろうが、元来大きい住居跡で構成された集落の可能性もある。竪穴住居跡が使用された年代について考えると同時に、大形・中形・小形住居跡のセット関係（組み合わせ）についても考察を深めたい。

この3点を中心に、鹿妻塚を挟んで南側に隣接する飯岡沢川遺跡や北側旧河道対岸に位置する熊堂B遺跡との関連についても考察することにより、本遺跡の性格についてより明確にしていきたい。



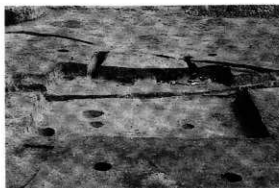
野古A遺跡第15次調査遺構配置図



調査区全景



奈良時代の竪穴住居跡(中形)



平安時代の竪穴住居跡(大形)



平安時代の竪穴住居跡(大形)カマド袖部分



掘立柱建物跡と竪穴状遺構



楕円形に巡る溝跡



作業風景

野古A遺跡第15次調査検出遺構

いいおかほやしぎ
(20) 飯岡林崎Ⅱ遺跡第3次調査

所在地	盛岡市下飯岡4地割248番ほか
委託者	盛岡地方振興局土木部
事業名	緊急地方道路整備事業 主要地方道盛岡和賀線改良工事
発掘調査期間	平成14年6月3日～11月21日
調査対象面積	2,600㎡
発掘調査面積	2,600㎡
遺跡番号・略号	LE26-1005・IHKⅡ-02-3
調査担当者	中村絵美・長洞ひかり・村木敬 島原弘征・青山紀和・立花公志
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

飯岡林崎Ⅱ遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西 3.5kmに位置し、遺跡の北方を流れる零石川によって形成された沖積地に立地する。現況は水田で、削平・盛土によって旧地形は改変を受けているが、本来は頻りに流路を変える零石川旧河道と、それに伴う自然堤防及び後背湿地が入組み、複雑な小起伏をもった地形であったとみられる。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は昨年度より継続して2ヵ年にわたって行われた。調査原因は盛岡和賀線の拡幅工事に伴うものであり、調査対象区域は道路の両側に沿った細長い形状となっている。今年度調査を行ったのは、昨年度調査できなかった水路分、および道路東側南端部で2,600㎡が対象範囲となっており、2ヵ年の合計面積は6,132㎡である。

検出された遺構は、竪穴住居跡28棟、土坑16基、溝跡41条、柱穴状土坑約150基、掘削痕多数、捨て場1箇所である。しかし調査区を縦に分割しているために、大部分が昨年度検出遺構から続くもので、2ヵ年の合計は竪穴住居跡37棟、土坑25基、溝跡57条、柱穴状土坑約400基、掘削痕多数、捨て場1箇所である。

<竪穴住居跡> 竪穴住居跡は調査区南北両端の旧河道の内側、やや高くなっている区域に分布する。形状は方形で、規模は一辺が2.3～6.7mある。十和田A降下火山灰は埋土上層に含まれるものの、埋土下層では認められず、廃絶時期は火山灰降下以前と推定される。出土遺物も概ね9世紀代のものを中心としており、これと矛盾がない。カマド構造は西・東・北西と様々だが、西向きの方がやや古い傾向にある。カマドの燃焼部を住居壁より内側に設けるものが大半を占めるのに対し、住居壁より外側に燃焼部を設置する住居跡が2棟された。後者は出土遺物から集落内でも古い様相を示すがカマド構造は東を向いている。そのうち1棟からはいわゆる北陸型といわれる丸底長胴甕が出土しており、これらの住居跡は集落の中でも特異な例を示すものと思われる。カマドの他に地床炉も持つものも3棟ある。廃止住居跡も確認され、特にC区南端の住居跡は、炭化材等の残存状態が非常に良好であった。昨年度に住居東側の調査を行い、今年度は西側カマド周辺を調査した。住居床面にカヤ状の繊維が敷かれ、その上に住居に使用された棒状・板状・カヤ状の織

維が覆い被さっていた。住居跡南西部には炭化した米がまとまって固結した状態で見つかった。いくつかのまとまりを持つが、多いところで厚さ4cmほど、1.2×0.7mの範囲に広がる。カマドの灰層の中からは多くの骨片も見つかった。また、昨年度に検出された柱穴と対になる位置に柱穴が検出され、柱材が腐らずに残っていた。

<竪立柱建物跡> 2間×2間の建物跡が1棟検出された。埋土の標相からは古代に該当すると思われるが、出土遺物からは時期を特定できなかった。その他調査区内には柱穴状土坑が多く検出されたが、礎板や礎石を持つ柱穴もあり、古代のものと近世以降のものが混在しているようである。建物跡への復元が可能であるか今後検討を要する。

<溝跡> 古代の溝は調査区の中央部、若干低くなっている区域で検出された。幅20～30cmの溝が1.6～2.0mほどの間隔で何条も並んでいる。本来の深さは不明であるが、底面の標高値にほとんど差はない。底面には土具痕が観察でき、工具痕からはある程度幅を決めて掘られた溝であるということが想定できる。ほぼ同じ幅・間隔を持つことから個々に存在していたのではなく1連のものと思われるが、水が流れていた痕跡はない上に、調査区外へと延びていくものと途中で止まってしまうものがあり、性格は不明である。埋土上層に「和田a降下火山灰を含むことから、集落の形成時期とあまり差はないと思われる。

<掘削痕> 面的な広がりを持ち底面をかき混ぜたような痕跡のあるものと、幅20～30cmの帯状のものがある。前者は竪穴住居跡を切るため集落の時期よりも新しく、後者は埋土にはいる火山灰の状況から竪穴住居跡の時期に近いものと思われる。帯状の掘削痕は調査区の中の低い区域に分布し、底面に土具痕が確認できる。これらがいくつか平行しており、さらに同様のものが傾きを変え重複している。検出面にこの土具痕のみが残る場所もあり、このような掘削痕がもともとは溝状のものが削平されてしまったものである可能性が高い。

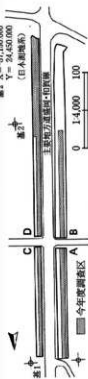
<旧河道> 調査区の南・北端はそれぞれ旧河道に向かってやや急激に落ち込み、その先は緩やかに立ち上がって遺跡より一段低い低地へと連続している。ここでは、塊状の「和田a降下火山灰が旧地表面にのるように水平に堆積していることから、降下時点ですでに流水はなく湿地状を呈していたものと推測される。A区北端旧河道では、隣接する居住域から投棄されたと思われる土器・須臾器が火山灰の下位層からまとまって出土した。一方、南端旧河道では昨年度と同様、最下部より縄文時代末葉～弥生時代初頭の土器片が数点出土している。

<出土遺物> 大半が平安時代前半の土器で大コンテナ10箱程度出土した。その他の出土遺物は、羽口、椀形盃治洋、木製品（椀・柱材等）、炭化米、炭化材、骨片、縄文時代末葉～弥生時代初頭の土器・中世陶器等である。

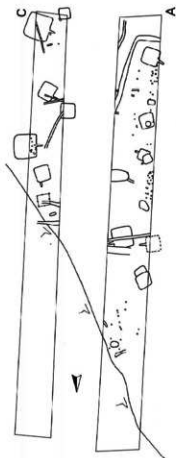
3. まとめ

2ヶ年の調査により、飯岡林崎Ⅱ遺跡は平安時代の集落跡であることが判明した。集落の中でも高くなっている区域を居住域とする一方、低くなっている区域はそれ以外を目的として使用しており、集落内で土地の使い分けを行っていた可能性がある。低い区域にまとまる溝跡等がどのような性格持つのかということは今後の検討課題である。また焼失住居の出土資料からは、住居の上層構造・炭化米のDNAの鑑定の結果等、今後より詳細な事実が判明するものと思われる。

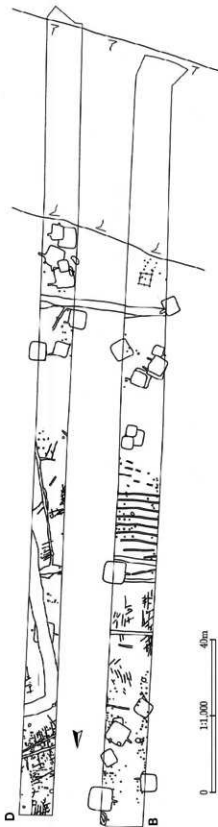
基1 Y=24,600,000
 X=24,450,000
 基2 Y=24,450,000
 X=24,450,000
 (日本人館跡)



〈調査区全体図〉



- 竪穴住居跡
- 竪立柱建物跡
- 土坑
- 溝跡
- 掘削痕
- △ 柱穴状土坑



0 14,000 40m

飯岡林崎Ⅱ遺跡遺構配置図



焼失住居跡(C区)



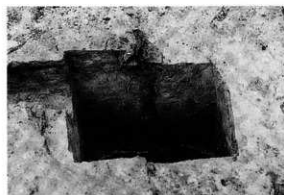
竪穴住居跡(D区)



焼失住居跡カマド(C区)



竪穴住居跡カマド(D区)



焼失住居跡柱穴(C区)



掘立柱建物跡(C区)



平行する溝跡(B区)



掘削痕(D区)

飯岡林崎Ⅱ遺跡検出遺構

(21) 貝の淵 I 遺跡

所在地	石鳥谷町関口15地割31-2ほか
委託者	花巻地方振興局土木部
事業名	一般国道456号地域活性化 支援道路整備事業
発掘調査期間	平成14年4月8日～6月18日
調査対象面積	3,020㎡
発掘調査面積	3,020㎡
遺跡番号・略号	ME07-0167・KF I-02
調査担当者	佐々木信一・野中真盛
協力機関	石鳥谷町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 花巻

1. 遺跡の立地

貝の淵 I 遺跡は、JR東北本線石鳥谷駅の南南西約4kmに位置し、北上川左岸の河岸段丘上に立地している。標高は89～91m、遺跡の現況は畑である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡13棟（平安時代）、住居状遺構1棟、陥し穴状遺構3基、焼土遺構2基、溝跡3条である。出土した遺物は、大コンテナ10箱分で、内訳は縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、陶器、土製品、鉄製品である。

＜竪穴住居跡＞ 13棟検出された。調査区域中央部に集中している。大きさ・形状は、一辺が3.5m前後の隅丸方形のものがほとんどであるが、中には一辺が約8mの隅丸方形と推定される大型住居跡もある。カマドは、北壁または北西壁の中央部に設置されているのが8棟（そのうち1棟は作り替え）、東壁の中央部に設置されているのが1棟で、残り4棟は遺構の一部が調査区域外のため不明である。煙道は割り抜き式が5棟、狹り込み式が2棟である。また、床面から炭化材が検出されたものが1棟あり、焼失住居の可能性がある。

13棟のうち5棟の埋土に十和田A降下火山灰が含まれていることと出土した遺物から、これらの住居跡は平安時代前半のものと考えられる。

＜住居状遺構＞ 調査区域中央部や東寄りから1棟検出された。中央部分は南北に延びる溝跡によって切られている。平面形は隅丸方形で、大きさは3.0×3.2m、壁高は2.9～18.6cmである。検出面や溝跡との切り合い関係から、竪穴住居跡と同じ平安時代前半と考えられる。

＜陥し穴状遺構＞ 住居状遺構の床下及び南西部から3基検出された。いずれも溝状の陥し穴状遺構で、1～1.5mの間隔で並んでいる。長軸方向はほぼ北西～南東である。床下から検出された1基は、長さ2.56m、幅25～30cm、深さ38～46cmである。南西部から検出された2基は攪乱を受け、北西部の一部が残存のみである。残存部の規模は、1基が長さ1.05m、幅46～53cm、深さ57～70cm、もう1基は長さ72cm、幅42～45cm、深さ50～70cmである。

＜焼土遺構＞ 調査区域中央部と東部からそれぞれ1基ずつ検出された。形状はどちらも不整形で、規模は

中央部の焼土が径50×82cm、厚さ6cm、東部の焼土が径50×79cm、厚さ6cmである。時期は不明である。

<溝跡> 3条検出された。調査区域中央部から2条、中央部やや東寄りから1条である。中央部から検出された2条のうち1条はほぼ南北に延びており、北端は調査区域外へ延び、南端は攪乱されている。規模は長さ14m、幅35～50cm、深さ10.3～24.2cmである。もう1条は東へ延び、その後南へ向きを変えており、途中で住居跡2棟の一部を切っている。規模は長さ11m、幅30～55cm、深さ5～16.3cmである。西端と南端はどちらも調査区域外へ延びている。中央部やや東寄りから検出された1条は、南北に延び、その後ほぼ直角に東へ向きを変えており、途中で住居状遺構と住居跡を切っている。北端は調査区域外へ延び、東端は途中で切れている。規模は長さ59m、幅42～122cm、深さ6.8～74.7cmである。切り合い関係から、3条とも住居跡より新しいと考えられるが、詳細は不明である。

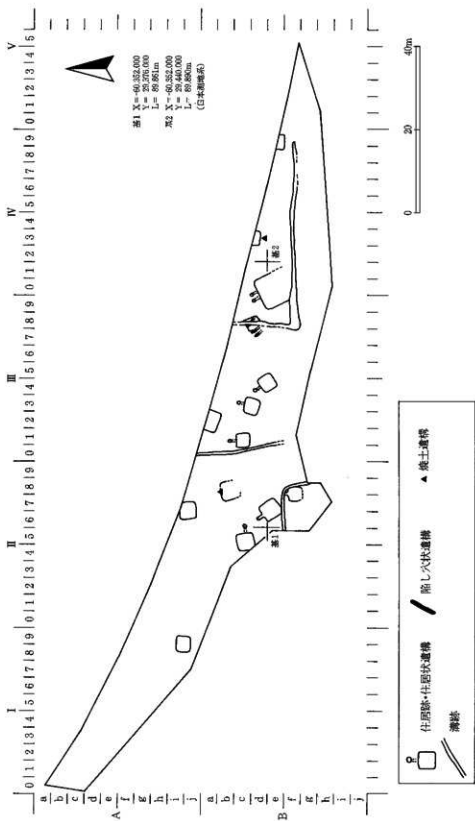
<出土遺物> 大コンテナで10箱出土した。ほとんどが遺構内からの出土である。内訳は縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、陶器、土製品、鉄製品で、そのうち土師器が大部分をしめる。縄文土器は中期中葉の深鉢、弥生土器は初頭の浅鉢と高坏、石器は石鏝である。土師器は坏、甕、鉢、瓶、耳皿で、坏と甕が多い。坏はロクロ使用のものが多く、ロクロ不使用のものも出土しており、その割合は2：1である。また、墨書されたもの6点、刻書されたもの1点、底部に線刻されたもの1点も出土している。甕は長胴甕が多いが球胴甕も数点出土しており、煤けたものや炭化物が付着しているものが多い。須恵器は坏と甕である。陶器は灰釉陶器で、器種は長頸瓶と考えられる。土製品は紡錘車、鉄製品は刀子である。

3. まとめ

調査の結果、本遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判明した。随し穴状遺構が検出されたことから縄文時代には狩り場として使われた時期があり、竪穴住居跡が検出されたことから平安時代前半には集落が営まれていたことがわかった。

また、遺物として墨書及び刻書された坏が出土したことから識字層の存在が、灰釉陶器が出土したことから一般庶民とは異なる有力者が存在していたことがそれぞれ推測される。

遺構の検出状況や地形から考え、本調査区域の北側から住居跡等の遺構が更に検出される可能性がある。



川の型Ⅰ遺跡遺構配置図



調査区域全景



平安時代の竪穴住居跡



炭火材出土状況



溝跡・陥し穴状遺構

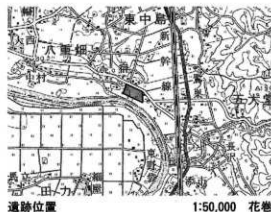


遺物出土状況

貝の淵Ⅰ遺跡検出遺構

(22) 宿遺跡

所在地 石鳥谷町八重畑26地割ほか
委託者 花巻地方振興局
花巻農村整備事務所
事業名 ほ場整備八重畑地区
発掘調査期間 平成14年 8月 9日～11月 7日
調査対象面積 3,020㎡
発掘調査面積 3,020㎡
遺跡番号・略号 ME17-0110・SK-02
調査担当者 早坂 淳・高木 晃・小林弘卓
協力機関 石鳥谷町教育委員会



1. 遺跡の立地

宿遺跡は花巻空港から東におよそ4km、北上川が大きく西へ曲がる手前の左岸段丘上(標高83m前後)に位置している。調査開始前は、水田からの転作による畑作地の一部と、それに隣接する農道であった。

なお、調査区は東西に延びた農道沿いの長さ約230m、幅約10mの細長い区域(A区・B区)、さらにその中央付近および東端から、それぞれ長さ約100m、幅約5mで細長くL字型を描くように南に延びる区域(C区・D区)からなっている。

2. 遺跡の概要

<掘立柱建物跡> 2棟検出した。いずれも直径40～50cmの柱穴からなり、2間×2間の総柱の建物を構成しているように見える。それらのうち、B区中央で検出された1棟は、西北西を向く面の柱間が約5m、南南西を向く面の柱間が約4mと大きく、全体はやや長方形である。また、西北西側に約3.5m離れて底の跡と考えられる柱穴が1基検出された。一方D区南側で検出された1棟は、柱穴列の一部が調査区域で切られているが、柱間はおよそ2mで全体は正方形に見える。さらに、その南北両側には約1.2m離れて柱間2mの平行な柱穴列が検出されており、南北両側に庇を持っていたと考えられる。なお、2棟とも調査区域に隣接しているため、調査区外にも建物が延びている可能性があったが、今回の調査ではどちらも全容がつかめなかった。これらの2棟はいずれも出土遺物が全くないため、時代は特定できない。

<土坑> 33基検出した。形状は円形および楕円形で、深さは検出面から20～50cmである。土坑の多くはA区東側およびB区東側に分布している。土坑からの遺物はほとんどない。また、埋土の状況から見て地山の落ち込み、あるいは時代不明の掘乱れを含んでいる可能性がある。

<陥し穴状遺構> 44基検出した。これらの陥し穴状遺構は、形状の違いから、溝状、円形、長方形の3種類に大きく分けられる。溝状が37基と最も多く、主にB区とC区に集中している。特にB区では、厚い砂層を掘り抜いたものも幾つか見られ、上半部の砂壁が崩落して厚く埋まっていたために、当初地山(砂層)の落ち込みと見誤るものもあった。大きく崩落したものについては、下半部に残存する壁面や底面の形状のみが判明するにとどまった。溝状のもの計測値は、開口部が大きく崩落したと考えられるものや、調査区外に延びるため完掘できなかったものを除き、開口部の幅20～80cm、長さ2～4m、深さ0.7～1.2m程度であ

る。長方形のものは4基確認された。A区東側では、底面の長さ約2m、幅約50cmの類似した形状・規格のものが2基平行に並んで検出された。また、調査区外に続くために完掘できなかったものが2基ある。これら4基のうち3基の底面には、逆茂木痕と考えられる直径10cm弱の穴が2～3基ずつ一列に並んで確認された。円形のものは3基確認された。直径1～1.5mで、これらの底面の中央にも逆茂木痕と思われる直径8～9cmの穴が1基ずつ確認された。これらの陥し穴状遺構は、既に縄文時代と特定されている多数の遺跡に見られる陥し穴と類似した特徴をもち、縄文時代の陥し穴であると見て間違いないものと考えられる。なお溝状のものは、調査区中央から東側にかけて偏って分布しており、部分的に密集しているような様子も見られる。さらに、長軸が東南東から南東の間を向いているものが多い。一方、円形のものはA区西端の2基とB区東端の1基に分かれ、特に西端の2基は、同じような形状・規格である。長方形のものには特徴的な分布は見られなかった。

<溝跡> 17条検出した。それらのうち、1条からは土師器片がわずかに出土しているが、その他の溝からは遺物がほとんど出土せず、従っていずれも時代の特定は難しい。しかし中には陥し穴を切っている溝も見られ、それらに限っては少なくとも縄文時代以降の溝であると考えられる。

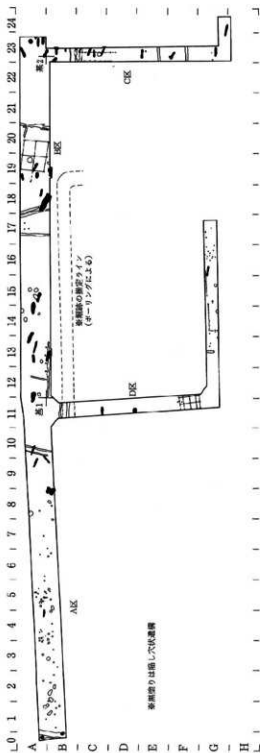
<堀跡> 1条検出した。開口部の幅約4m、深さ約1.5m、底面の幅約70cmの逆台形状の断面を有するものである。底部には約25cmの厚さで粘土の堆積が見られる。堀跡からは遺物が出土していないため、時代は特定できなかった。規模およびその位置から見て、この堀跡は隣接する八重幡館跡の一部である可能性が高く、関連性を検討する必要がある。この堀跡の東南東側の調査区外での延長部分をボーリングで探ったところ、80m近く進んだところで南に曲っていくことが分かった。

<柱穴状小土坑等> 掘立柱建物跡を構成しているもの以外に、A区西側やC区北側、D区南東側などで1～2条の柱穴列を検出しているが、遺物を伴わないためそれらの性格および時代は不明である。C区南側の単独と見られる直径20cm程の小土坑からは、11世紀後半のものと見られる赤みを帯びたほぼ完形になる土師器環1個体分の破片が出土している。これらの破片は、埋土を挟んで上下に分かれて埋まっており、意図的に埋められた可能性も考えられる。

<出土遺物> 縄文時代後期・晩期と見られる土器片、平安時代後半と見られる土師器片、近世後半から近代の陶磁器類の破片など合わせて小コンテナ1箱分が出土した。縄文土器片が主に調査区の西半分(A・D区)で出土し、土師器片・陶磁器片は主に調査区の東半分(B・C区)で出土した。ほとんどが遺構外からの出土であり、全体の形状が判明するものには、前述の土師器環と12世紀代と見られるロクロかわらけがある。

3. まとめ

今回の発掘調査の結果から、この調査区域を含む一帯が縄文時代には陥し穴による獵場であった可能性が高い。また、少数の掘立柱建物跡が見つまっているが、遺物を伴わないため古代以降のものであろうということ以上に詳しく時代を特定することはできなかった。木調査区の西側には、永享年間(1429～41)領主稗貫氏の執権であった八重幡氏が居を構えたとされる八重幡館跡が隣接しており、今回検出された堀跡との関連性を検討する必要がある。



東: X = 42,803.854
 Y = 25,011.899
 南: X = 42,817.531
 Y = 25,172.531
 (単位: 米)

宿舎跡地構配置図



宿遺跡全景



陥し穴状遺構(溝状)



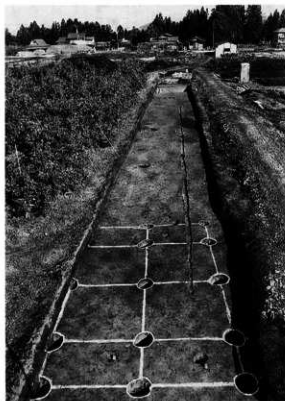
陥し穴状遺構(円形)



陥し穴状遺構(長方形)



堀跡



掘立柱建物跡

宿遺跡検出遺構

(23) 高畑遺跡

所在地 神賀郡石鳥谷町字五大堂第16地割
123番地ほか
委託者 花巻地方振興局花巻農村整備事務所
事業名 県営ほ場整備事業八重畑
発掘調査期間 平成14年4月16日～11月22日
調査対象面積 4,800㎡
発掘調査面積 4,800㎡
遺跡番号・略号 ME17-0178・TB-02
調査担当者 村上 拓・張地 剛
協力機関 石鳥谷町教育委員会



1. 遺跡の立地

高畑遺跡は石鳥谷町東部南端、花巻空港の東方約4kmに位置し、遺跡付近で北上川と合流している添子川によって形成された低段位丘上に立地している。東北新幹線新花巻駅からは路線を約2km北上した地点にあたり、付近一帯約11万㎡が遺跡範囲として登録されている。東北新幹線建設に伴う発掘調査（昭和49年）では、複式炉をもつ竪穴住居跡群で構成された縄文時代中期末葉の集落跡が検出されている。

2. 調査の概要

今回調査を行ったのは遺跡付近で東北新幹線と併走している国道456号線東側の1地点（A区）と、新幹線の西側に位置する2地点（B・C区）の計3地点である。いずれの調査区も水田・畑地として利用されてきており、結果、多くの部分が削平・攪乱を受けていた。以下、調査成果の概要を区別に記す。

(1) A区 3地点のうち最も広い3200㎡を調査した。今次調査で検出された遺構・遺物は大半が当区のものである。縄文時代前期末葉～中期初頭（大木6～7a式期）の遺構として大形住居跡1棟、土坑25基、陥し穴状遺構35基、柱穴約1,000個が検出され、南東部では近世屋敷に伴う建物跡が検出された。遺物としては縄文時代前期末葉～中期初頭の土器が大ココンテナで90箱、剥片石器が中ココンテナ7箱、敲磨器類を中心とする礫石器が中ココンテナ7箱、その他石製品・土製品類が数点出土している。

<大形住居跡> 南西部で検出された残存形が長方形の大形住居跡は、南壁側を失っており、唯一全長の知れる北壁は12mの長さをもつ。北壁際には4つの柱穴が柱間3.3mで並び、これらと対向する南側の柱穴列とともに1×3間の柱配置を構成している。床面上には柱穴列と平行するように3基の炉が並んでおり、両端の2基が石囲炉、中央の1基が地床炉（配石を失った石囲炉の可能性有）となっている。長方形・長楕円形大形住居跡が長軸上に炉を複数持つ例は多く知られるが、仮にこの住居跡の南壁が（北壁側と同様に）南側柱穴列に沿った形であったとするならば、炉は住居の長軸（中心線）上には位置せず著しく南壁側に偏った特異な状況を示すものとなり、全体像の理解を困難にしている。炉付近の床面上からは同一の母岩から剥取された剥片がまとめられた状態で出土し一部に石鏃や筒状石器の未製品が含まれることや、石鏃の出土が北壁際の一部に集中することなど、住居内部の利用状況を示唆する興味深い出土状況が認められる。なお、壁の立ち上がり認識できた住居跡はこの1棟のみであったが、柱穴および炉の配置から同様の住居跡とな

る可能性をもつ部分が調査区内に数箇所認められる。これらについても今後検討を加え復元に努めたい。

〈土坑〉 当区中央を南北に縦断する沢跡（当時の環境は湿地状？）の縁では、平面形が円～楕円形、開口部径1～3mほどの土坑が計18基検出された。大半は当区西部部に集中している。楕円形のものでは長軸両端と床面中央に小ピットをもつ例が複数認められる。平面形の違いや底面ピットの有無を問わず、多くの場合埋土の下半部が人為的あるいは壁の崩落などによって一気に埋まった様相を示し、凹地状となった時点で焼土・炭化物のまとまった流入が数回認められる。うち数基では明らかに埋没途中の凹面上で生成された焼土を確認でき、変化した壁面に残存しているものもみられた。換成面上面や流入した焼土・炭化物層には土器や剥片などの遺物が集中している。これらの土坑の機能・性格を特定するにはさらなる検討を要する。

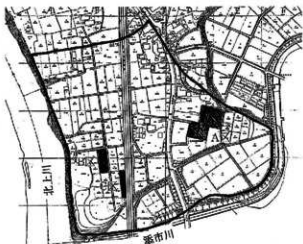
〈陥し穴状遺構〉 沢跡の東西両縁では楕円形の陥し穴状遺構が列状に連なって検出された。列は等高線に平行し、個々の長軸はこれと直交している。底面には2個の小ピットをもつ場合が多く、埋土最上部に縄文時代中期初頭の遺物を含む。一方、これらとは形態を異にする溝状の陥し穴状遺構も調査区内に点在する。沢筋に沿って分布する傾向は前者と同様だが、個々の向きや互いの位置関係に規則性は見出せない。

(2) B区 新幹線西側に位置する2地点のうち北側に位置するのが当区である。北西部は旧河道に深く削り取られ南東部も沢跡状に低くなっている。これらに挟まれた帯状の高まりでは全面に砂礫層が露出している。南東部沢跡の埋土上部には縄文時代晩期末葉～弥生時代初頭の土器（小コンテナ1箱程度）がまとまって出土する地点が認められた。この遺物のまとまりは旧河道と沢跡を連絡するように横断する溝跡の延長上に位置しており、同溝跡に伴うものである可能性が高い。一方、南西端部では1×3間の掘立柱建物跡が検出されている。中央には炉穴（いろいろ？）をもち焼土層と灰層が互層をなしている。炉内や柱穴の埋土がしまりを欠く点などは近世以降のものとも思わせるが、時期を示す遺物の出土もなく不明といわざるを得ない。

(3) C区 東北幹線の西脇に接する当区は北部で昭和49年の調査区と連続している。以前の調査と同様複式炉を伴う竪穴住居跡1棟が検出されたが、床面以下まで削平を受けており痕跡的な残存状況である。当区中央を北西から南東にかけて横断する沢跡の上部からは縄文時代中期末葉～後期の土器（大コンテナ2箱）が出土している。沢跡の南縁には同時期の土坑6基がまとまって分布する。この沢を境界として北東側の緩斜面上に集落が広がっていたと考えられる。一方、調査区南端部では永楽通費・實徳通費が削平された墓坑1基が検出された。銭貨のほかにも漆塗膜や、指先大の赤色頁岩のまとまりが底面から出土している。周囲を円形～隅丸方形にめぐる溝は、墓坑に伴う可能性もあるが積極的それを示す根拠は見出せなかった。

3. まとめ

今回の調査は広い遺跡範囲のうちの3地点を対象とし、結果、それぞれの調査区で時期の異なる遺構・遺物が検出された。遺跡東部に位置し3地点のうち最も標高の高いA区付近には縄文時代前期末葉～中期初頭の集落が広がり、一方、遺跡南西部のC区では縄文時代中期末葉の集落の存在が再確認された。また、北上川に近く最も標高が低いB区は水の影響が大きい不安定な環境に永くあったらしく、遺構・遺物が認められるのは縄文時代晩期末葉に至ってからである。これらのことは、人々が環境の変化に伴って適地を選択し、断続的にこの付近の土地を利用してきたことを示しているといえよう。今後、遺跡内容の詳細についてさらに検討を深めたい。



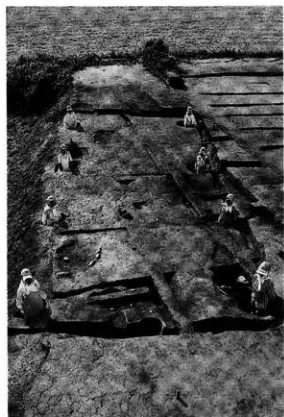
遺跡の範囲と今回の調査区



高畑遺跡遺構配置図



A区全景(左方が北)



大形住居跡(A区)



底面ビットをもつ楕円形土坑(A区)



襷式伊をもつ壘穴住居跡(C区)

高畑遺跡検出状況

(24) 九重沢遺跡

所在地	遠野市遠野町第30地割字九重沢3-1
委託者	遠野地方振興局土木部
事業名	遠野第二ダム建設
発掘調査期間	平成14年8月12日～10月30日
調査対象面積	1,300㎡
発掘調査面積	1,449㎡
遺跡番号・略号	MF55-0082・KJS-02
調査担当者	北田 勲・川又 晋
協力機関	遠野市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 遠野

1. 遺跡の立地

九重沢遺跡は、遠野市の南部、遠野市役所から南に約1km、JR釜石線遠野駅からは南に約1.5kmに位置し、物見山(917.1m)の東側を北流し猿ヶ石川に注ぐ、栗内川の西側河岸段丘緩斜面上に立地している。遺跡の標高は283m前後、現況は山林・畑地である。

2. 調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3棟、竪穴住居状遺構3棟、土坑18基、焼土遺構39基、柱穴状小土坑21基、旧河道1条である。調査区内は南に向かって傾斜していく地形であり、表土層の下に崖礫性堆積による花崗岩質砂礫層が厚く堆積している(10cm～3m)。さらに黒色土層、暗褐色土層の下に十和田中環火山灰(降下年代約5,500年前)と考えられる黄白色火山灰が堆積している。

<竪穴住居跡> 竪穴住居跡3棟は確定的な時期は不明である。覆土中に見られる遺物は縄文時代早期前葉～前期初頭の土器が見られるが、いずれも不整形プランで、炬をもつものは1棟のみである。この住居跡は覆土上部に十和田中環火山灰をレンズ状に堆積することから、出土遺物の時期とほぼ一致する。他の2棟は十和田中環火山灰下層で検出されたことから、前述の住居跡よりも古い時期に属すると考えられる。

<竪穴住居状遺構> 竪穴住居状遺構とは住居跡になる可能性があるが、炬を持たず、プランも不整形であり柱穴も検出されなかった遺構で、3棟検出した。詳細な時期は不明である。

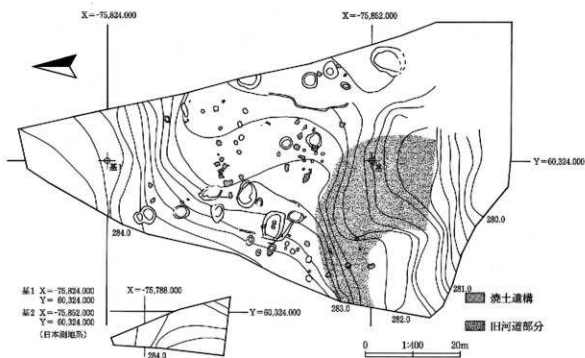
<土坑> 土坑は18基検出しており、平面形は円形や楕円形など一定せず、断面形は皿形が多数である。時期はいずれも縄文時代であるが、詳細な時期は不明である。

<焼土遺構> 焼土遺構は39基検出している。いずれも十和田中環火山灰層よりも下層であるため、時期は早期前葉～前期初頭と位置づけられる。

<出土遺物> 九重沢遺跡から出土した遺物は大量コンテナで約21.5箱である。縄文土器は19箱で早期前葉～前期初頭のものが出土しており、主体は早期末葉である。石器は2.5箱で剥片石器が大半を占め、礫石器はその半数以下である。

3. まとめ

今回の調査の結果、九重沢遺跡が縄文時代早期前葉～前期初頭という限られた時期に営まれた集落跡の縁辺部であることが確認された。遺物は混在しているが、連続する時期の良好な資料が得られたと考えられる。



九重沢遺跡遺構配置図



調査区全景



砂礫堆積状況



竪穴住居跡



土器出土状況

九重沢遺跡検出遺構・出土遺物

(25) とちほら 栃洞Ⅱ遺跡

所在地 遠野市遠野町第31地割字女男石
47-7ほか
委託者 遠野地方振興局土木部
事業名 遠野第二ダム建設
発掘調査期間 平成14年4月10日～7月31日
調査対象面積 4,108㎡
発掘調査面積 4,108㎡
遺跡番号・略号 MF55-0093・THⅡ-02
調査担当者 星 幸文・金子昭彦・坂部恵造
協力機関 遠野市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 遠野

1. 遺跡の立地

栃洞Ⅱ遺跡は、JR釜石線遠野駅から南へ1.7km、米内川によって形成された河岸段丘左岸上に位置し、標高は約280mである。現況は東側が山林、西側が果樹園である。

2. 調査の概要

検出遺構は、堅穴住居跡3棟、住居状遺構1基、焼土遺構24基、土坑12基、陥し穴状遺構3基である。

＜堅穴住居跡＞ 調査区北側から縄文時代中期のものが1棟、南側から後期のものが1棟検出された。平面形は円形及び不整形長方形を呈し、どちらも住居内に石囲炉を持つ。もう1棟は詳細不明である。

＜住居状遺構＞ 調査区中央に1基検出された。遺物が伴わないため、時期については不明である。

＜焼土遺構＞ 24基の中には二次堆積の焼土の可能性があるものが含まれる。調査区中央には2m程の間隔をあけて4基が並んでいる状態で検出されており、住居跡の炉とも考えられるが周囲に柱穴等は見当たらない。他にチップを含み、石器製作に関わる可能性を窺わせる焼土が1基ある。

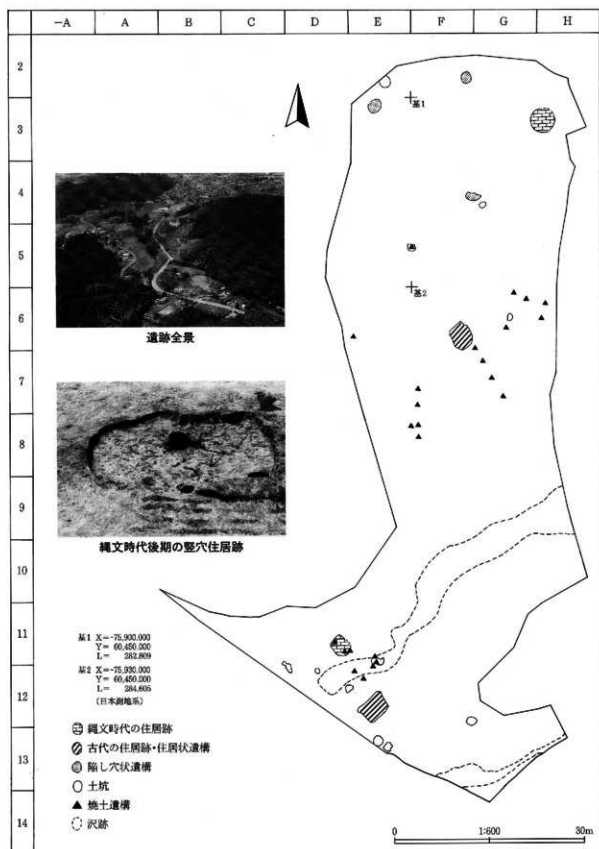
＜土坑・墓坑＞ 12基のうち縄文時代に属する可能性のあるものは8基である。形状は円形や楕円形となるものが9基と大部分を占め、片方の先端が尖る砲弾形を呈するものも見られる。また、埋め戻された堆積土の状態から墓坑の可能性が高いと判断されるものが4基あり、後期前葉の切断葺き土器や宮戸Ⅰb式土器が出土している。

＜陥し穴状遺構＞ 平面形が円形を呈するものが2基、長方形を呈するものが1基調査区北側から検出された。円形のものには底部に凹穴を持つ。形状から縄文時代のものである可能性が高い。

＜出土遺物＞ 大コンテナで13箱分の縄文土器が出土している。時期は早期～晩期にかけて幅広く、前期初頭～中葉、後期前葉の釜沢式、宮戸Ⅰb式等が主体となる。石器は剥片類が多く、接合資料を含む。この他中世の永楽通宝も出土している。

3. まとめ

本調査区は縄文時代の長い時期にわたり、生活の場として利用されていたことが明らかになった。後期前葉の墓坑や接合可能な石器など興味深い資料もあり、今後周辺遺跡との関係をふまえて検討していきたい。



柝洞Ⅱ遺跡遺構配置図

ひらくらかんの
(26) 平倉観音遺跡

所在地 遠野市上郷町平倉第47地割字観音21
委託者 遠野地方振興局
遠野農村整備事務所
事業名 県営ほ場整備猫川左岸地区
発掘調査期間 平成14年4月8日～5月31日
調査対象面積 2,600㎡
発掘調査面積 2,600㎡
遺跡番号・略号 MF66-1099・HK N-02
調査担当者 島原弘征・太田代一彦
協力機関 遠野市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

平倉観音遺跡はJR釜石線岩手上郷駅の南南西約600m、早瀬川右岸の独立丘陵上に位置している。遺跡のある丘陵の山頂付近には中世城館跡である刃金館があり、遠野七観音の一つである平倉観音が遺跡の北側に隣接している。標高は355～358m前後、調査前の現況は水田で、昭和30年代に行われたほ場整備により、調査区中央付近の標高の若干低い部分以外は削平を受けている。

2. 調査の概要と検出遺構

今回の調査で検出した遺構は土坑7基、柱穴状土坑154基、遺物包含層1箇所である。

<土坑> 調査区北側～中央から7基検出したが、前回のほ場整備時による削平により残存状況は不良である。平面形は円形ないし楕円形を呈している。

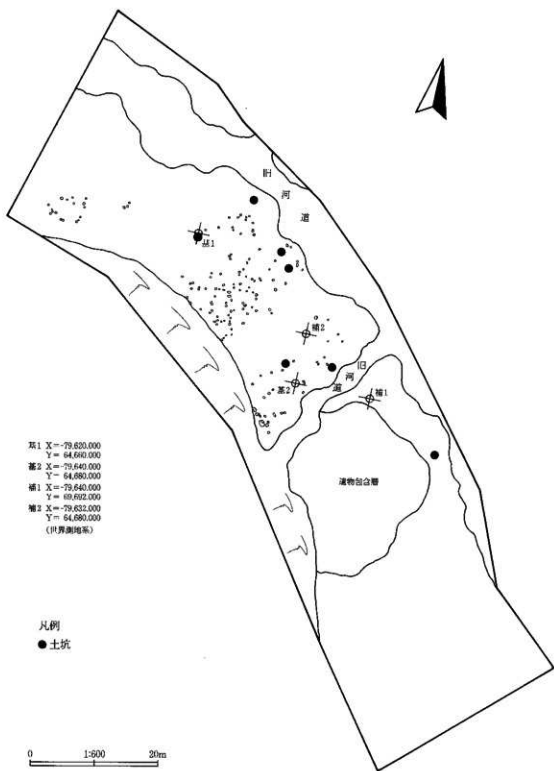
<柱穴状土坑> 調査区中央を中心に154基検出したが、掘立柱建物跡を構成する柱穴は検出されなかった。遺物は出土していないことから時期は不明である。

<遺物包含層> 調査区中央南側より約300㎡を検出した。最大厚は50cmを測る。大きく3層に細分され弥生時代前期の遺物が出土している。また、包含層中からは遺構は検出されなかった。

<出土遺物> 今回の調査で出土した遺物は弥生土器が大コンテナ11箱、石器類が中コンテナ1箱出土し、主に遺物包含層と旧河道から出土している。そのほか、陶磁器数点、不明鉄製品2点が表土・旧河道より出土している。

3. まとめ

今回の調査では弥生時代の遺物包含層と時期不明の土坑・柱穴状土坑・旧河道が検出された。遺物包含層は溝状の緩斜面上に斜面上位から遺物が流入して形成され、その底の部分が開田時の削平を受けずに残ったものであると思われる。調査区内からは弥生時代の遺構は検出されていないことから、開田時に削平されたか、調査区周辺、特に調査区北側の斜面上位面に該期の集落があった可能性が想定される。



平倉観音遺跡遺構配置図

おおほし
(27) 大橋遺跡

所在地 北上市和賀町横川目 6 地割38ほか
委託者 北上地方振興局
北上農村整備事務所
事業名 中山間総合整備岩間地区
発掘調査期間 平成14年 4月15日～11月29日
調査対象面積 4,700㎡
発掘調査面積 4,700㎡
遺跡番号・略号 ME52-2325・OH-02
調査担当者 八木勝枝・吉田真由美
協力機関 北上市立埋蔵文化財センター



1. 遺跡の立地

大橋遺跡はJR北上線横川目駅から南西1km地点に位置し、和賀川左岸の扇状地扇端～氾濫平野に立地する。遺跡の標高は120m前後で現況は水田と畑である。和賀川との比高は約13mを測る。

2. 調査の概要

遺跡の層序は表土以下Ⅱ層暗褐色土（遺物包含層）、炭を微量含むⅢ層暗褐色土、Ⅳ層明褐色土、Ⅴ層暗褐色土、Ⅵ層褐色土に区分される。Ⅲ層以下無遺物層である。Ⅵ層のいわゆる地山は調査区南から北へ向けて緩やかに傾斜している。その谷部分にⅢ～Ⅴ層が堆積しており、大橋遺跡の時期である縄文時代晩期中葉には調査区はほぼ平坦で、東の北盛土遺構・南盛土遺構の間に浅い谷が入っていたと推定される。遺物包含層はⅡ層、北・南盛土遺構はⅡ層中に含まれ、遺構検出面はⅡ～Ⅲ層上面である。

検出遺構は、住居跡1棟・盛土遺構2箇所・遺物捨て場2箇所・配石遺構4基・列石1基・土坑および柱穴状土坑56基・焼土および炉跡5基である。

<住居跡> 調査区北東に位置し、北盛土遺構最上面で確認した。表土直下であるため半壊している。石囲炉は円形で直径55cm、褐色粘土の貼床範囲は石囲炉を中心に長軸1.7m残存する。周辺に柱穴状の小ピットが確認されたが住居跡に伴うかは検討中である。

<盛土遺構> 北盛土遺構は調査区北東に位置し、長軸（南北）24m、短軸（東西）12m、最大高約1mである。炭層と褐色砂質シルト層、暗褐色シルト層が互層をなす。石囲炉3基とそれに伴う床面を盛土最上面・中間・最下面で検出しており、さらに最下面では柱穴状ピットも多数検出しているため、盛土遺構の解釈として、居住域の累積である可能性を指摘できる。調査は基本的にⅢ層上面まで行った。部分的にⅣ層上面まで下げて下部構造を確認した区域がある。結果としてⅢ層以下、遺物および遺構は確認されない。出土遺物から考えられる時期は大洞C₁～A式である。

南盛土遺構は調査区南東に位置し、長軸（東西）26m、短軸（南北・調査区内のみ）6m、最大高約1mである。北盛土遺構同様、炭層と褐色砂質シルト層、暗褐色シルト層が互層をなす。石囲炉2基と、それに伴うと考えられる床面を盛土最上面で確認した。最下面で焼土を確認したが、地床炉ではなく流れ込みと判断される。南盛土遺構もⅢ層上面まで調査を行った。Ⅲ層上面および部分的にトレンチを入れて下部構造を

確認したが、北盛土遺構と異なり、柱穴状ピットは認められなかった。Ⅲ層以下、遺物および遺構は確認されないうえ、南盛土遺構の西端は風倒木根が3箇所認められ、遺物を多く巻き込んでおり、下まで掘り進めた部分がある。出土遺物から考えられる時期は大洞BC～C₁式である。

<配石遺構・列石> 5基確認した。1号配石遺構は調査区中央南寄りで確認された。現況の水田面直下で検出されるため、攪乱を受けていると考えられる。下部に上坑等は認められない。2号配石遺構は調査区中央北寄りⅢ層上面で検出した。長軸約60cm、最大厚約20cmの大形石棒を併い、複雑な組石を呈する。柱状礎と扁平礎で構成される。柱状礎を埋め込むための掘り方と下部に土坑が認められる。周辺から出土した遺物から、時期は盛土遺構・捨て場同様、縄文時代晩期中葉と考えられる。3号配石遺構は2号配石遺構西に隣接する列をなす配石で、中心に柱状礎を垂直に埋め込み、両脇に円形礎が据えられる。下部に上坑を確認した。土坑は人為的に埋め戻されている。4号配石遺構は2号配石遺構東に隣接する。扁平礎は水平に、円形礎は垂直に据えられる。下部には深さ約20cmの土坑を確認した。1～4号配石遺構のうち3基の下部には土坑が確認されたが、いずれも遺物の出土はない。

1号列石は北盛土遺構南端の5・6号石罫炉付近に位置する。自然礎が約3m列をなしており、下部に土坑等が認められず石罫炉に伴う可能性もある。

<遺物捨て場> 2箇所確認した。北捨て場は調査区北中央から北盛土にかけて約700㎡で確認した。遺物が多量捨てられている状況で、完形個体を多く含む。直立した状態で出土したものもあるが、特別な掘り込みが認められないため、埋設土器とは考え難い。遺物が足の踏み場もないほど多く出土しているため、結果的に直立した状態になったと考えられる。捨て場の包含層はⅡ層で、Ⅲ層上面で遺構検出作業を行ったが、風倒木根が数箇所認められるもの、土坑および柱穴状土坑等遺構は確認されない。出土遺物から考えられる時期は大洞C₁～C₂式である。

西捨て場は調査区南西端に約200㎡で確認した。自然の落ち込みがあり、その落ち際に沿って廃棄された状態である。出土遺物から考えられる時期は大洞C₁～C₂式である。

<土坑および柱穴状土坑> 調査区南および北中央西寄りに56基認められる。盛土および捨て場から離れた場所にまとまる。出土遺物がほとんどなく、時期判断し難い。

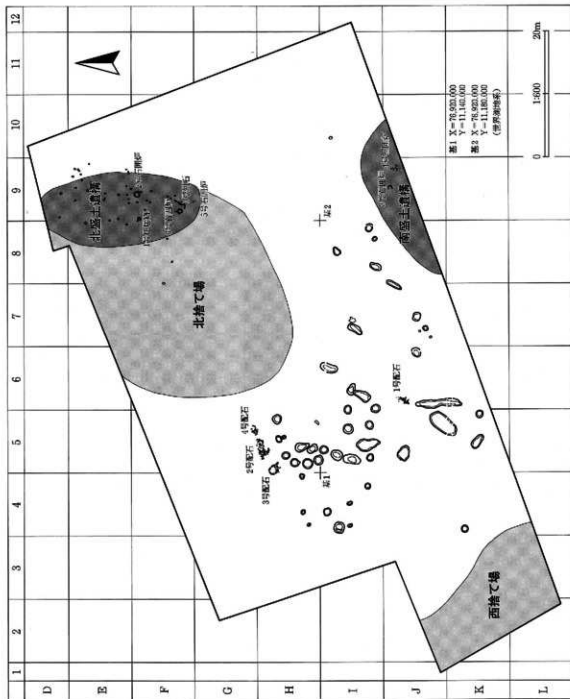
<焼土・炉> 合わせて9基確認された。1基調査区中央の土坑周辺に位置するものを除き、全て北・南盛土遺構中および近辺で確認される。

<出土遺物> 大コンテナ約520箱の土器と中コンテナ約162箱の石器類が出土している。その他、土偶・土版などの土製品、石棒類・岩版などの石製品も多く出土している。木製品として、北盛土遺構最下層から赤色漆喰緊締が1点出土している。出土土器の大部分は縄文時代晩期中葉で、ごく少数ながら後期中葉～後葉・晩期本葉が混入する。

縄文時代以外の遺物としては、須恵器環（9世紀後半～10世紀前半）、寛永通宝1点が出土している。

3. まとめ

大橋遺跡は縄文時代晩期中葉を中心時期とする遺跡である。今回の調査の結果、大規模な遺物捨て場2箇所以外に盛土遺構2箇所を確認した。従来、盛土遺構は遺物廃棄の累積と考えられる研究者が多い。大橋遺跡の盛土遺構は、住居が累積される度に古い住居跡を壊し、その上部に新しい生活面を累積させた結果、塚状の盛り上がり（＝盛土遺構）として現在目にすることができると考えられる。盛土遺構を伴う遺跡は縄文時代晩期の集落形態を考える上で重要な遺跡といえる。



大橋遺跡遺構配置図



北盛土遺構全景



2号配石遺構



1号住居跡



南盛土遺構南北断面

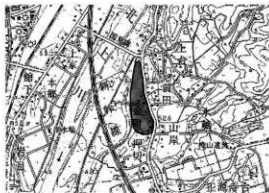


南盛土遺構遺物出土状況

大橋遺跡検出遺構・遺物出土状況

(28) ^{かわつき}金附遺跡

所在地 北上市稲瀬町字金附201-1ほか
委託者 北上地方振興局
北上農村整備事務所
事業名 県営ほ場整備下門岡地区
発掘調査期間 平成14年4月11日～8月22日
10月17日～11月14日
調査対象面積 1,180㎡
発掘調査面積 1,089㎡
遺跡番号・略号 ME76-2058・KT-02
調査担当者 高木 晃・早坂 淳・藤原大輔
協力機関 北上市立埋蔵文化財センター



遺跡位置 1:50,000 北上

1. 遺跡の立地

金附遺跡は北上川と和賀川の合流点から南に2.5kmの付近に位置し、北上川東岸の低位段丘上、標高約53mの水田に立地している。調査範囲における埋没した旧地形では、中央部に南北に延びる自然堤防が形成されており、その両側が東西へ落ち込む緩斜面となっている。遺跡の西限は北上川の氾濫原である。

2. 調査の概要

圃場整備に関わる調査区は北西部の道路用地、南東部のポンプスタンド用地からなる。両地区とも洪水堆積による複数枚の砂層、粘土層が発達し、これに挟まれ遺物包含層が形成されている。残存状態の良い場所は県道用地と同様に上位からⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層砂層、Ⅳa層遺物包含層、Ⅳb層砂層、Ⅳc層遺物包含層、Ⅴ層砂・粘土層、Ⅵ層基盤礫層となる。

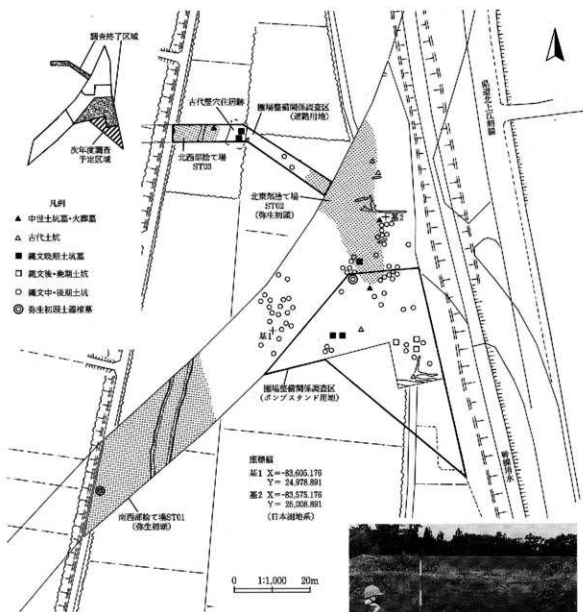
北西部調査区ではⅢ層上面で検出した中世火葬骨埋納遺構1基、平安時代の堅穴住居跡1棟、弥生時代初頭のⅣa層捨て場(S T03)、Ⅴ層上面で検出した縄文晩期土壇墓2基、縄文時代土坑2基がある。住居跡は1辺約5mで東壁にカマドが1基ある。Ⅳa層捨て場は斜面に形成されており、自然堆積砂層の介在により5層程度に細分される。

南東部調査区ではⅢ層上面で検出した中世末期の土壇墓1基、古代の土坑2基、古代以降の溝4条、柱穴群、Ⅳb層上面で検出した縄文晩期～弥生初頭の土壇墓4基、Ⅳc層上面で検出した縄文晩期の土坑2基、風倒木痕2箇所、Ⅴ層上面で検出した縄文中・後期の土坑21基がある。

圃場整備用地からの出土遺物は大コンテナ約5箱である。北西部の弥生時代初頭捨て場出土が大部分で、県道用地で検出した捨て場と時期的に併行する、砂沢式～山王Ⅲ層式が主体となる。古代の住居跡からはごくわずかな土器器破片が出土したのみである。

3. まとめ

今回の調査では、重層した自然堆積層に被覆され各時期の遺構が良好な状態で残存していることが判明した。北西部の弥生初頭遺物包含層は限定された調査区のため全体の広がり是不明だが、県道用地の南西部捨て場(S T01)まで連続する可能性がある。なお南東部の隣接地区については次年度に調査予定である。



南東部V層上面土坑群調査状況

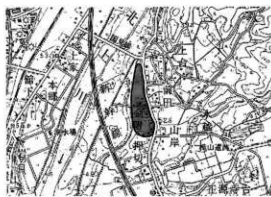


北西部捨て場断面

金附遺跡遺構配置図・検出遺構写真

かわつき
(29) 金附遺跡

所在地 北上市稲瀬町字金附199ほか
委託者 北上地方振興局土木部
事業名 緊急地方道路整備事業
発掘調査期間 平成14年4月11日～8月22日
調査対象面積 2,800㎡
発掘調査面積 800㎡
遺跡番号・略号 ME76-2058・KT-02
調査担当者 高木 晃・早坂 淳・藤原大輔
協力機関 北上市立埋蔵文化財センター



1. 遺跡の立地

金附遺跡は北上川と和賀川の合流点から南に2.5kmの付近に位置し、北上川東岸の低位段丘上、標高約53mの水田地帯に広がる。調査範囲内における埋没した旧地形では、中央部に南北に延びる自然堤防が形成されており、その両側が東西へ落ち込む緩斜面となっている。遺跡の西限は北上川の氾濫原である。

2. 調査の概要

斜面部においては洪水堆積による複数枚の砂層、粘土層が発達し、これに挟まれ遺物包含層が形成されている。残存状態の良い場所は上位からⅠ層表土、Ⅱ層黒褐色土（近世～古代遺物包含層）、Ⅲ層（古代の洪水堆積砂層）、Ⅳa層（弥生初頭遺物包含層）、Ⅳb層（洪水堆積砂層）、Ⅳc層（縄文中期末～後期遺物包含層）、Ⅴ層（洪水堆積砂・粘土層）、Ⅵ層（基盤礫層）となる。

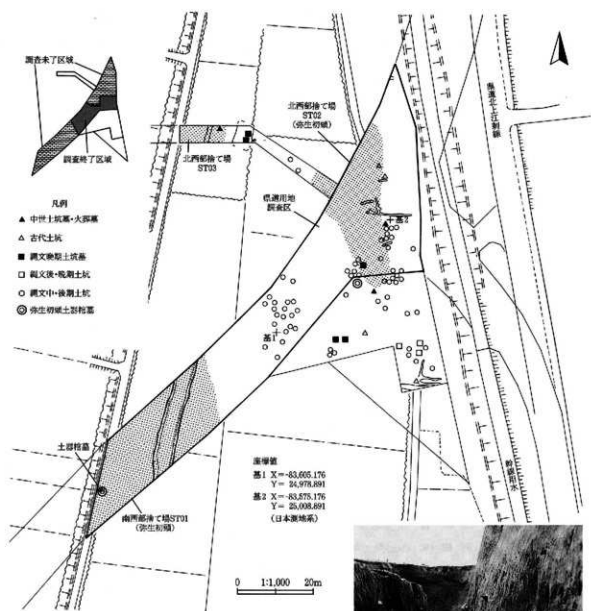
県道用地の調査区においては、北東部にⅢ層上面で検出した中世土壌墓1基、古代以降の溝跡6条、土坑2基、柱穴群、弥生時代初頭のⅣa層捨て場（ST02）、Ⅳa層上面で検出した縄文晩期の土壌墓1基、Ⅴ層上面で検出した縄文中期末～後期中葉の土坑40基がある。

県道用地南西部では近世の溝1条、弥生時代初頭のⅣa層捨て場（ST01）、Ⅳb層上面で検出した土器棺墓1基等がある。南西部のST01は最大厚1.5mに達する良好な状態で残存しており、試掘の結果、調査区内では約500㎡の広がり把握した。遺物密度は高く、当初予定した期間での調査終了は困難と判断されたため、次年度に改めて調査を行う予定となった。その他、北東部のⅤ層上面も検出までで精査を中断しており、県道用地に関わる次年度の調査対象面積は両者を合計して2,000㎡である。

出土遺物は合計大ココンテナ75箱である。大部分は弥生時代初頭捨て場から出土しており、大洞A'式～山王Ⅲ層式の土器に伴い、土偶等各種土製品、石製品がある。剥片石器、礫石器も多く、中でも石斧頭（磨製石斧・環状石斧・独結石）の未製品、及び製作段階に生じた剥片類が相当数に上る。

3. まとめ

今回の調査では、重層した自然堆積層に被覆され各時期の遺構が良好な状態で残存していることが判明した。特に弥生初頭の遺物包含層は大規模なもので、石斧生産を示す資料、包含層周辺の土器棺墓が目目される。次年度の調査では包含層の全容解明、また同時期の住居跡や土壌墓等の検出も期待される。



中央部V層上面土坑群検出状況



南西部捨て場トレンチ

金附遺跡遺構配置図・検出遺構写真

なかはんこう
(30) 中半入遺跡第2次調査

所在地 水沢市佐倉河字半入66ほか
委託者 水沢地方振興局
水沢農村整備事務所
事業名 県営満倉地区は場整備事業
発掘調査期間 平成14年4月12日～12月3日
調査対象面積 7,500㎡
発掘調査面積 5,505㎡
遺跡番号・略号 NE15-0282・NHN-02
調査担当者 西澤正晴・玉山健一
協力機関 水沢市教育委員会



1. 遺跡の立地

中半入遺跡は、水沢市の北西部、胆沢川南岸にあたり、水沢段丘低位面と胆沢川に挟まれた水沢段丘高位置の西端に立地する。JR東北本線水沢駅からは北西へ約6kmの距離に位置している。遺跡周辺は胆沢扇状地に広がる水田地帯であり、調査前の現況も水田であった。遺跡北端は段丘崖となり胆沢川に続いている。遺跡の標高は、現地表面で73m前後～74mであり、全体的にみると南側・西側が高く、北側・東側が低い状況である。水田面として造成されているため緩ね平坦に見えるが微地形では起伏にやや富んでいると言える。

2. 調査の概要

中半入遺跡の調査は今回で2回目となる。前回の調査(平成10・11年度)では、古墳時代中期を中心とする集落跡と十和田a降下火山灰で覆われた水田跡を中心とする生産遺構が発見されている。今回の調査は前回の調査区の東側に隣接していることから、これら上記の遺構や前回発見されなかった平安時代の集落の検出が期待された。調査の結果、主な遺構として、平安時代を中心とする竪穴住居跡21棟、土坑44基、溝跡19条、水田跡1面、不明遺構6基などが検出された。また、平安時代を中心とする多量の遺物の出土をみた。<竪穴住居跡> 竪穴住居跡はA区に1棟、B区に13棟、C区に4棟、D区に2棟、E区に1棟の計21棟が検出された。それぞれの所属時期は古墳時代(中期)に属するもの1棟、平安時代に属するもの20棟である。

古墳時代の竪穴住居跡はA区より検出し、規模は4m四方であり、カマドを東壁にもつ。今次調査のなかでは比較的遺存状態がよく、遺物も多数出土している。須恵器や土師器とともに黒曜石製石器も出土している。平安時代に属する住居は20棟あり、今回調査のほとんどを占める。その分布はB区中央部とC区先端とに大きく2分でき、そのうちB区にほとんどが集中している。いずれも上層である現代の耕作層により削平を受け、遺存状態は著しく悪かった。したがって、出土遺物のほとんどはこれら現代耕作層に含まれ、かつ小さな破片に砕かれており、資料価値は低い。また、この竪穴住居跡とした20棟のうち3棟は別な性格をもつものと考えている。C区の先端で検出した3棟はカマドをもたず、周辺の様相は居住域とは考えにくいことから工房的な性格を有する可能性がある。これらの詳細は現在分析中である。

<土坑> 土坑は44基調査区内各所より散在して検出している。多くは時期決定に証拠を欠くが構築された土層面や周辺の遺構との関係より、古墳時代と平安時代に属するものの2者があると考えられる。内訳は古

墳時代に属するもの25基、平安時代に属するもの19基である。機能や用途などは不明である。

<溝跡> 溝跡は調査区全体で20条検出されている。性格として、水田に伴う水路が中心と考えられるが、多量の土器が出土した溝跡（SD16）や、区画に伴うもの（SD11・12）と考えられるものもあり、多様な性格が想起される。今回の調査でもっとも特徴的な遺構である。

<水田跡> 水田跡はA区西側で検出している。十和田a降下火山灰に覆われていた水田跡で、畦畔、水路、水田面より構成される。残存範囲は約30×12mであり、そのうち約7m分は一部上層による削平が及んでいた。水田区画は5面確認できるが、すべてが調査区外へ広がっていくため、調査区内においてはいずれも完結した区画としては確認できない。本水田の特徴として、①畦畔の両脇に溝状の窪みがあること。②田面の凹凸が激しいこと。③足跡状の窪みが多数認められ、かつ散在していること。④畦畔は方位に沿っているとは考えにくいこと。⑤小畦畔が認められないこと、などが挙げられる。時期は十和田a降下火山灰の降下時期より現在のところ10世紀前半の時期が考えられる。

<不明遺構> 不明遺構としたものには、A区、C区から検出されている。そのなかで、出土地点ごとにその性格は2分できる。A区に位置するものは2基が確認でき、いずれも直径が5m前後の円形を基調とする大型の土坑状遺構である。木製品や種実などの有機物が出土しており、単なる土坑とは判断し難いため不明遺構としたものである。

C区に位置するものは6基確認できる。これらは円形を基調とする焼土と楕円形状を呈する土坑とが組み合わされた遺構であり、周辺からは鉄滓も出土している。このことから鉄関連の施設と考えられるが、これらの遺構よりは直接それを証明する遺物などは出土していない。したがって、鍛冶関連の炉跡の可能性は高いが、明確に判断できないため、便宜上不明遺構としている。

<縄文時代晩期包含層> B区東端部付近において約20×7mの範囲で確認した。調査区外へ延びているため全体の規模は不明である。層厚は最大で10cm程度であり、炭化物、種実、石器とともに多量の土器が出土している。

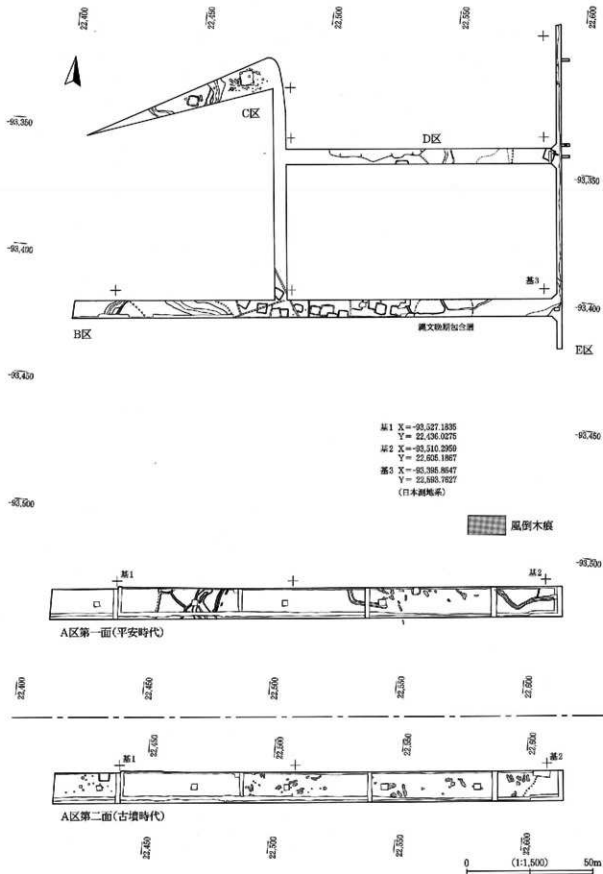
<出土遺物> 出土遺物は平安時代の土器を中心に大コシテナ換算で約55箱出土している。内訳は、平安時代土器40箱、古墳時代土器3箱、縄文時代土器6箱、石器3箱、木製品5箱である。

中心となる平安時代の土器は上述のように多くは現代耕作層に含まれており、耕作により細かく砕かれたものが多い。溝跡（SD16）からは完形や完形に近い杯形土器が150点近く出土し、10点以上の墨書土器も含まれていた。古墳時代の遺物は、土師器や須恵器を中心とする土器が大半を占め、遺存状態も比較的良好である。黒曜石製石器類も遺構内外を問わず出土している。漆器碗を初めとする木製品や種実などの有機物も比較的多く出土している。縄文七器は包含層を中心に調査区内各地より出土している。

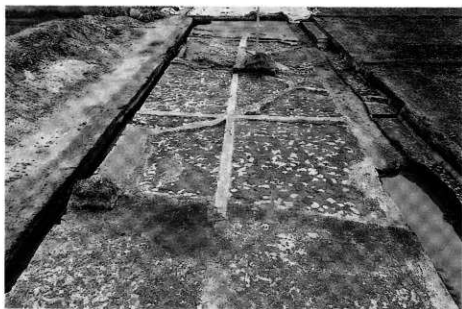
3. まとめ

今回の調査は、ほ場整備に伴い掘削深度が深いものに限って調査を行っている。そのため、広大な範囲内を細長く調査したにすぎない。したがって、遺跡の全容については不明な部分が多いが、面積に対して広範囲に調査でき範囲的な隔たりが少ないため判明する事実も多かった。

とくに、古墳時代集落の範囲の一端が確認されたこと、火山灰に覆われた水田跡と集落の関係が把握できたことは重要な成果である。また、集落の端に工房的な性格をもつ空間が存在したことは、集落内における空間構成について有力な情報を提供する。さらなる成果は今後整理作業を通じ明らかにしていきたい。



中半入遺跡第2次調査遺構配置図



火山灰に覆われた水田跡



住居群近景(西から)

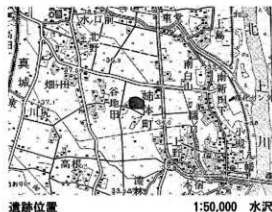


多量の土器が出土した溝跡

中半入遺跡第2次調査遺構写真

(31) しまだ 島田Ⅱ遺跡

所在地 水沢市真城字島田54
委託者 水沢地方振興局水沢農村整備事務所
事業名 跡地地区ほ場整備事業
発掘調査期間 平成14年7月8日～8月28日
調査対象面積 596㎡
発掘調査面積 596㎡
遺跡番号・略号 NE37-0079・SDⅡ-02
調査担当者 村木 敬・青山紀和
協力機関 水沢市教育委員会



1. 遺跡の立地

島田Ⅱ遺跡は、JR東北本線陸中折居駅から北東に約2kmに位置し、北上右河岸の河岸段丘上に立地している。標高は34m前後で、現況は畑地である。

2. 調査の概要

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡6棟、住居状遺構1基、溝4条、土坑41基、柱穴状ピット112基検出された。

<竪穴住居跡> 調査区中央で検出された東西に延びる溝より北側で竪穴住居跡6棟が検出された。平面形が隅丸方形ないし方形を呈し、規模は3～4mを測る住居が5棟検出された。これら全て上部は削平され床面のみの確認であった。残りの1棟は、平面形が隅丸長方形を呈し、規模は3×2mである。

<住居状遺構> 平面形が隅丸長方形を呈する竪穴住居跡に類似したものが1基検出された。本遺構からは竪穴住居跡の出土遺物と同時期のものが出土している。しかし、カマドや柱穴が検出できなかったことから今回はこのような扱いをしている。

<溝> 平安時代のものが3条、時期不明のものが1条検出された。4条全て調査区外へ延びていくため、全容は不明である。調査区中央に位置する溝は、東側に長軸約4m、深さ約60cmの溜井が存在している。その溜井を境に溝の標高差が見られた。

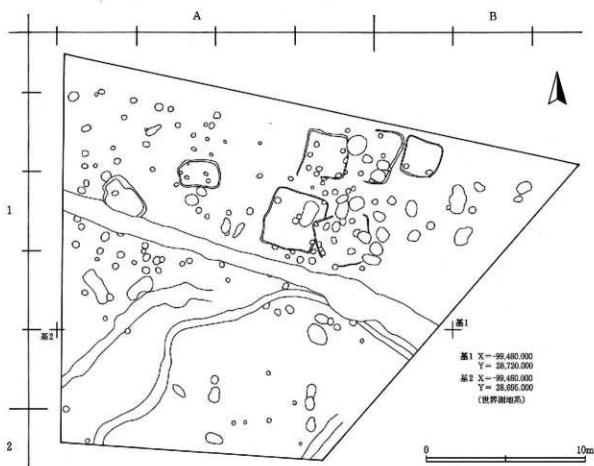
<土穴> 検出された41基のうち5基が平安時代に属するもので、他の36基は時期不明である。平安時代に属するものの中に土坑墓と思われるものが確認できた。

<柱穴状ピット> 112基検出されたが大半の柱穴は、上記の竪穴住居跡以前に形成されていた掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。その掘立柱建物跡のプランは現在検討中である。調査区南東部にある数基は時期不明である。

<出土遺物> 土師器や須恵器などの坏や甕が大コンテナ5箱出土している。

3. まとめ

今回の調査で、遺構の大半は削平されその全容を明らかにするまでには至らなかったが、本遺跡は平安時代集落の一部であることを確認した。今後の整理により、住居跡と溜井をもつ溝との関係から集落構造を明らかにしていくと共に、周辺遺跡との関係から本遺跡の位置づけをしていきたい。



島田II遺跡遺構配置図



島田II遺跡完掘状況

(32) ひろおかまえ
広岡前遺跡

所在地 江刺市稲瀬字広岡前
246-143ほか
委託者 水沢地方振興局土木部
事業名 緊急地方道路整備事業
発掘調査期間 平成14年9月17日～11月28日
調査対象面積 3,510㎡
発掘調査面積 3,510㎡
遺跡番号・略号 ME96-0399・HOM-02
調査担当者 福島正和・江藤 敦
協力機関 江刺市教育委員会



1. 遺跡の立地

広岡前遺跡は、江刺市役所の北東3.1km、北上川東岸の沖積平野上に位置する。調査区は標高41m前後の平坦地で、調査以前は大半が水田であった。周辺には宝祿遺跡、十三遺跡、大文字遺跡などが存在し、さらに本遺跡の約1.8km北西には、古代における大規模な土器生産遺跡である瀬谷子窯跡群が存在する。

2. 調査の概要

調査区は道路を挟んで大きく3地区に分かれ、それぞれ西側、東側、北側調査区と命名した。遺構検出面は、現代の造成盛土と旧水田耕作土の直下に広がり、削平や攪乱の顕著な北側調査区を除き竪穴住居跡、溝跡、井戸跡、炉跡、土坑などを検出した。遺物は主に遺構から出土し、土器、鉄滓、籾の羽口などであった。

<竪穴住居跡> 西側調査区で2棟、東側調査区で1棟、計3棟を検出した。すべて平面方形で、概ね東側辺にカマドと煙道を有する。規模や形態、出土した遺物から判断して3棟は平安時代の住居跡と考えられる。

<溝跡> 西側及び東側調査区で15条検出した。方向はそれぞれ異なるが、ほとんどが直線的な溝跡である。

<井戸跡> 西側調査区で1基検出した。平面は径約2mの不整な円形で、中心部の深さは3.5mを測る。

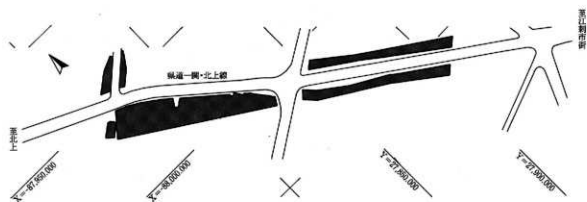
<炉跡> 西側調査区で、鉄製産に関連すると思われる平面長楕円形の炉跡を2基検出した。

<土坑> 土器や須恵器などの遺物を比較的多く含む3基を含め、西側調査区を中心に計7基検出した。

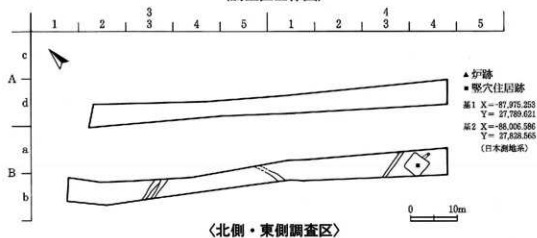
<出土遺物> 外面に「大」と墨書された須恵器環1点と文字不明だが同様の1点を含め、土器・須恵器が大コンテナ4箱、籾の羽口片、鉄滓、焼土塊、砥石、鉄製品などが合計大コンテナ1箱出土した。

3. まとめ

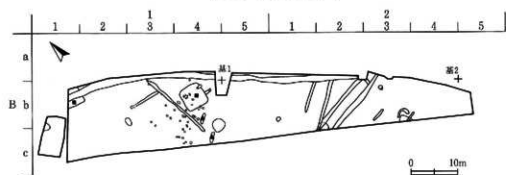
今回の調査では、平安時代の土器を伴う竪穴住居跡や土坑、井戸跡、溝跡など集落を構成する遺構を良好に検出した。また、西側調査区を中心に籾の羽口片、鉄滓、焼土塊など鍛冶を想起させる遺物が多く出土し、同じく西側調査区では時期、性格ともに詳細不明であるが炉跡と思われる遺構2基を検出した。これら炉跡や出土した鍛冶関連遺物から、遺跡内やその周辺において鍛冶など鉄に関連する作業が行われていたことが想定できる。今後検出した竪穴住居跡等の遺構と鍛冶との関係についても検証を重ね、明らかにしたい。



〈調査区全体図〉



〈北側・東側調査区〉



〈西側調査区〉



竪穴住居跡(西から)

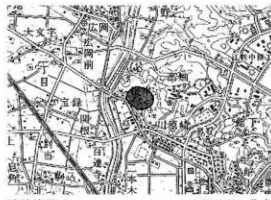


竪穴住居跡遺物出土状況(西から)

広岡前遺跡遺構配置図・検出遺構

(33) ほうしょうじあと
宝性寺跡

所在地 江刺市岩谷堂字根岸240番2ほか
委託者 水沢地方振興局
水沢農村整備事務所
事業名 ふるさと農道根岸地区
発掘調査期間 平成14年4月9日～10月11日
調査対象面積 2,220㎡
発掘調査面積 2,232㎡
遺跡番号・略号 ME97-1048・HSJ-02
調査担当者 丸山浩治・福島正和・江藤 敦
協力機関 江刺市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 北上

1. 遺跡の立地

宝性寺跡は江刺市街地、市役所から北西に1.9kmの距離に位置し、北上川東岸を南北に延びる丘陵地の西端部分となる段丘の縁に立地している。遺跡の西側を広瀬川が南西方向に流れ、北上川へと注いでいる。遺跡の標高は54～63m、調査前の状況は農道及び畑地と水田である。

2. 調査の概要

昨年度からの継続調査である。今年度は調査区面積3,000㎡中の昨年度終了分780㎡を除く2,220㎡、および途中追加分12㎡の合計2,232㎡を調査した。大部分が現道布設、宅地・水田造成等によって削平・攪乱を受けており、残存状態はかなり悪い。今年度精査した遺構は竪穴住居跡8棟（昨年度から継続3棟）、竪穴住居状遺構9棟（同継続1棟）、掘立柱建物跡2棟、土坑29基、焼土遺構21基、柱穴状土坑732基、遺物包含層2箇所、石器埋納遺構1基、周溝跡類7基、溝跡9条である。ほとんどが縄文時代前期後葉から中期と思われるが、古代以降のもの（竪穴住居状遺構1棟、周溝跡類2基、溝跡9条）も混在する。

<竪穴住居跡> 北西部で1棟、南西部で4棟、南東部で3棟検出された。うち南東部の3棟は昨年度精査分の続きである。平面形は円形・楕円形で、径は4m前後である。出土遺物から縄文前期末から中期に属するものと考えられる。

<竪穴住居状遺構> 縄文時代のもは住居跡検出地点とほぼ同付近に存在し、北西部で2棟、南西部で5棟、南央部で1棟検出された。うち北西部の1棟は昨年度精査分の続きである。平面形・規模・時期とも住居跡と類似する。古代以降のものは南東部で1棟検出された。削平がひどく平面形・規模とも不明である。出土遺物から平安時代に属するものと考えられる。

<掘立柱建物跡> 北西部で2棟検出された。両者とも柱穴配置の中央部から焼土が検出されており、それぞれに伴うものと思われる。1棟はC区遺構・遺物密集部分から検出されたもので、大形の柱穴（底部径約30～50cm）15基以上が径約7mの円形状に回る大形建物跡である。中央部の焼土も平面形1×1.6mと大形である。なお2棟とも削平が激しいため、竪穴型が削平された結果の可能性もある。

<土坑> ほぼ全域で検出されたが、主に北西部・南西部の遺構集中部及び南東部遺物包含層付近に多い。平面形は約1～1.5mの円形である。南東部遺物包含層付近のものは出土遺物（玉類・硃状耳飾、石鏃等）

から墓坑の可能性がある。時期は出土土器から縄文前期後葉から中期に属するものと考えられる。

<焼土遺構> 北西部で9基、南西部で12基検出された。全般的に残りが悪く薄い。このうち南西部中の1基は、溝跡に切られているものの長軸約1.5m・最大厚20cm弱と大きく、焼成の違いによる層理が最低でも3層観察され、あいだに非焼成の間層を挟む部分も存在する。本焼土の東端からは磨製石斧が2点重なって出上しており、異相を呈する。これ以外は住居跡の炉であったものと考えられる。

<柱穴土坑> ほぼ全域で検出されたが、特に北東部、北西部、南西部に集中している。柱穴配列を明確に把握できていないものの、建物を構成する柱穴と考えられる。規模はさまざまであるが、開口部径50cm以上・深さ検出面下1m以上になる大形ものが南西部に多数存在し、側面に支石を施されたものもある。これらは掘立柱建物跡あるいはロングハウスを構成するものである可能性が高い。南西部の柱穴群中には、斜面傾斜に直行する東西方向に長軸を持つ長方形の配置が観察されるが未確定である。時期は大半が縄文時代と推定されるが、古代のものが存在する可能性も否定できない。

<遺物包含層> 南東部約410㎡(昨年度との合計570㎡)と西部約80㎡で検出された。前者は南西向き斜面地で、北側段丘上平坦面からの廃棄によるものと思われる。厚さは最厚1m前後である。後者は静時の水成堆積層が確認される地点であり、湿地的部分への廃棄によって形成されたものと考えられる。厚さは30cm前後である。両者ともに時期は前期後葉から中期前葉の中にはばおさまる。

<石器埋納遺構> 南西部の柱穴群中で検出された。大きさは30cm前後で柱穴と変わらない。埋土中からへら状石器や磨製石斧、剥片等がまとまって出土した。

<周溝跡類> 北西部で1基、南西部で6基検出された。南西部中の2基は方形周溝で、ロクロ使用の土師器が出土しており平安時代以降と推定される。他は明確ではないが、縄文時代の堅穴住居跡に付随する壁溝と考えられる。

<溝跡> 南東部を除く全域で検出された。時期を明確に特定できないが、古代以降と考えられる。

<出土遺物> 土器は大ココンテナで162箱出土した。主に遺物包含層のもので、大部分は縄文時代前期後葉から中期前葉(大木5~7a式)に比定される。調査区全体では中期後半、晩期の土器、平安時代の土師器・須恵器もわずかながら存在する。石器は剥片を除き約2,800点出土した。総遺物中に占める礫石器の組成率が比較的高く、中でも凹石、磨り石が飛び抜けて多い。このほか、土偶・耳栓・土鏝等の土製品、有孔石製品・球状耳飾・丸玉・石剣等の石製品と、古代の布目瓦片などが出土している。

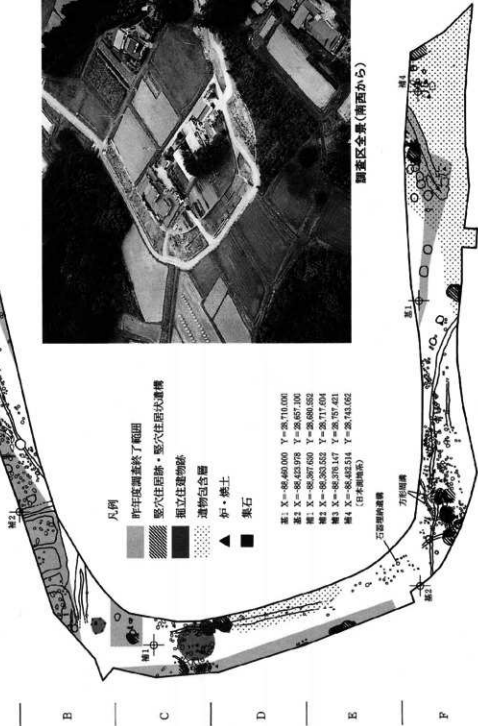
3. まとめ

今回の調査で、縄文時代前期後葉から中期の集落跡、および平安時代以降の堅穴住居状遺構、方形周溝、溝跡の存在が確認された。縄文期の本集落は、住居・土坑・墓坑・捨て場で構成され、遺物の総量は昨年度からの総計で大ココンテナ300箱以上、中でも土器は約260箱の出土を見た。このような規模からは、本集落が周辺地域内で拠点的な立場を有していたことが推測される。遺物の大半が出した南東部遺物包含層は、その立地と地形および検出遺構の时期的相違などから南西部居住域より形成されたものとは考えにくく、包含層北側の斜面上部平坦面上から形成されたものと考えるのが妥当であり、この平坦面には包含層と同時期の居住域の存在が推定される。

なお、遺跡自体は調査区外側の全方位にも広がっているものと思われ、北側には古代寺院跡の存在も予想される。



I | II | III | IV | V | VI | VII



岡井・井野遺構配置図



整穴住居跡



整穴住居状遺構



掘立柱建物跡



土坑(精査途中)



柱穴状小土坑群(南西部)



柱穴状小土坑群(北東部)



遺物出土状況(南東部遺物包含層)



宝性寺跡検出遺構・遺物出土状況

おおなかた
(34) 大中田遺跡

所在地 江刺市伊手字小中田4番地の1ほか
委託者 水沢地方振興局土木部
事業名 伊手川河川改修
調査対象面積 1,100㎡
発掘調査面積 1,100㎡
調査期間 平成14年4月9日～7月17日
遺跡番号・略号 OF00-2003・ONT-02
調査担当者 中村絵美・長洞ひかり
 太田代一彦
協力機関 江刺市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 人首・陸中大原

1. 遺跡の立地

大中田遺跡は、JR東北新幹線水沢江刺駅から東へ約9kmに位置する。付近を流れる伊手川によって形成された河岸段丘上の東側を下る緩やかな斜面に立地している。現況は段状に造成された水田となっており、調査区は多くの部分で削平をうけていた。

2. 調査の概要

今回の調査では、竪穴住居跡8棟、住居状遺構1棟、土坑54基、焼土遺構22基、柱穴状土坑約400基が検出された。縄文時代前期末葉～中期初頭の遺構が大半を占め、一部中期末葉の住居跡・土坑も含まれている。<竪穴住居跡> 平面形状を確認できたものは8棟である。うち1棟は縄文時代中期末葉の住居跡で、直径約5mの円形を呈し複式炉を持つ。これを除く7棟は、縄文時代前期末葉～中期初頭に該当する。概ね方形で一辺3～5m、すべて地床を伴い、壁際に周溝を持つものが多い。このうち北西部の住居跡には南東側に張り出し部が認められ、周溝もこれに沿うように連続している。なお以上の他にも、住居の跡と思われる焼土遺構が、斜面の等高線に沿うように並んで検出されている。周囲に柱穴状土坑が分布し、周溝と思われる溝が部分的に確認できること、焼土遺構と同じ高さで遺物が面的に広がることなどから、上掲のもの以外にも住居跡は複数存在していたものと思われる。これらの一部が大形住居跡になる可能性もあり今後慎重に検討していきたい。

<土坑> 平面形状は円形または楕円形を呈し、開口部径は1～3mほどである。一部には底面中央に小穴や、放射状の溝を持つものが含まれる。出土遺物から判断される時期は住居跡同様前期末葉～中期初頭であるが、重複関係では住居跡を切るものが多い。堆積状況としては、埋土下半が、壁の崩落もしくは人為的堆積による地山褐色土で埋没し、その上位には土器などの遺物及び焼土・炭化物等を多く含む土層が堆積していくという例が多い。調査区南西部の土坑では、滑石製垂飾具の未製品がまとまって出土した。珠状耳飾の未製品が最も多く、穿孔途中に破損したもの、未穿孔のもの、加工時に生じた小破片、原石など製作工程各段階のものが含まれる。底面からやや浮いた位置より出土することから、これらは堆積過程の途上で流入あるいは廃棄されたものと考えられる。墓坑の可能性を持つ別の土坑では、研磨等、仕上げ加工を終えた珠状耳飾の製品1点が底面直上から出土しており、未製品と異なった出土状況を呈している。製作地点の特定は

できなかつたが、本遺跡における耳飾等滑石製垂飾具の製作を示唆する資料として注目される。

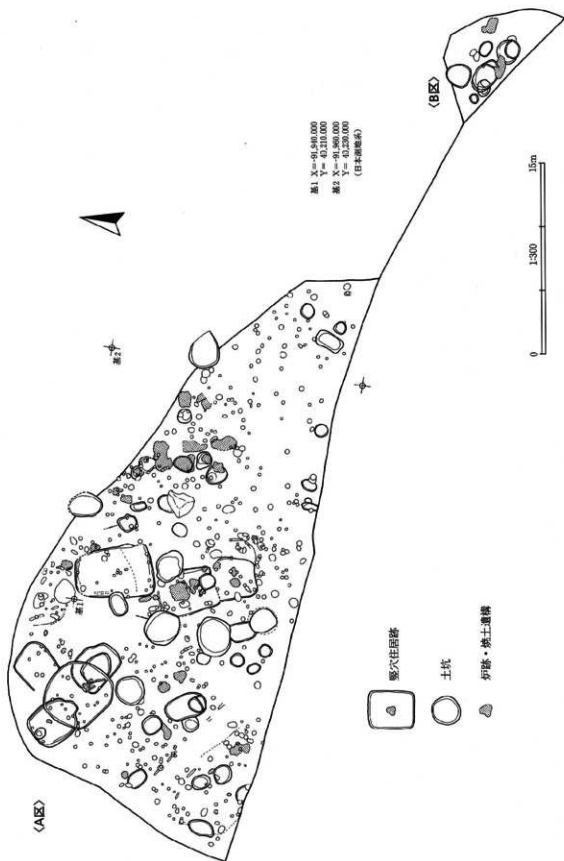
<出土遺物> 遺物は大コンテナで45箱出土した。このうち土器は35箱で縄文時代前期末葉～中期初頭の土器が大半を占める。その他石器、滑石製垂飾具・石棒などの石製品、土偶、土製耳飾りなどが約900点出土している。中でも滑石製垂飾具は、未製品を含め加工痕のあるものが調査区全体で60点ほど見つかった。このうち前述の土坑から出土したものは約50点である。しかし、滑石製垂飾具の加工に用いたと考えられる石錐・砥石等は出土していない。

3. まとめ

今回の調査により、大中田遺跡は縄文時代前期末葉～中期初頭の集落跡であることが判明した。住居跡・土坑等はA区の南西部から北部にかけて分布する。一方削平されている可能性はあるが、A区南東側は、住居跡・土坑等のあまりみられない遺構が希薄な区域となる。本調査に先行して行われた試掘調査では、調査区外南側の斜面上部においても住居跡・土坑等が確認されており、集落の範囲は調査区周辺を含む緩斜面一帯に広がるものと推定される。また、滑石製垂飾具未製品の存在は、本遺跡内での製作を示唆しており、製作工程の復元や加工具の特定などが今後の課題となろう。



調査区全景



大中田遺跡遺構配置図



竪穴住居跡(縄文前期末葉~中期初頭)



竪穴住居跡(中期末葉)



遺物出土状況



複式炉



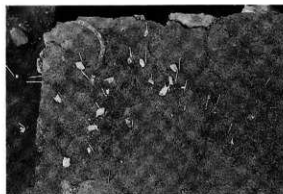
土坑



土坑遺物出土状況



滑石製垂飾具出土状況



滑石製垂飾具出土状況(近景)

大中田遺跡検出遺構・出土遺物

(35) 明後沢遺跡群第16次調査

所在地 胆沢郡前沢町古城高台寺33-2 ほか
委託者 水沢地方振興局
水沢農村整備事務所
事業名 ほ場整備地区上野地区
発掘調査期間 平成14年4月12日～10月31日
発掘対象面積 7,100㎡
発掘調査面積 7,100㎡
跡番道号・略号 NE36-2175・MGS02
調査担当者 本多準一郎・小松則也
協力機関 前沢町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 前沢

1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の南西約1.6kmに位置し、胆沢扇状地の東端部にあって、北側を松ノ木沢川、南側を明後沢川に開析された標高70～72mの舌状台地に立地する。今回の調査範囲はそのほぼ南東に位置する。

2. 調査の概要

明後沢遺跡群は、前沢町古城に所在する明後沢、八郎館、宗角館、熊野、幅、鳥子沢、前掘遺跡の7つからなる大規模な遺跡である。今回の明後沢遺跡群の発掘調査は、ほ場整備事業に伴い遺跡の一部が消滅するため、遺跡の記録保存を目的として行われた。明後沢遺跡は、古瓦が出土する遺跡として古くから調査研究が進められ、古代の城柵、寺院や窯跡など様々な仮説が立てられてきた。昭和34年から平成13年までに14次の調査が行われたが、遺跡の性格は現在も分かっていない。

<竪穴住居跡> 6棟を検出した。遺物から平安時代のものである。規模は3～4mのものが殆どである。大部分が改田時の削平を受けたり、耕作の際に壊されたりしている。このうち3棟からカマドが確認され、袖の部分には芯材として土器や礫を用いていた。

<土坑> 54基を検出した。殆どが遺物の出土がなく時期は不明である。しかし、1基から中世のものである中国産の青磁片が出土した。この土坑は長径約4mを測る。土坑の性格については不明である。

<墓坑> 2基を検出した。埋土中から渥美産と思われる陶器片と骨片が出土した。これらの陶器は、一般庶民は持ち得なかったものと考えられており、それなりに身分の高い人の墓であったと推測される。

<溝跡> 81条を検出した。このうち平安時代のものであると思われるのが1条、平安時代より新しいと思われるものが6～7条、その他は遺物の出土がないため時期は不明である。昨年度も相当数の溝跡が検出されている。重複する溝も多く、時期差があると考えられる。

<陥し穴状遺構> 4基を検出した。全て縦長のもので、形状から縄文時代のものである。遺物の出土がないため時期は不明である。

<焼土遺構> 7基を検出した。炭などが認められ住居だった可能性がある。

<柱穴状土坑> 825基を検出した。掘立柱建物が存在したと考えられるが、調査幅が狭く確認に至らなかった。

<粘土探掘穴跡> 埋土が広い範囲に及び人為的な様子を示していたので、整地層と考えると精査を進めたが、掘り下げると底部が多くの土坑の重複となっていることが分かった。余ての土坑は白色の粘土層で終わっており、粘土を採掘するための土坑であると推測した。埋土の様子から、粘土を採掘し終えた土坑に新たに採掘した土を埋め戻す行為を繰り返し行ったと考えられる。

<遺物> 土師器・須恵器大コンテナ4箱、瀬美産、常滑産の陶器片小コンテナ1箱、手づくねかわらけ数点、中国産磁器片数点、土鈴2点、縄文土器片数点、石器2点、瓦片数点、鉄製品数点が出土している。土師器等は堅穴住居跡から出土したものが殆どで、その他大部分は遺構外からの出土である。遺構外からの出土遺物は、多くが細かく壊れていることから後世の水田や畑の耕作により遺跡の大部分が削平や擾乱を受けていたと考えられる。

3. まとめ

本遺跡の発掘調査は、ほ場整備事業に伴う道路・排水路分の発掘調査であるため調査範囲が狭く、遺跡の全容を明らかにするまでには至らなかったが、以下の点が成果として上げられる。

① 縄文時代の陥し穴が検出されていることから、その時代は狩り場だったと思われること。

当時の堅穴住居跡は検出されなかったが、近くには縄文時代の遺跡あることから、一部分はかつて狩り場であったと考えられる。

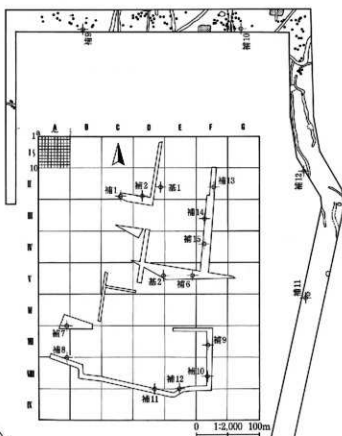
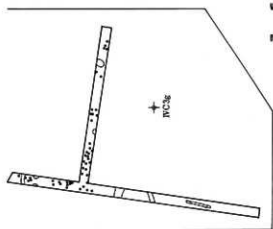
② 古代の堅穴住居跡が検出されていることから、その時代は集落であったと思われること。

検出されている堅穴住居跡の数は少ないが、昨年度の調査でも5棟検出されていることから、この場所で生活を営んでいたと考えられる。

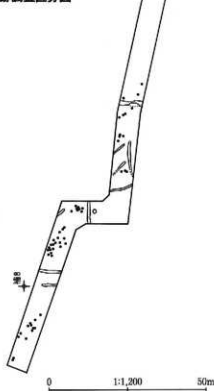
③ 12世紀の遺物が出土していることから、奥州藤原氏と何らかの関係があったこと。

出土した12世紀の遺物の殆どが瀬美・常滑産の陶器片と中国産の磁器片である。これらの遺物は希少であったため、当時の一般庶民は持ち得ることができなかったと考えられている。また、平泉遺跡群から出土する手づくねかわらけも出土している。さらに、本遺跡の東端部には宗角館遺跡があり、江戸時代に書かれた安永風土記に「城主、時代共に分らない。」と記されている。これらのことから、古い時代にこの地を支配できる様な身分の高い人が存在し、奥州藤原氏と何らかの関係があったのではないかと考えられる。

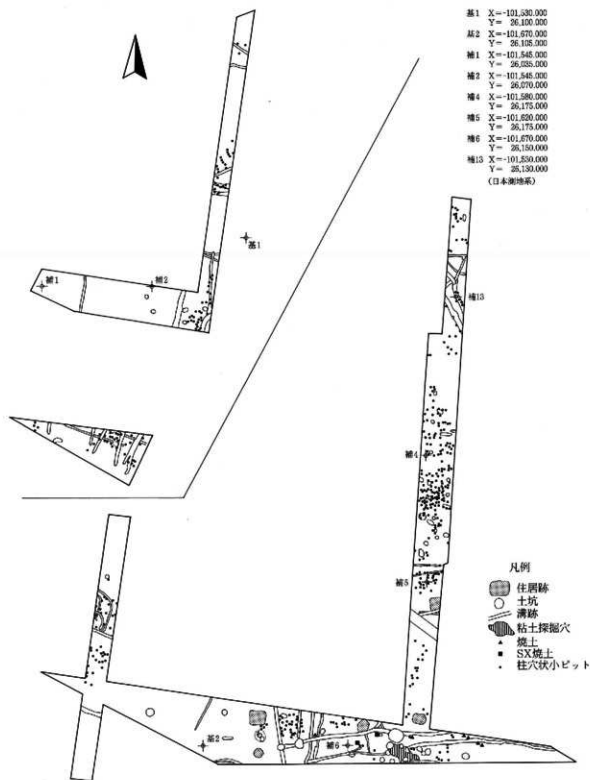
- 棟7 X=-101,750.000
 Y= 25,950.000
 棟8 X=-101,800.000
 Y= 25,950.000
 棟9 X=-101,780.000
 Y= 26,175.000
 棟10 X=-101,830.000
 Y= 26,175.000
 棟11 X=-101,850.000
 Y= 26,090.000
 棟12 X=-101,850.000
 Y= 26,130.000
 (日本測地系)



明後沢遺跡調査区分図



明後沢遺跡群南側遺構配置図



明後沢遺跡群北側遺構配置図



調査区北側空中写真



調査区南側(南北)



調査区南側(東西)

明後沢遺跡群調査区全景



粘土採掘穴跡



竪穴住居跡



溝跡



新丸瓦出土状況



遺物出土状況

明後沢遺跡群検出遺構・遺物

(36) 寺ノ上遺跡

所在地 前沢町古城寺ノ上182
委託者 水沢地方振興局
水沢農村整備事務所
事業名 県営ほ場整備事業寺領小林地区
埋蔵文化財発掘調査委託業務
発掘調査期間 平成14年10月9日～11月27日
調査対象面積 1,533㎡
発掘調査面積 1,533㎡
遺跡番号・略号 NE46-0242・TU-02
調査担当 野中真盛・佐々木信一
協力機関 前沢町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

寺ノ上遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の南西約1.5km付近に位置し、北上川右岸にある胆沢扇状地の中位段丘に立地している。標高は77～79mで、遺跡の現況は水田及び畑地である。

2. 調査概要

調査で検出された遺構は、中世の竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、陥し穴状遺構1基、土坑11基、溝状遺構16条、堀跡2条、柱穴256基等である。

<竪穴住居跡> 南側調査区の北東隅から1棟検出された。本遺構の南西部は2条の溝が重複しており一部を消失している。平面形は隅丸方形で、規模は3.2×3.4m、壁高は10～33cmである。床面中央部から焼土が検出され、その周辺から炭化材が多量に検出された。四隅の主柱穴4本と壁際から12本の柱穴が検出された。時期は中世と考えられる。

<掘立柱建物跡> 南側調査区南西部から1棟検出された。西側の一部が溝と重複しており柱穴の一部を消失している。規模は桁行4間(10m)×梁行1間(5m)で両側に庇を備えている。棟方向は南-北である。主柱穴の規模は径が42×44cm～49×56cm、深さは52～75cmである。時期は不明である。

<陥し穴状遺構> 南側調査区北西部から1基検出された。形状は細長い溝状を呈しており、長軸方向は東-西である。中央が溝と重複している。縦断面形はフラスコ状になっている。規模は開口部径3.7m、幅72cm、深さ1.1m、底部径4.6m、幅44cmである。

<土坑> 南側調査区から9基、北側調査区から2基の計11基が検出された。平面形は円形が10基、方形若しくは長方形と推測できるもの(一部調査区外)が1基である。規模は開口部径79×88cm～2.17×2.36m、底部径46×53cm～1.0×1.87m、深さは35cm～1.15mである。時期は中世が6基、他は不明である。

<溝状遺構> 南側調査区から14条、北側調査区から2条の計16条が検出された。うち8条が重複している。向きは南-北7条、東-西5条、南東-北西3条、東-西から南-北に大きく曲がる1条である。規模は全長3.8m～47.5m、幅16cm～1.1m、深さ1cm～50cmである。

<堀跡> 南側調査区から北側調査区にかけて1条、北側調査区から1条の計2条検出された。南側調査区

から北側調査区にかけて検出された1条は、南側の規模、長さ22.9m、幅4.64～7.14m、深さ46.4～104cm、北側の規模、長さ3.88m、幅5.56～5.68m、深さ34.7～59.5cmである。途中は調査区外のため未調査であるが南北一本に繋がった堀跡と考えられ、全長46mになる。また、南側南東部中央には長さ6.35m、幅1.96～2.85mの土橋が設けられており、中央部は溝状に攪乱されている。北側調査区の1条の規模は長さ3.8m、幅6.84m、深さ50～86cmである。この2条の堀跡は二重堀の可能性がある。

<柱穴> 南側調査区から250基、北側調査区から6基の計256基が検出された。特に南側調査区の南部と東部に多く検出された。掘立柱建物等を構成するまで位置関係を特定することができなかった。時期や性格については不明である。

<出土遺物> 出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、かわらけ、陶器、鉄製品である。

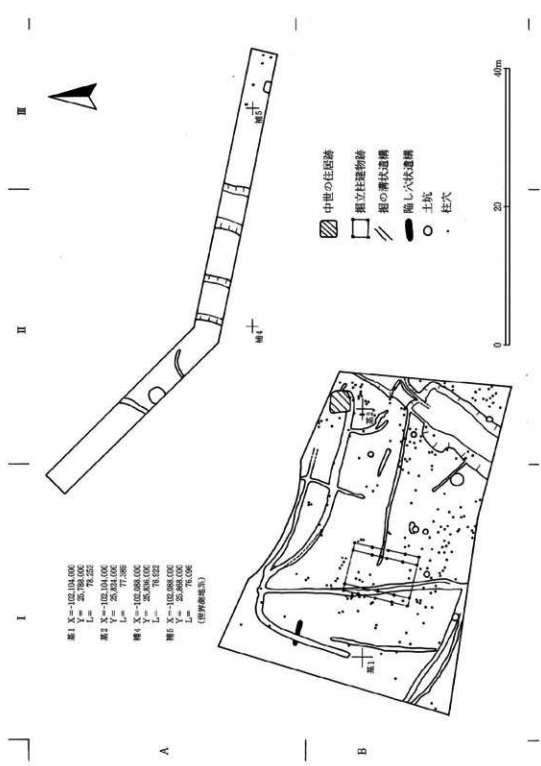
縄文土器は3点出土しており、うち1点は晩期の鉢型土器の口縁部で、外面に沈線が3条走り、口唇部には刻みが施されている。もう2点は、晩期の深鉢で同一個体の可能性がある。土師器は2点で、甕の口縁部及び、体部である。かわらけは11点で15世紀頃のものと考えられる。須恵器は6点で、甕の体部と底部である。体部外面には叩き目が、内面には当て具痕がそれぞれ残っている。陶器は3点で、その中には、中国産のものと考えられる甕がある。瓦器は体部下端部から底部で、脚が一つ付いている。鉄製品は住居跡の床面から鎌が出土している。

3. まとめ

調査の結果、本遺跡は縄文時代と中世の複合遺跡であることが分かった。陥し穴状遺構1基が検出されたことから縄文時代では、狩り場であったと考えられる。また、中世の住居跡の他に、掘立柱建物跡、土坑、柱穴、溝が検出され、生活の場であったことが分かった。さらに、堀が2条検出されたことから本遺跡の東側に館等の遺構の存在する可能性がある。

遺物は中世のかわらけ、陶器、中国産陶器、瓦器などが出土した。このことから、当時ここに有力者がいたことも推察される。

今回の調査では、隣接する九郎館との繋がりの関係を考える上で貴重な資料が得られた。

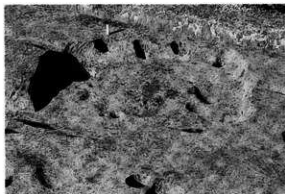


- 遺1 X= -102,014.000
Y= 25,788.000
L= 78.252
 - 遺2 X= -102,014.000
Y= 25,824.000
L= 77.288
 - 遺4 X= -102,088.000
Y= 25,824.000
L= 76.222
 - 遺5 X= -102,088.000
Y= 25,868.000
L= 76.096
- (伊野部地区)

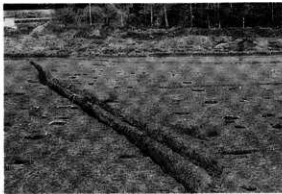
寺ノ上遺跡遺構配置図



調査区全景



竪穴住居跡(中世)



掘立柱建物跡



陥し穴状遺構

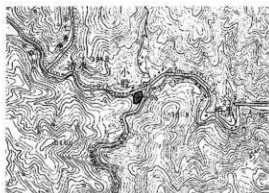


1号掘跡

寺ノ上遺跡検出遺構

(37) ^{たて}館遺跡

所在地	気仙郡住田町世田米字小股 28番地の11ほか
委託者	大船渡地方振興局土木部
事業名	国道397号支援助路整備事業
発掘調査期間	平成14年4月11日～8月12日
調査対象面積	3,000㎡
発掘調査面積	3,000㎡
遺跡番号・略号	N F 14-0159・T T-02
調査担当者	北田 勲・川又 晋
協力機関	住田町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中大原・盛

1. 遺跡の立地

館遺跡は、気仙郡住田町の西北部、国道107号と国道397号の合流点南西側約300mに位置し、大股川及び小股川に挟まれた舌状河岸段丘の東向き緩斜面上に立地している。標高は183～190mで、現況は水田・畑地である。

2. 調査の概要

館遺跡の調査は平成13年度から継続して行っており、本年度は2年目にあたる。平成13年度の調査は2,500㎡を対象に行い、縄文時代前期末と中期末の竪穴住居跡27棟、竪穴住居状遺構7棟、土器埋設遺構1基、土坑20基、柱穴状小土坑50基を確認した。それを受けて、今年度はそれに続く北側と南側のエリアにおいて調査を実施した。

今年度も昨年度の調査同様、調査区域は昭和20年代前後に行われた開田工事の影響を大きく受けており、遺構はかなり削平されている。しかし、調査区内で標高の低い部分はそれを免れており、この部分に遺構が集中している。検出した遺構は、縄文時代前期末と中期末の竪穴住居跡16棟、竪穴住居状遺構4棟、土坑34基、焼土遺構6基、柱穴状小土坑24基、時期不明（おそらく近世～近現代）の欄列5列である。

<竪穴住居跡> 竪穴住居跡は、16棟を検出した。調査区北側エリアで11棟、調査区南側エリアで5棟検出しており、北側ではほぼ同一の場所に連続または継続的に「建て替え」が行われている。これらの竪穴住居跡は平面形や炉の形態、出土している遺物によって2つの時期に区別される。1つは平面形が円形を呈し、複式炉及び石囲が、土器埋設炉などを有する直径5m未満の竪穴住居跡で、縄文時代中期末（約4,000年前）に属すると考えられるものである。またもう1つは、それよりも時期を遡る縄文時代前期末（約5,000年前）に属すると考えられる、平面形が縦長で長軸が10mを超す大形住居跡（ロングハウス）の時期である。今年度の調査では大形住居跡は北側エリアで1棟検出しており、直線上に5基並ぶ床炉を持ち、壁際には周溝が巡らされている。また、周溝はもう1本が重複しており、また柱穴も重複していることから、1回以上の「建て替え」が行われたのは確かである。その他の中期末に属する住居跡もこの傾向が見られ、1つの住居跡の床下から時期の異なる2つの炉が検出されるもの、同一床面ではあるが対面に炉を作り替えているものなどがある。

<竪穴住居状遺構> 竪穴住居跡とはほぼ同一のプランを持つが炉を有しないものを分類し、4棟を検出した。平面形は、調査区際にかかっているが隅丸方形を呈するものが1棟、円形を呈するものが3棟である。規模はいずれも4m前後で、時期は不明であるがおそらく縄文時代に属すると考えられる。

<土坑> 調査区全域において34基検出した。特徴としては竪穴住居跡からあまり離れたところではなく、付属するように作られている。時期は竪穴住居跡とはほぼ同時期と見られるが、住居跡を切る形で検出しているものも多くあるため、若干新しくなると考えられる。平面形はいずれも円形を呈し、断面形状がフラスコ形・袋形・ピーカー形になる。規模はそれぞれ異なるが、大きいものでは直径が1.5m、深さが1.7mあるものもある。一部ではあるが、底部に副穴を伴うものがある。

<焼土遺構> 調査区全域において6基検出した。平面形はいずれも不整な楕円形で、検出した層位はV層中(暗褐色)2基、VI層直上(地山)4基である。北側エリアV層中の1基が異地性であるほかは現地性の焼土遺構であり、竪穴住居跡及び土坑などの時期と同一と考えられる。

<柱穴状土坑・櫛列> 柱穴状土坑は24基、櫛列は5列検出した。いずれも時期は不明であるが、櫛列の柱穴に1基柱材が残存したものとあること、銭貨(熊鷹元寶)を出土したものとあることから、近世～近現代の田畑に関係する遺構であると考えられる。

<出土遺物> 出土遺物の総量は、大コンテナで約30箱である。遺物の内訳は土器12箱、石器17.5箱、土製品15点、石製品23点、銭貨1点である。銭貨を除き、すべて縄文時代に属する。山土器は縄文時代早期末葉～前期末葉・中期末葉のものがあるが、主体は中期末葉である。このなかで大形住居跡から出土した前期中～末葉の大木3・4～5式相当の土器は該期の資料を補うとともに、大形住居跡はこの時期の遺構として注目される。出土石器類は前述の箱数のうち、約700点が成品である(剥片を除いた数)。その内訳は剥片石器約250点、礫石器約450点と半数以上を礫素材の石器が占めている。肉眼観察から石材は、礫石器は在地系の北上山地のものと考えられるが、剥片石器は光沢を持つものが多く、奥羽山脈に産すると考えられるものを多量に含んでいる。土製品・石製品は、大形住居跡から出土した狭叶耳飾りや石製装飾品のほか、縄文時代中期末と考えられる土偶や円盤状土製品、石刀や石剣などが出土している。

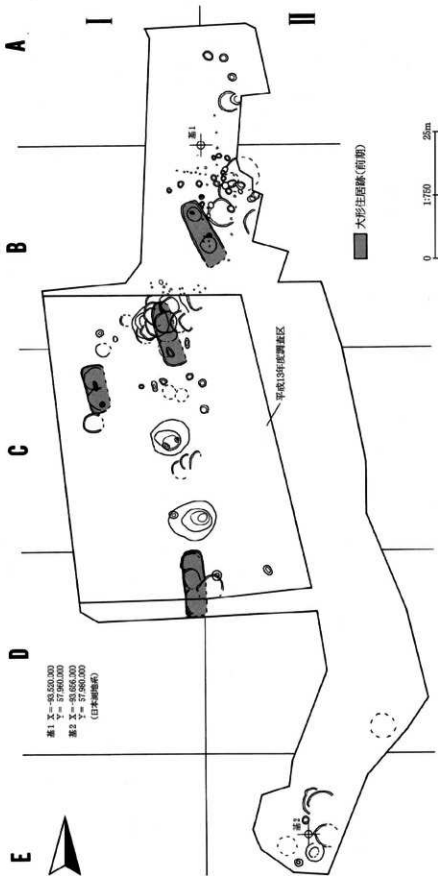
3. まとめ

2カ年に及ぶ調査の結果、館遺跡は縄文時代前期末・中期末の集落であることが明らかになった。総遺構数は、縄文時代の竪穴住居跡43棟(前期末4棟・中期末39棟)、竪穴住居状遺構11棟、土器埋没遺構1基、焼土遺構6基、土坑54基、柱穴状土坑74基、櫛列5列である。

時期は縄文時代前期末葉(約5,000年前)、中期末葉(約4,000年前)に大きく分けられ、2段階の時期にムラが形成されていることが分かった。前期末葉期の大形住居跡群は斜面に対して長軸が等高線に沿うように、ある程度の間隔をおいて形成されていることが確認された。また、中期末葉期の円形基調の住居跡群は調査区北側エリアに集中する傾向が見られ、同じ場所に数回の「建て替え」を行っていることも確認された。

館遺跡から出土している縄文時代前期中～末葉の土器(大木3・4～5式相当)は、隣居高田市牧田貝塚・釜石市沢田2遺跡などで確認されているほか岩手県内でのまとまった出土例が少ないため、この時期の遺構とともに貴重である。

以上の成果により、この遺跡が断絶期間を挟みながら、長期間にわたり生活の場として利用されていたことが分かった。今後の周辺遺跡との関わりや時期的な変遷を検討することにより、館遺跡は縄文時代前期末葉及び中期末葉の2時期において、岩手県沿岸部と内陸部を繋ぐ集落遺跡として良好な基礎資料となり得るであろう。



館遺跡遺構配置図



調査区全景



大形住居跡(前期)



炉埋粒土器



竪穴住居跡(中期)



土器出土状況

館遺跡検出遺構・遺物出土状況

(38) 小松 I 遺跡

所在地	気仙郡住田町上有住字小松28-1 ほか
委託者	大船渡地方振興局土木部
事業名	一般県道釜石住田線改良工事
発掘調査期間	平成14年4月10日～9月30日
調査対象面積	2,200㎡
発掘調査面積	2,200㎡
遺跡番号・略号	N F 07-0030・K M I-02
調査担当者	吉田 充・阿部孝明
協力機関	住田町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 遠野

1. 遺跡の立地

小松 I 遺跡はJR釜石線上有住駅の南西約8.5kmに位置する。本遺跡は崖堆積物に厚く覆われ、地山までの深度は最大5mを越える。後背山地からの単なる侵食だけによる供給量だけでは説明しにくく、地形から読み取れる北西-南東方向の構造にも起因するとみられる。

2. 調査の概要

一昨年度からの継続調査で、昨年度未了分と今年度新規対象になった範囲の合計2,200㎡が調査対象となった。昨年度までの調査で、検出面とその広がりがある程度推測できたので、部分的に作業の効率化を図れた。反面、検出面の多い調査区での同一検出面の認定や、微妙な土質の違いを識別しなればならなかった最終検出面では多くの時間を費やした。また、昨年度に続き7月中旬の台風による大雨のため、3区～4区にかけての水路側（山側）が崩落し、調査区が冠水した。このため調査途中であったが、その後の台風災害を避けるためにも崩落箇所周辺を埋戻した（遺構配置図上の斜線範囲）。今年度の調査区は0区、2区、3区、4区、8区である（遺構配置図参照）。

検出遺構は竪穴住居跡・住居状遺構19棟、土坑3基、焼土遺構54基である。遺物は大コンテナで約11箱出土した。各調査区の土層・検出面の状況も異なるため、調査区ごとに説明する。

〈0区〉 遺跡内で唯一河川性堆積物を含まず、微高地であった場所である。検出された遺構は竪穴住居跡1棟、土坑2基、焼土遺構4基、（近世墓廬7基）である。基本土層は上位からⅠ、Ⅲa、Ⅲc（塊状）、Ⅳ・Ⅴ相当層、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ（基本土層図参照）である。住居跡はⅥ層で検出された。精査段階では掘り込みが判別できず、土層断面による緩い壁の立ち上がり、地床炉2基と遺物の分布で認定した。遺物は条痕条痕土器が出土している。頸部に横位隆帯を巡らし、口唇部や隆帯上に刻目文が施されている。このほかに焼土2基を検出している。Ⅳ・Ⅴ層では小規模な焼土1基を検出している。本面は東側半分に分布し、土器片・石器とともに獣の骨が多く出土した。捨て場的な場所であったとみられる。遺物は厚手で、胴部地文が非結東羽状縄文の土器片が多く出土し、文様帯には斜位・渦巻状の側面圧痕文と短沈線で構成されるもの、縄文の地文上に横位の側面圧痕文の施されるもの擦紋などの土器片が出土し、複数の時期の遺物が混入している可能性がある。Ⅲa層では遺構は検出されなかったが、遺物には変形工字文が施された土器片が出土した。

〈2区〉 主に後背の沢から供給された堆積物で埋められている。検出された遺構は竪穴住居跡1棟、焼土遺構31基である。基本土層は上位よりⅠa～c、Ⅲa、Ⅲc(塊状)、Ⅳb1、Ⅳb2、Ⅴa～e、Ⅶ、Ⅷである。一般的に山体側で崖堆積物が厚く、民家側に向かってなくなる。Ⅲa層では遺構は検出されず、同時代の遺物が出上した。Ⅳb2層(写真②)では焼土遺構3基を検出し、ほぼ完形の小型深鉢が出土した。不整摺糸文で施文されている。Ⅳc層では竪穴住居跡1棟を検出した。隅丸方形を呈しているが、東側1/3は攪乱を受けていた。東西方向に長軸を持ち、規模は5.4m以上×4.6mである。壁は緩やかに立ち上がる。小規模な地床炉を4基持つ。植物繊維を含む非結束羽状縄文の土器片が出土している。Ⅴ層(写真③)では焼土遺構群を検出した。沢寄りの16m内に8基近接して検出された。規模は50～80cmで、炭化物片の他に骨粉が混入するものもある。焼土内から波状の側面瓦痕文の上器片や、焼土群と同一とみられる面から斜縄文の地文上に横位・山形状の十数本の側面瓦痕文を施文した土器片などが出上している。Ⅴe層では焼土2基が検出された。Ⅴe層で検出された焼土遺構と同様な位置で検出された。規模は1.8×1.0mで、不整な楕円形状を呈する。

〈3区〉 旧気仙川の堆積物が分布しはじめ、崖堆積物と交叉する場所である。旧気仙川の自然堤防上にある。検出された遺構は竪穴住居跡9棟、土坑1基、焼土遺構5基である。基本土層はⅠa、Ⅰb、Ⅰc、Ⅱa、Ⅱb、Ⅲa、Ⅲb、Ⅲc(塊状・層状)、Ⅳb、Ⅳc、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷである。昨年度までの2年間に縄文前期前半の竪穴住居跡を検出していたが、今年度はⅤ層(写真①)で縄文早期末～前期初頭の竪穴住居跡を9基検出している。ほぼ円形を呈し、規模は3～4mで壁は皿状に緩く立ち上がる(写真④)。褐色粘土薄層を挟んで炉跡を上下で検出した住居跡があり、洪水等で利用が中断された様子を想定できる。出土する土器片は厚く、植物繊維を含んでいる。非結束羽状縄文のほかに摺糸文の土器片が出上する。

〈4区〉 旧河道跡左岸が検出される場所である。後背に枯れ沢があり、ここから押し出されたと考えられる土砂流?が数mと厚く堆積している。検出された遺構は竪穴住居跡1棟、土坑1基、焼土遺構10基、炭化物集積2ヶ所である。基本土層はⅠa、Ⅰb、Ⅰc、Ⅱa、Ⅱb、Ⅲa、Ⅲb、Ⅲc(層状)、Ⅳb、Ⅳc、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷである。Ⅴ層で竪穴住居跡1棟、焼土遺構2基を検出した。住居跡は3区で検出されたものと同様な性格を持つ。Ⅲc層直下のⅣb層で炭化物集積2ヶ所とその周辺から焼土遺構8基を検出している。この他に約2m長の炭化木(ナラ)2本も出土している。

〈8区〉 本遺跡の西側に位置する。河川性堆積物が少なく、崖堆積物を厚く堆積させる場所である。基本土層はⅠa、Ⅲa、Ⅲc、Ⅳa、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷである。検出された遺構は竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構1棟、焼土遺構2基である(写真⑤)。住居跡は円形～楕円形を呈する。数m深の機械粗掘で掘りすぎたためプランを忠実に検出できなかった。浅い掘り込みで壁は緩く立ち上がるとみられる。3区同様な土器片が出土している。口縁部文線帯には縄文の地文上に数本の横位側面瓦痕を施文したもの等がある。

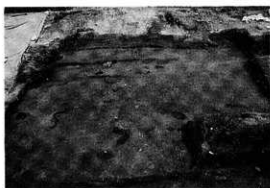
〈出土遺物〉 大コンテナで約11箱出土した。土器片は植物繊維を含むものがほとんどである。石器は、石鏃、石匙、打製石斧、不定形石器などが出上している。打製石斧はほとんどが片面に自然面を残すものである。

3. まとめ

3年間の調査で約300m×14m(約4,200m²)、最大深度約5m超の調査区内に主に縄文時代早期末～前期初頭にかけての集落跡があることが判明した。検出された遺構は竪穴住居跡・竪穴状遺構約70棟、土坑26基、焼土遺構97基、炭化物集積4ヶ所などである。出土遺物は、大コンテナで土器45箱、石器6箱である。十和田一中環火山灰を層帯として最大6面の検出を行った。今後の家内整理でさらに解明をしていきたい。



① 3区縄文時代早期末～前期初頭住居跡群(東から撮影)



↑
②



↑
③

2区縄文時代前期前半焼土検出面と縄文時代早期末～前期初頭焼土群検出面(南から撮影)



↑
④



↑
⑤

3区住居跡(人の右側、上が南)と8区住居跡群(上が北、ともに③と同時期)

小松 I 遺跡検出遺構

はせどうかいづか
(39) 長谷堂貝塚

所在地 大船渡市猪川町字中井沢78番地2ほか
委託者 大船渡地方振興局土木部
事業名 県営長谷堂アパート建設事業
発掘調査期間 平成14年4月15日～12月6日
調査対象面積 2,500㎡
発掘調査面積 2,900㎡
遺跡番号・略号 NF39-1151・HSD-02
調査担当者 阿部勝則・金野 進
協力機関 大船渡市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 登

1. 遺跡の立地

遺跡は、JR大船渡線盛駅の北東約1.2km、岩手県立大船渡高等学校の南南東約200mに位置し、北東側にある今出山（標高756m）から南西側に延びる裾野にある盛川と中井川に挟まれた段丘に立地する。調査区付近は、北東から南西方向への緩やかな斜面で、標高は約22～34mである。現況はアパート跡地である。

2. 調査の概要

今回の調査では、竪穴住居跡51棟、掘立柱建物跡15棟、土坑200基など多くの遺構が検出された。時期は、縄文時代中期末葉と晩期末葉に大別され、概ね標高26mを境として高位面に中期の遺構、低位面に晩期の遺構が分布していることから、時期により集落の占地が異なっていた可能性が高い。なお、遺跡全体は旧アパート建設時に大きく削平を受けており、遺存状態は悪く、ほとんどの遺構が上部を削り取られていた。

＜竪穴住居跡＞ 中期44棟、晩期7棟が確認された。いずれも同一地点で頻繁に建て替えが行われている。中期の住居跡の炉跡は複式炉が多くを占める。晩期の住居跡の炉跡は地床炉・石囲炉である。

＜掘立柱建物跡＞ 中期のものと晩期のものがある。中期の建物跡は調査区東側に特に密に分布する。晩期の建物跡は調査区西端で検出され、方一間の形態と推定される大形の建物跡である。個々の柱穴の規模は、掘り方が径1～1.2m、深さ2mに及び、同一地点で頻繁に建て替えを繰り返している。

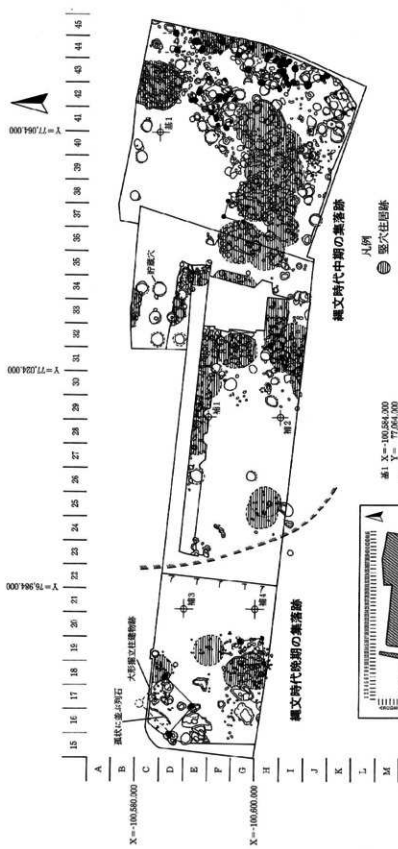
＜土坑＞ 200基検出された。70基余りが断面フラスコ状の大形土坑である。規模は、大きいもので最大径2m、深さ2mに及び。いくつかの土坑では廃棄された獣骨が出土している。時期は中期末葉を主体とする。

＜列石＞ 調査区西端で、8箇の石が孤状に並べられていた。個々の石は内側に傾いた状態で埋められていた。近接する大形の掘立柱建物跡と関連する施設の可能性がある。時期は晩期末葉と思われる。

＜出土遺物＞ 縄文土器が大コンテナで65箱出土している。時期は中期末葉のものが大半を占め、晩期末葉のものが少量ある。石器は15箱出土している。他に三角壱形土製品や垂飾りなどの石製品も出土している。

3. まとめ

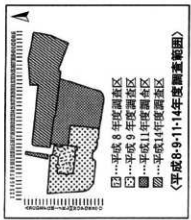
今回の調査では次の2点が確認された。①住居・建物や土坑は、いずれも同一地点で頻繁に建て替えが行われており、土地利用にある程度、規制が働いている。②中期の集落と晩期の集落は占地が異なる。確認された集落の規模に加えて、近隣では入手できない遺物も多く出土していることから、長谷堂貝塚は、大船渡湾を望む周辺域における拠点集落であったと考えられる。



凡例
 ● 竪穴住居跡
 □ 環状柱建物跡



基1 X=100,584.000
 Y= 77,084.000
 基2 X=100,582.000
 Y= 77,085.000
 (日本測距高)



埴谷陸貝塚遺構配置図

(40) ^{したがま}下構遺跡第2次調査

所在地	平泉町長島字下構地内
委託者	一関地方振興局 一関農村整備事務所
事業名	県宮ほ場整備事業
発掘調査期間	平成14年4月12日～10月18日
調査対象面積	10,000㎡
発掘調査面積	10,000㎡
遺跡番号・路号	NE76-1226・SG-02-2
調査担当者	羽柴直人・立花公志
協力機関	平泉町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一関

1. 遺跡の立地

下構遺跡はJR東北線平泉駅から東約2km、北上川東岸に位置し、沖積低地に張り出す微高地上に立地している。標高は20～22m前後で、調査開始前は水田、畑として利用されていた。

2. 調査の概要

遺跡の層序は、第Ⅰ層 ぶい黄褐色土 層厚0～50cm 表土・耕作土、第Ⅱ層 黄褐色土 層厚約4m、に分けられる。Ⅱ層上面が古代以降の遺構検出面である。Ⅱ層以下からは遺構は検出されていない。

検出遺構は、竪穴住居2棟、掘立柱建物24棟（柱穴約470個）、土坑53基、溝12条、井戸1基、倒木痕4基、焼土5基である。遺構の所属時期は不明のものもあるが、9世紀、12世紀、近世～近代に大別される。

<9世紀の遺構> 出土土器の形態と十和田a降下火山灰との関係から、9世紀代に属すると考えられる遺構である。竪穴住居跡2棟、焼土4基、土坑1基がある。竪穴住居はカマドを有するもの（SⅠ1）とカマドの無いもの（SⅠ2）がある。焼土は竪穴住居の壁、床面が地盤の削平、流出で失われ、カマドあるいは炉の焼土がかろうじて残った部分と推測される。土坑（SK52）は堆積土内に十和田a降下火山灰を含んでいる。この土坑は竪穴住居SⅠ2と重複しており住居より新しい、これにより竪穴住居（SⅠ2）が十和田a火山灰降下より古いと判断できた。

<12世紀の遺構> 近世の掘立柱建物と軸方向が異なる掘立柱建物（SB17）があり、12世紀の掘立柱建物の可能性を指摘できる。柱と柱の間の寸法は約2.7m（約9尺）である。しかし、確実に12世紀と判断するには根拠が少なく、なお検討を要する。

<近世～近代の遺構> 下構遺跡には、昭和時代の初め頃（1920年代頃）まで屋敷が所在していた。この屋敷は、近世の文書では「下構屋敷」と記載されている。今回の調査はこの下構屋敷に関する遺構を調査したことになる。子孫の佐藤家が所蔵する文書には、寛永19年（1642年）から下構屋敷に住まいを始めた旨の記述がある。この年代は出土した遺物と遺構の形態にも齟齬はなく、信頼できる年代と考えられる。

下構屋敷に付随すると推測される遺構は、掘立柱建物23棟、土坑52基、溝12条、井戸1基、倒木痕4基、焼土1基がある。掘立柱建物は規模と形態から母屋と推測される建物が4棟、附属屋と推測される建物が19棟検出されている。

母屋の4棟は、屋敷の中央部に位置する2棟と、南東隅で検出された2棟に分けられる。中央部の2棟(SB11、SB16)は重複しており、SB16が古い。この掘立柱建物の母屋SB16、SB11は17世紀代の建築と推測される。それ以後は、礎石建物の母屋に変換したと考えられる。南東隅の母屋2棟(SB22、SB23)は中央部の母屋よりも規模が小さく、下構屋敷に隸属する者の家屋、または隠居屋といった性格を想定できる。附属屋と推測される掘立柱建物は、母屋の掘立柱建物よりも検出数が多い。中央部母屋の東隣に位置する附属屋は5棟(SB3、SB7、SB9、SB12、SB14)重複している。これは母屋が礎石建物に変換した後も、附属屋は依然として掘立柱建物であったことを示している。具体的な用途を推測できる附属屋にSB2がある。これは建物の内部に埋設桶遺構(SK7)があり、便所と推測できる。

井戸(SE1)は屋敷廃絶後も近年まで使用されていたものである。石組みの井戸で、深さは5.8mである。構築時期を判断する資料は無いが、他に井戸が存在しないことから、屋敷の開始時に掘られた可能性を指摘できる。また、倒木痕が4基検出されている。これは屋敷廃絶時に屋敷林を伐採、抜根した痕跡である。SK1は池と推測される遺構である。埋土中から多量の陶磁器、ガラス製品が出土した。屋敷廃絶時に不要物を廃棄したものと考えられる。

<出土遺物> 以下の遺物が出土した。縄文土器片微量(後期前葉、晩期後半)、石鏃、土師器、須恵器、土師、12世紀のかわらけ(ロクロ、手づくね)、瀬美産陶器(甕)、常滑産陶器(甕、片口鉢)、中国産白磁(壺)、近世陶器(肥前産、瀬戸・美濃産、常滑産、大塚相馬産、在地産)、近世磁器(肥前産、瀬戸・美濃産、東北地方産)、近代陶磁器、石製品(石臼、砥石)、金属製品(銭、煙管、小柄、鎌、釘)、ガラス製品(ビン、石油ランプ)、木製品(漆器椀、鍋蓋、下駄)。

縄文時代の遺物は微量で、調査区内に遺構が存在しないことから、周辺からの混入品と推測される。土師器、須恵器はいずれも9世紀前～中葉のもので、時間幅は小さいと推測される。12世紀の遺物は少量であるが、かわらけ、国産陶器、中国産白磁が揃っており、北上川西岸の平泉遺跡群拠点地区と質的には遜色ない内容の遺物である。北上川の東岸では近年12世紀の遺物の出土が各地で確認されているが、下構遺跡は現在のところ、東岸では最も南側の12世紀の遺物出土地点となった。

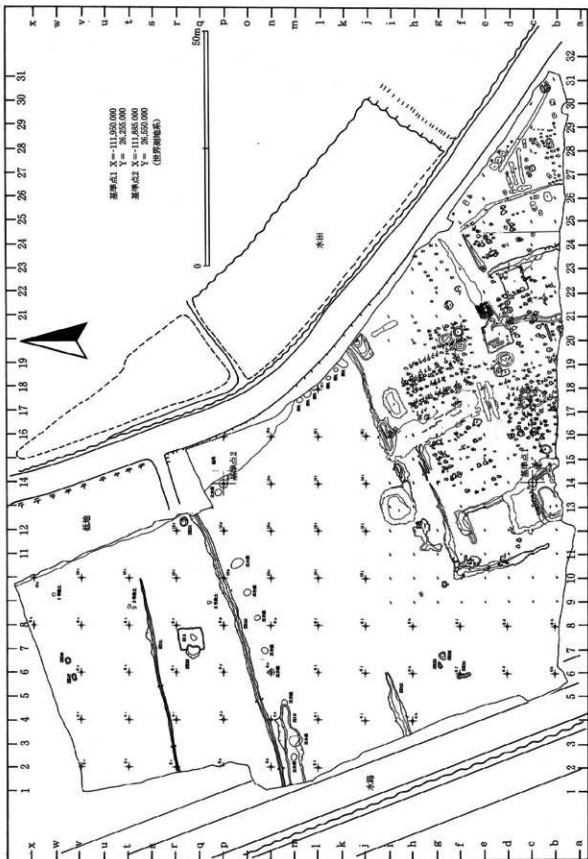
近世～近代の遺物は質量ともに豊富で、下構屋敷の暮らしぶりを具体的に物語る良好な資料である。SK1からの出土品は種類、量ともに豊富で、下限年代が明確(昭和初年頃)であり、近代遺物編年の基準と成り得る資料である。

3. まとめ

下構遺跡の調査では、9世紀の集落、12世紀の集落、近世～近代の屋敷跡が検出された。

特筆されるのは、12世紀のかわらけ、国産陶器、中国産白磁の出土である。これによって、12世紀平泉遺跡群の範囲が、従来の認識よりもさらに広がることを明らかになった。平泉遺跡群における北上川東岸の様相、性格を明らかにして行くことが今後の課題といえる。

また近世～近代の「下構屋敷」は、発掘調査と佐藤家の文書から、17世紀中葉(1642年)から20世紀前半(1920年代)まで、約280年間営まれた屋敷であることが明らかになった。このように下構屋敷の遺物、遺構は時間幅が明確であり、具体的な近世農民の生活を考察するには格好の資料である。また、多量に得られた近代遺物も下限年代が明確であり、近代遺物の時代指標として有効である。



下構遺跡遺構配置図



下構遺跡調査区全景



土罎出土状況(S I 2)



近世～近代の井戸(S E 1)



近世の掘立柱民家(S B 16)

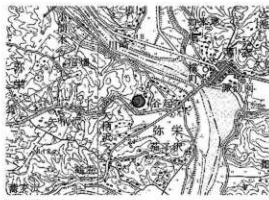


近世の掘立柱民家(S B 11)

下構遺跡検出遺構・出土遺物

(41) 楊生新城館跡

所在地 一関市弥栄字沼畑地内
委託者 一関地方振興局土木部
事業名 一般国道284号道路改築事業
発掘調査期間 平成14年10月18日～11月19日
調査対象面積 2,230㎡
発掘調査面積 1,560㎡
遺跡番号・略号 OE09-2056・YS-02
調査担当者 亀 大二郎・羽柴直人
協力機関 一関市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一関

1. 遺跡の立地

本遺跡は一関市の最東端に位置する弥栄地区内にある。北上川西岸の山地に立地し、標高は25～74mである。南側斜面下を国道284号線が通っており、国道を挟んで南西側に楊生古城跡が並ぶ。現況は山頂に熊野神社が祭られ、東・北側斜面は広く畑地となっている。

2. 遺跡の概要

今年度の調査で確認された遺構は、平場が4箇所、土塁状の高まりが1箇所である。

<平場> 調査区南東端で段状に連なった平場を確認している。標高は25～38mあり、調査区内における面積は上から約50㎡、200㎡、35㎡、2㎡である。下2段の平場は調査区内で途切れているが、上2段のものは区外まで曲輪状に延びている。また、上2つは中央にある岩盤層のところで二段に分かれており、平場造成の際に岩盤層が障害になったものと考えられる。

<土塁状遺構> 調査区東側にある高まりの部分で、南北方向にほぼ直線的に延びている。幅は約2.4mあり、周囲より10～20cm高くなっている。斜面下は国道によって切られており、山側は標高60mあたりまで続いている。郷土誌「弥栄の里」にある旧参道跡と位置的に一致する。

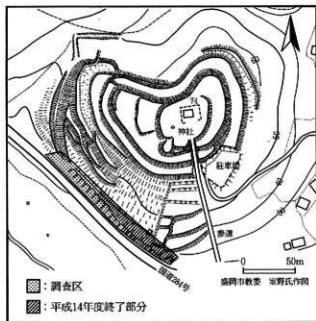
<出土遺物> 近・現代の陶磁器片と鉄製品（釘等）が数点出土している。

3. まとめ

「大概系図」によると、峠城寺崎氏十代常清の弟明清が楊生城主の祖で、四代目の信覚（天正十八年没）の代に滅亡するに至ったとある。楊生古城から新城に移った時期については年代は明らかでないが、城館の時期としては中世末頃と思われる。

今回検出した遺構のうち平場2つは現在の参道付近まで続いており、人為的遺構と考えられる。ただし、当時の遺物は出土しておらず、城館に関係したものでどうかは不明である。また、土塁状の高まりは岩盤層の砕片が積み重なった（あるいは岩盤層が風化した）もので、城館があった当時の痕跡や参道跡の様子は窺えない。調査区西側の崖になっている部分は、北西側から続く曲輪状の平場がここで途切れており、後年になって自然崩落したものである。

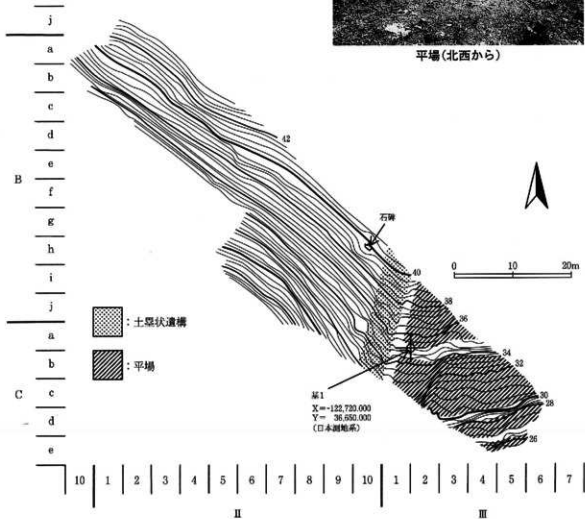
なお、来年度調査予定の調査区北西端にはU字状の窪みがあり、空堀跡の可能性が考えられる。



土塁状遺構(北側から)



平場(北西から)



揚生新城館跡遺跡遺構配置図

(42) 五輪堂遺跡

所在地 西磐井郡花泉町涌津字五輪堂126
番地ほか
委託者 一関地方振興局
一関農村整備事務所
事業名 県営ほ場整備金流川地区
発掘調査期間 平成14年6月17日～10月31日
調査対象面積 4,576㎡
発掘調査面積 4,576㎡
遺跡番号・略号 OE38-2093・GRD-02
調査担当者 島原弘征・太田代一彦
協力機関 花泉町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 若柳

1. 遺跡の立地

五輪堂遺跡はJR東北本線花泉駅の南東約2.6km、金流川右岸の河岸段丘上に位置している。本遺跡が位置している五輪堂地内からは、現在涌津八幡神社に安置されている重要文化財の鉄五輪塔地輪が出土したとされており（『安永風土記』）、現在も悪法師・松之坊・鴻南沢等、当時の面影を伝えるかのような地名が遺跡の周辺に残されている。標高は18～20m前後、調査前の現況は水田で、昭和30年代に行われたほ場整備により、調査区北側の標高の若干低い部分以外は削平を受けている。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡3棟、竪穴状遺構3棟、掘立柱建物跡1棟、中世の堀跡1条、中世～近世にかけての墓壇6基、時期不明の掘立柱建物跡4棟、土坑20基、井戸1基、溝跡50条、柱穴状土坑約200基が検出されている。

＜竪穴住居跡＞ 北側調査区より3棟検出されている。開田時の掘削で床面近くまで削平されているものがほとんどで残存状況は不良である。平面形は隅丸形状を呈し、規模は一辺5～6mを測る。周溝は壁際に塗切れなく、貼床も住居全面に施している傾向が見られる。カマド設置方向には規則性はみられないものの、本体部の袖は土師器を芯材にして褐色系粘土で構築している傾向が見られる。また、煙道部は掘り込み式なのか削り抜き式なのかは、削平によって上半部が消失しているため不明である。比較的残りの良い住居の埋土からは灰白色火土灰が層状に確認されている。これらの住居の時期だが、出土した土師器・須恵器からみて平安時代（9世紀代）であると思われる。

＜竪穴状遺構＞ 北側調査区より3棟検出されている。開田時の削平により住居施設の大半が消失したものの、残存している貼床の広がりもしくは周溝・主柱穴の配置等から見て竪穴であると判断した遺構のうち、カマド・炉等が無い為、性格不明な遺構をここでは指している。規模は一辺5～7mの隅丸形状を呈すると推測され、貼床・周溝から土師器が出土していることから平安時代の遺構であると思われる。

＜掘立柱建物跡＞ 北側調査区より5棟検出されている。本遺跡の掘立柱建物跡は開口部径60～80cmの掘り方を持ち、柱間約2.2mを測る2間×2間の掘立柱建物跡と、開口部径30～40cmの掘り方を持ち、柱間約1.8

～2.2mを測る掘立柱建物跡に大きく2つに分けられ、後者が主体を占める。これらの掘立柱建物跡の時期は前者が掘方から出土した土師器・須恵器片からみて平安時代、後者は出土遺物がないことから不明である。

<土坑> 調査区各地より20基検出されている。平面形は円形・楕円形を呈し、規模は60cm～1.5mを測る。遺物が出土していないこともあり、時期は不明である。

<墓墳> 北側調査区より6基検出されている。開削時の削平によって遺構の大部分が消失し、僅かに底部付近のみが残存している土坑のうち、①埋土が多量の炭と焼土・焼骨片を含むもの。②六道銭に使用されたと思われる永楽銭等の古銭が出土したもの。③棺桶の底板が残存しているものを墓墳とした。平面形が長軸80cm～1mの楕円形を呈し、埋土は炭を主体に焼土と少量ながら焼けた骨片が含まれ、永楽銭を主体とした古銭が埋葬されたものと、径1m前後の円形を呈し、底部に棺桶の底板が残存するものとに分けられ、前者は形状・規模・埋葬された古銭の状況が宮城県北部の中世末～近世初期にかけての火葬墓と類似することから中世末まで遡る可能性が考えられ、後者は遺物が出土していない為不明である。また、墓墳は堀に区画された内部地区からのみ検出されている。

<井戸> 北側調査区より1基検出されている。平面形は円形を呈し、開口部は径82×92cmの楕円形状を呈し、深さ1.6m弱を測る。遺物が出土していないことから時期は不明である。

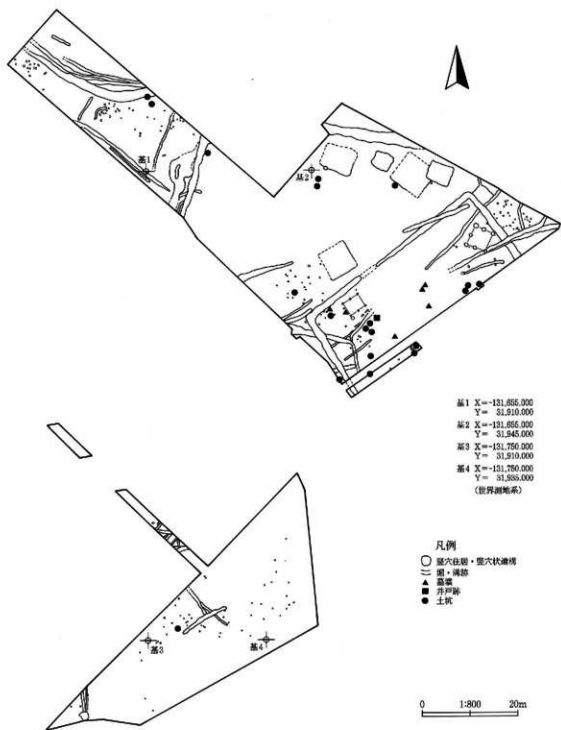
<堀跡> 北側調査区より1条検出されている。に開口部幅約1.2m、深さ5～60cm、断面形は逆台形ないし半円を呈する。この堀は開削時の削平によって一部途切れているものの北側調査区東部を東西方向約45m、南北方向約15mにわたってコの字状に巡り、南側は調査区外にまで延びている。その調査区際から南へ約30m程行った場所から沢の落ち込みが始まることから、この堀は沢まで延びていったか、方形状に区画されていた可能性が考えられるが、推測の域を出ない。この堀からは摩滅した土師器・須恵器の他に13世紀代の常滑産(愛知県)の陶器片が出土し、近世以降の陶磁器等が出土していないことから中世まで遡る可能性が高いと思われる。しかし、堀に区画された内部地区からは堀跡と確実に同時期と思われる遺構は検出されなかったためこの堀の性格については不明である。

<溝跡> 調査区各地より50条が検出されている。開口部幅20cm～1m、深さ5～40cmを測る。時期不明の溝が多数を占めるが、竅穴住居とほぼ同時期と想定される溝が北側調査区より数条検出されている。

<出土遺物> 今回の調査で出土した遺物は石器類、土師器・須恵器、不明鉄製品、陶磁器、木製品で大コンテナ6箱程出土している。大半が平安時代の土師器・須恵器などの土器類で大コンテナ5箱程出土している。また、13世紀代と想定される常滑産の陶器片が堀から9号袋1袋分、永楽銭を主体とした古銭が墓墳から出土している。陶磁器類が小コンテナ1箱分出土しているが、全て表土中から出土し大半が近世以降のもだが、1点だけ12世紀代の白磁片が出土している。他に少量ながら石鎌10数点、鉄製品(不明鉄製品を含む)10点、木製品(下駄・櫛・櫛)が5点出土しているが、大部分が表土中から出土した遺物である。

3. まとめ

今回の調査では、鉄五輪塔地輪に直接関わるような遺構は検出されなかったが、それと同時期の可能性の高い堀が検出された。水田造成時の削平で堀内部の遺構の大半は消失しており、僅かに検出された遺構も堀跡と確実に同時期のものといえるものは今のところ確認されていないが、墓墳が堀内部からのみ検出され、その時期が中世末まで遡る可能性があるため、今後の整理の中で堀内部地域の性格を慎重に検討していきたい。また、平安期の竅穴住居を始めとする古代の遺構は近隣の類例が増加した段階で、比較検討が行われることによって、古代以降の遺跡の調査例が少ない当該地域の様相が明らかになるものと思われる。



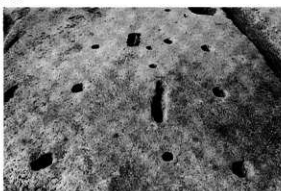
五輪堂遺跡遺構配置図



調査区全景



竪穴住居跡



掘立柱建物跡



竪穴住居跡内遺物出土状況



掘跡(西コーナー付近)

五輪堂遺跡検出遺構・遺物出土状況

IV. 本報告

(43) 矢盛^{やもり}遺跡第4次調査

所在地 盛岡市飯岡新田第2地割才川
委託者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成14年6月3日～8月6日
調査対象面積 1,440㎡
発掘調査面積 1,440㎡
遺跡番号・略号 LE26-0139・IYM-02-4
調査担当者 半澤武彦・久慈泰彦
協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間に事業予定期間とし、面積313haを対象とした整理事業が継続中である。

事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い本調査の必要範囲を確定し、本調査は助岩手県文化振興事業団の受託事業として実施している。

矢盛遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成14年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市および助岩手県文化振興事業団の両者に通知された。これを受けた両者は平成14年4月1日助岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。実際の発掘期間は平成14年6月3日に着手され同年8月6日に終了した。

調査の結果、遺構・遺物ともわずかであったことから同年冬期間に整理を行い、当埋蔵文化財センター平成14年度調査略報に本報告として掲載した。
(盛岡市都市整備部盛岡南整備課)



遺跡位置

1:50,000 盛岡

2. 遺跡の立地

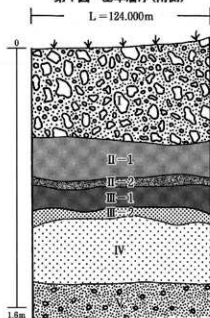
遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南約3kmに位置し、平石川南岸の河岸段丘面上に立地している。標高は122m前後で、調査前の土地利用状況は旧水田・住宅地を埋め立てたゲートボール場および公共用地となっていた。調査区は1～1.5m程度の盛土が施されているが、これは20年ほど前に存在した旧都南村（現盛岡市）村営住宅の基礎および廃材等の埋め立てによるものであり、雑物が大量に含まれ調査には困難を極めた。調査区の北東側は、前年度まで継続して調査が行われた飯岡才川・細谷地両遺跡と隣接している。

3. 遺跡の基本層序

調査区の基本層序は以下の通りであるが、近年まで存在した村営住宅の基礎および残土・廃材等が厚く堆積しており、遺構検出面の下まで深く覆乱を受けた箇所が随所に見られる。

- I層 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 粘性弱 堅くしまる
(礫・コンクリート片・ゴミ等を多く含む客土である)
- II-1層 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性強 しまり密
(旧水田の耕作土で、全体に細かい礫と酸化鉄を少量含む)
- II-2層 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性強 しまり密
(酸化鉄の集積)
- III-1層 10YR2/1 黒色土 粘性強 しまり密
(旧水田の床土)
- III-2層 10YR3/3 暗褐色土 粘性強 しまり密
(III-1層の漸移層)
- IV層 10YR4/6 褐色土 粘性ややあり しまり密
(遺構検出面)
- V層 10YR4/4 褐色粗砂 粘性弱 堅くしまる
(径1～10cmの自然礫を密に含む)

第1図 基本層序(南側)



4. 調査の概要と検出遺構

本次調査区は、第3次調査区（地域公団分：1,560㎡）を中心にはさみ南北両側に分かれて位置しているが、調査は両次並行して実施した。検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構が14基、時期が不明な土坑が4基、近世のものと思われる井戸跡が1基、時期不明の井戸跡が1基となっている。

<陥し穴状遺構> 調査区の中央を北東～南西方向へ貫く旧河道（古代以前のものと推定）の西側において、軸方向がほぼ北西～西を示す縄文時代の陥し穴状遺構が14基検出された。いずれも平面形は溝状で横断面形は緩やかなV字またはU字状を呈し、開口部の幅は長軸3.2～4.4m、短軸0.3～0.8m、深さ0.7～1.2mで断続的に一定の間隔をおいて分布する様子が見られる。遺構の内部は、開口部から底部に向かって長軸方向に底が広がるフラスコの形態を呈しており、短軸方向は極端に狭いものが多く掘り下げ作業は大量の湧水も相まって困難を極めた。いずれの遺構からも遺物の出土はなく遊茂木の痕跡等も認められなかった。

<井戸跡> 調査区の南東側と西側から2基の井戸跡が検出された。南東側のR I 002井戸跡は検出面において緩やかな環状に自然礫が埋め込まれた状態で見つかったが、埋土の断面観察から開口部付近のみ辛うじて原形を留め、中央の第2層と外周の第3層にかけては廃棄による埋め戻しと崩落の影響が重なりやや雑然とした堆積状況を示している。開口部の径は2.2×2m、底径1.4m、深さ1.3mで、底部は加工された長さ70～80cm前後の小径の丸太材と、長さ40～80cm、幅4～30cm、厚さ2～5cmの板材によって井戸枠が方形に組

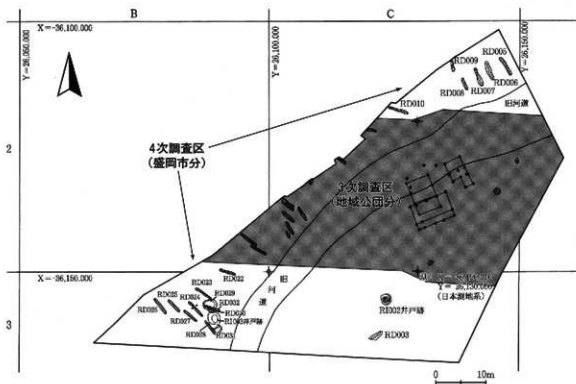
まれていた。使用されていた木材の樹種については丸太材にスギ、板材にスギとクリが使用されており、どちらにも工具（手斧）による加工痕が明瞭に残っているが、板材の上部は腐食し残存状況はよくない。

井戸枵材以外の出土遺物として、先端が丸く加工された長さ38cm、幅3.1cm、厚さ1.1cmの粗い柁目が残る細い板材が井戸枵内から見つかっているものの、井戸枵材とは形態が異なるため別の用途によるものである可能性が高い。他に明確な時期を示すような遺物は出土していないものの、近世の遺構と推定している。

一方の西側から検出されたR I 003井戸跡は検出面での形態が南北方向に長い楕円形を呈し、開口部径は3.3×2.4m、底径は1.6×1.2m、深さは1.3m、井筒や石組みの痕跡等は見られない素掘りのみによるもので、底部はグライ化した粘土と細砂が厚く堆積しており、出土遺物もないため詳細な時期は不明である。

<土坑> 調査区の南側に1基、および西側のR I 003井戸跡と接するように3基の土坑がそれぞれ検出された。南側の1基は、R I 002井戸跡以外検出されていない遺構空白区域に独立して位置している。平面形は溝状を呈するが、埋土は黒色土の単層で一部が攪乱を受けているため詳細は不明であるが、風倒木痕である可能性が考えられる。西側のR I 003井戸跡に近接して分布する3基の土坑群は、埋土の堆積状況からRD029とRD032の間のみ新旧関係は存在するものの、全体的には井戸跡との大きな時期差は見られず、周辺に同様な形態の遺構も検出されていないことなどから、井戸跡に付随した施設の一部と推定している。

<出土遺物> R I 002井戸跡底部から、工具による加工痕が一部に残る井戸枵材8点（板材5点・丸太材3点）と、端部が丸く加工された細い板状の木製品1点が出土したのみである。井戸枵の板材に残る工具痕は、表面を平滑にする際についた手斧によるものと推定され、井戸枵材No.8では斜方向に残る明瞭な痕跡を確認することができる。



第2図 矢盛遺跡4次グリッド及び遺構配置図

5. まとめと考察

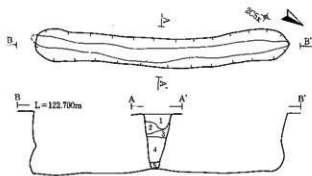
本次調査は中央に第3次調査区をはさんではいるが、連続した同一検出面にあることから並行して実施したものである。検出された遺構の大部分を占める陥し穴状遺構は、調査区中央を北東～南西方向に貫く、旧河道の延長上にある細谷地第5次調査区の北西側においても、同様な分布状況が見られる。これらの遺構が分布する区域は旧河道に沿う微高地上にあり、けものみちとなっていたところに一定の間隔をおきながら断続的に構築されたようで、未調査の南西側にも更に続くものと推定される。R I 002井戸跡は第3次調査区内から検出されている近世の掘立柱建物跡との関連も考えられるが、両遺構の距離がやや離れていることから、未調査の南側に直接関連する建物跡が展開する可能性が高い。今後は、編集集中である細谷地遺跡の成果や隣接地域における調査の進展により、現在に至るまでの土地利用の詳細が明らかになってくるものと思われる。なお、矢盛遺跡第4次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

出土遺物観察表 <木製品>

順	遺構名	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	種 類	製 法	備 考
1	R I 002	底部	67.7	4.5	5.5	丸太材	スギ	端部を方形加工?
2	M I 002	底部	83.4	4.2	4.3	〃	スギ	両端部を方形加工。
3	R I 002	底部	73.8	6.9	5.8	〃	スギ	片側端部に、ほり込みの穴。
4	R I 002	底部	52.5	19.5	3.8	板状材	クリ	片側面に上皿痕。方形の板材?
5	R I 002	底部	52.0	15.2	3.5	〃	クリ	〃
6	R I 002	底部	42.0	18.7	1.7	〃	クリ	両面に工具痕。方形の板材?
7	R I 002	底部	59.0	28.3	2.3	〃	スギ	両面に工具痕。
8	R I 002	底部	62.5	29.8	2.4	〃	スギ	下部に斜方向の工具痕。
9	R I 002	底部	38.0	3.1	1.1	板状木製品	スギ	木種とは別物。端部を丸く削。

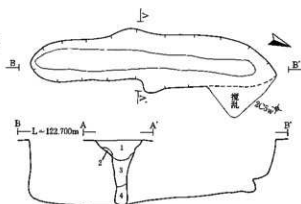
報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいごうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書 名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第423集							
編 著 者 名	半澤武彦・久慈泰彦							
編 集 機 関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001-9002							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇'〇〇	〇'〇〇			
矢盛遺跡 (第4次調査)	岩手県盛岡市 飯岡新田第2 地刺才川	03201	L E 26 -0139	39度 40分 26秒	141度 08分 16秒	20020603 ～ 20020806	1,440㎡	盛岡南新都市 計画整備事業に 伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
矢盛遺跡 (第4次調査)	散布地	縄文・ 近世	縄文：陥し穴状遺構(14基) 近世：井戸跡(1基) 時期不明：上坑・井戸跡	井戸木枠(板材・丸太材)板状木製品		本次調査区の中央に第3次調査区(地域公団委託分)が存在する。		



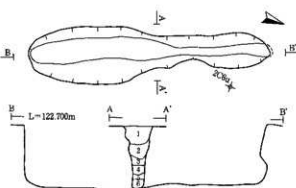
RD005 陥し穴状遺構

1. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまり密
2. 10YR2/4 黒褐色土 粘性あり しまりやや密 (黒色土上のブロックを30%含む。壁の崩落上?)
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密 (地山ブロックを20%含む)
4. 10YR2/4 におひ黄褐色土 粘性あり しまりやや密 (壁の崩落が多い)
5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密



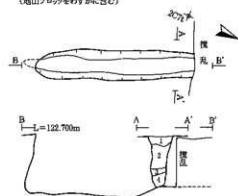
RD006 陥し穴状遺構

1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまり密
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (壁の崩落上?)
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密 (地山ブロックを40~50%含む)
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (地山ブロックをわずかに含む)



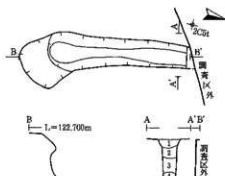
RD007 陥し穴状遺構

1. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまり密
2. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまり密 (地山ブロックを30%含む。壁の崩落上?)
3. 10YR4/6 褐色土 粘性あり しまりやや密
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (地山ブロックを10%含む)
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (地山ブロックを30%含む。壁の崩落上?)
6. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (地山ブロックをわずかに含む)



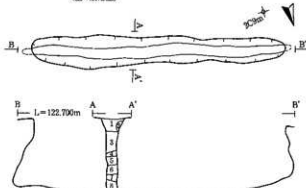
RD008 陥し穴状遺構

1. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまり密
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密 (地山ブロックを30%含む。壁の崩落上?)
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (地山ブロックを10%含む)
4. 10YR4/6 褐色土 粘性ややあり しまり密 (壁の崩落上?)



RD009 陥し穴状遺構

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密
2. 10YR2/4 黒褐色土 粘性ややあり かなりしまる (黒褐色土上のブロックを少量含む)
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり かなりしまる (黒褐色土上のブロックをわずかに含む)
4. 10YR4/6 褐色土 粘性ややあり しまり密

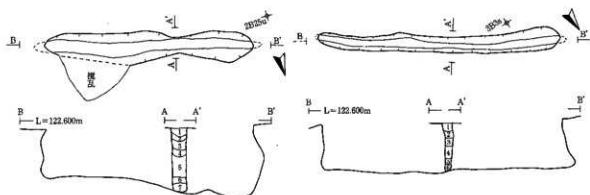


RD010 陥し穴状遺構

1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまり密 (酸化鉄を薄く含む)
2. 10YR4/6 褐色土 粘性あり しまり密 (壁の崩落上?)
3. 10YR4/4 褐色土 粘性あり しまりやや密 (黒褐色土上のブロックを全体に薄く含む)
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密 (地山ブロックをわずかに含む)
5. 10YR5/4 におひ黄褐色土 粘性ややあり しまり密 (酸化鉄を薄く含む)
6. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密 (全体に酸化鉄を30%含む)
7. 10YR5/6 黄褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (酸化鉄を全体に多量含む)
8. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密 (酸化鉄をわずかに含む)

0 2m

第3図 矢盛遺跡4次検出遺構(陥し穴状遺構)

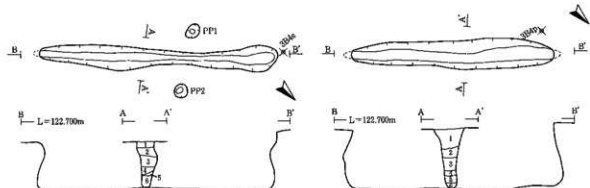


RD022 陥し穴状遺構

1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりやや密 (薄い黒山ブロックを少量含む)
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (黒山ブロックを20%含む)
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密 (黒山ブロックを30%含む)
4. 10YR5/6 黄褐色土 粘性あり しまり密 (黒褐色土のブロックをわずかに含む)
5. 10YR4/6 褐色細砂 粘性ややあり しまり密
6. 10YR1.7/1 黒色土 粘性强 しまり密 (黒山ブロックを10%含む)
7. 10YR4/4 褐色細砂 粘性强 しまりやや密

RD025 陥し穴状遺構

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (黒山ブロックを40%含む)
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (黒山ブロックを20%含む)
3. 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり しまり密 (黒褐色土のブロックを20%含む)
4. 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり しまり密
5. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密 (黒山ブロックを10%含む)
6. 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまり密



RD024 陥し穴状遺構

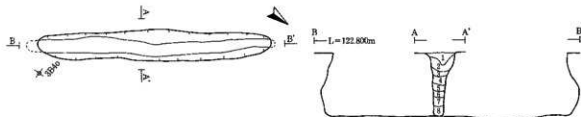
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり しまり密 (全体に薄く黒色土を含む)
2. 10YR2/1 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (黒褐色土と黒山ブロックを20%含む)
3. 10YR4/6 褐色細砂 粘性ややあり しまり密 (黒褐色土の塊か粒をわずかに含む)
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密 (黒山ブロックを10%含む)
5. 10YR3/5 黄褐色土 粘性あり しまり密 (壁の崩壊土)
6. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密

RD024 付録ピット 遺構詳細表

遺構名	口径(m)	深さ(m)
PP1	27×18	29.7
PP2	22×21	21.0

RD026 陥し穴状遺構

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (黒山ブロックを20%含む)
2. 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり しまり密 (黒山ブロックを40-50%含む)
3. 10YR4/4 褐色細砂 粘性ややあり しまり密
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密 (黒山ブロックを10%含む)
5. 10YR3/3 黒褐色土 粘性あり しまりやや密
6. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (黒山ブロックをわずかに含む)

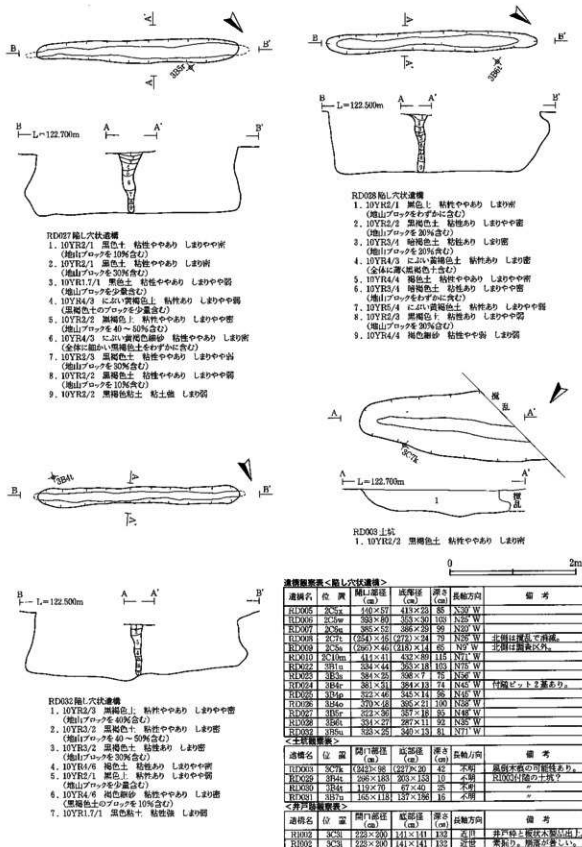


RD036 陥し穴状遺構

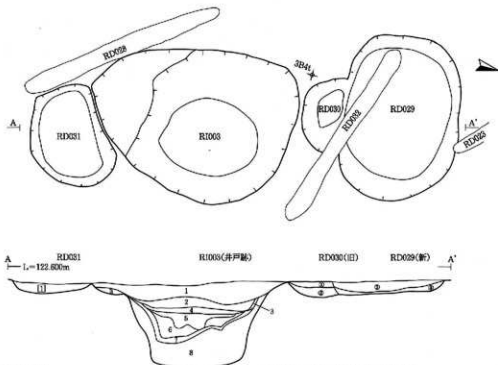
1. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまり密 (全体に薄く黒色土を含む)
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (黒山ブロックを30%含む)
3. 10YR5/4 黄褐色土 粘性ややあり しまり密 (黒褐色土のブロックをわずかに含む)
4. 10YR4/4 褐色細砂 粘性ややあり しまり密 (全体に薄く黒褐色土を含む)
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり しまり密 (黒山ブロックを30%含む)
6. 10YR4/6 褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (黒褐色土のブロックをわずかに含む)
7. 10YR2/2 黒褐色土 粘性强 しまりやや密
8. 10YR4/6 褐色細砂 粘性ややあり しまり密 (全体に薄く黒褐色土を含む)



第4図 矢盛遺跡4次検出遺構(陥し穴状遺構)



第5図 矢盛遺跡4次検出遺構(陥し穴状遺構・土坑)



R1003 井戸跡

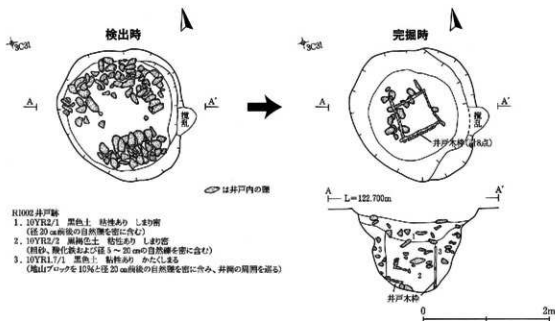
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性ややあり しまりやや密 (地山粒をわずかに含む)
2. 10YR2/2 黒褐色粘土 粘性強 みた(しまる (酸化鉄のブロックを疎らに含む))
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり みた(しまる (地山ブロックを20~30%含む))
4. 10YR1.7/1 黒色粘土 粘性強 しまりやや密
5. 7.5Y3/2 オリーブ黒色細砂 粘性ややあり しまり密 (全体がグライ化し、酸化鉄を全体に少量含む)
6. 10YR2/2 灰黄褐色細砂 粘性ややあり しまりやや密 (酸化鉄のブロックを10%含む)
7. 10YR2/8 明黄褐色細砂 粘性ややあり しまり密 (酸化鉄の塊層)
8. 10YR2/4 におい黄褐色細砂 粘性ややあり しまり密 (全体に酸化鉄のブロックを40%含む)

RD009 (3~4層)・RD003 (1~2層) 土坑

- ① 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりやや密 (地山ブロックを10%含む)
- ② 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (地山ブロックを40%含む)
- ③ 10YR1.7/1 黒色土 粘性ややあり しまりやや密
- ④ 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密 (地山ブロックを20%含む)

RD001 土坑

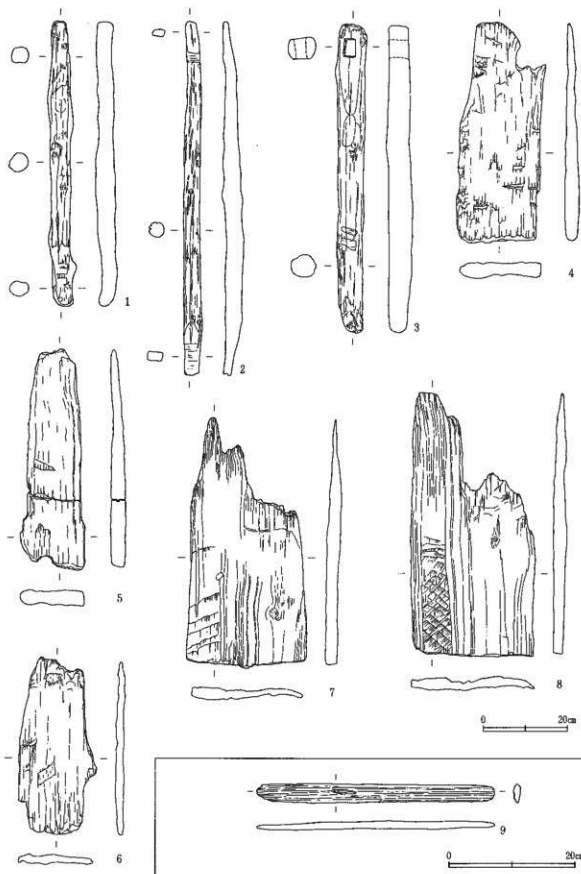
- ① 10YR1.7/1 黒色土 粘性ややあり しまりやや密 (地山ブロックをわずかに含む。区2~3cmの自然層を多く含む)



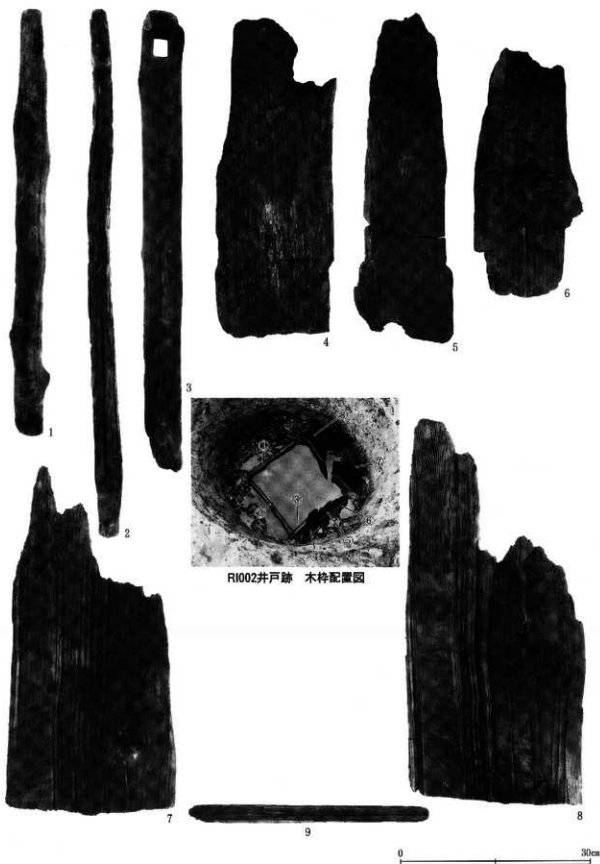
R1002 井戸跡

1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまり密 (径20 cm前後の自然層を密に含む)
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密 (細砂、酸化鉄および径3~20 cmの自然層を密に含む)
3. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり みた(しまる (地山ブロックを10%と径20 cm前後の自然層を密に含む、井筒の周囲を流る))

第6図 矢盛遺跡4次検出遺構(土坑・井戸跡)

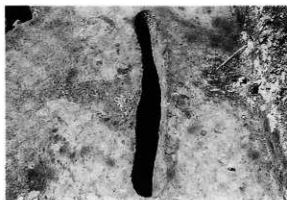


第7図 矢盛遺跡4次出土木製品(R1002井戸跡内)



R1002井戸跡 木枠配置図

写真図版 1 矢盛遺跡 4次出土木製品(R1002井戸跡内)



RD005平面



断面



RD006平面



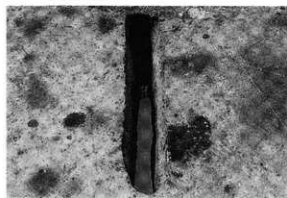
断面



RD007平面



断面



RD008平面



断面

写真図版 2 矢盛遺跡 4 次検出遺構(陥し穴状遺構)



RD009平面



断面



RD010平面



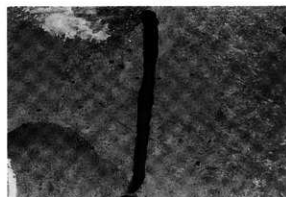
断面



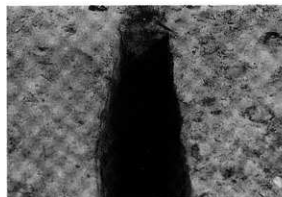
RD022平面



断面

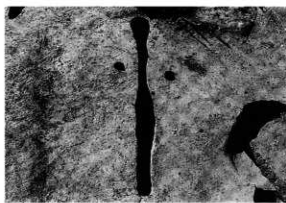


RD023平面

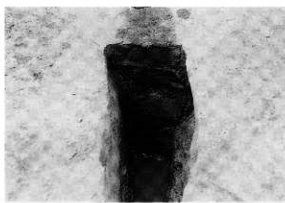


断面

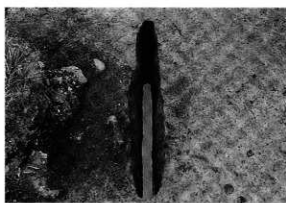
写真図版 3 矢盛遺跡 4 次検出遺構(陥し穴状遺構)



RD024平面



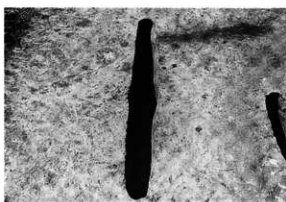
断面



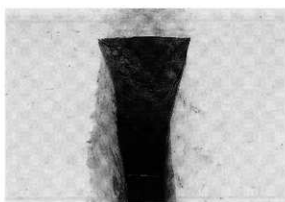
RD025平面



断面



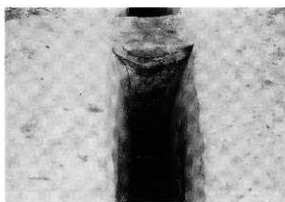
RD026平面



断面



RD027平面



断面

写真図版 4 矢盛遺跡 4 次検出遺構(陥し穴状遺構)



RD028平面



断面



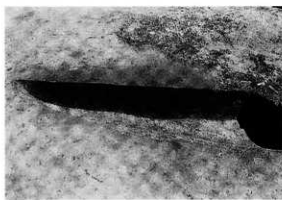
RD032平面



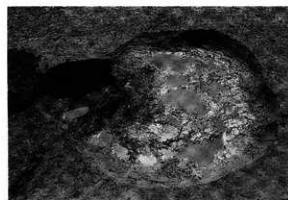
断面



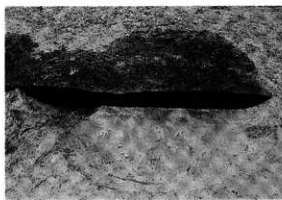
RD003平面



断面



RD029(右)・030(左)平面

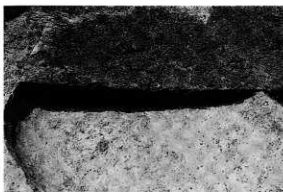


断面

写真図版5 矢盛遺跡4次検出遺構(陥し穴状遺構・土坑)



RD031平面



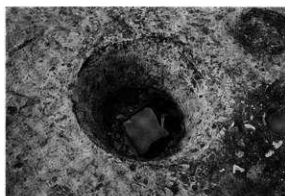
断面



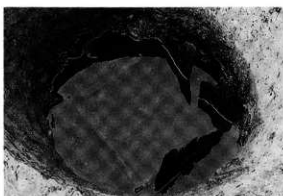
R1002検出状況



断面



完掘状況



井戸枠と湧水状況



R1003完掘状況



断面

写真図版 6 矢盛遺跡 4 次検出遺構(土坑・井戸跡)



調査前のようす



陥し穴状遺構の掘り下げ作業



台風6号による水害



復旧作業



完掘全景

写真図版7 矢盛遺跡4次調査風景

(44) ^{いなり}稲荷遺跡第5次調査

所在地 盛岡市本宮字稲荷12-1ほか
委託者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成14年8月1日～10月30日
調査対象面積 3,958㎡
発掘調査面積 12,181㎡
遺跡番号・略号 LE16-2131・OIN-02-5
調査担当者 半澤武彦・久慈泰彦
協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地地区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間で事業予定期間とし、面積313haを対象とした整理事業が継続中である。

事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い本調査の必要範囲を確定し、本調査は助岩手県文化振興事業団の受託事業として実施している。



遺跡位置

1:50,000 盛岡・日誌

稲荷遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成14年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市および御岩手県文化振興事業団の両者に通知された。これを受けた両者は平成14年4月1日御岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。実際の発掘期間は平成14年8月1日に着手され同年10月30日に終了した。

調査の結果、遺構・遺物ともわずかであったことから同年冬期間に整理を行い、当埋蔵文化財センター平成14年度調査略報に本報告として掲載した。(盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

2. 遺跡の立地

遺跡は、JR東北線盛岡駅の南西約2kmに位置し、雫石川南岸河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は125m前後で、調査前の土地利用状況は畑作地・果樹園・休耕地となっていた。概ね全体は平坦な地形であるが、本調査と合わせて試掘調査を実施した南側区域は段丘面の縁となっており、1~2m前後の高低差がある。北~北東側では今年度調査を行った熊堂B遺跡、および南東側は野古A遺跡(ともに奈良~平安時代の集落跡)と隣接している。

3. 遺跡の基本層序

調査区の基本層序は以下の通りであるが、宅地跡に残された基礎工事の痕跡やトラクターによる耕作痕、および栽培されていた果樹の根などによる攪乱等が随所で見られた。

I層 10Y R2/1 黒色土 粘性ややあり しまり密
(耕作土上層。根の攪乱を多く含む)

II-1層 10Y R1.7/1 黒色土 粘性ややあり しまりやや密
(耕作土下層。根の攪乱を一部に含む)

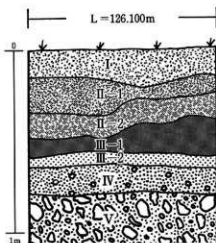
II-2層 10Y R2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密
(II-1層の漸移層)

III-1層 10Y R4/6 褐色土 粘性あり しまり密
(遺構検出面)

III-2層 10Y R4/6 褐色土 粘性あり しまり密
(細砂をわずかに含む。III-1層の漸移層)

IV層 10Y R4/4 褐色粗砂 粘性弱 しまり密 (径1~20cm程度の自然礫を密に含む)

V層 自然礫層 (遺跡周辺一帯に広がる自然礫の層)

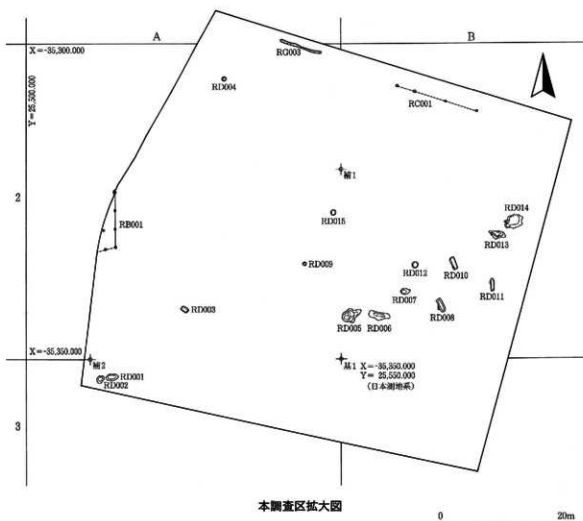
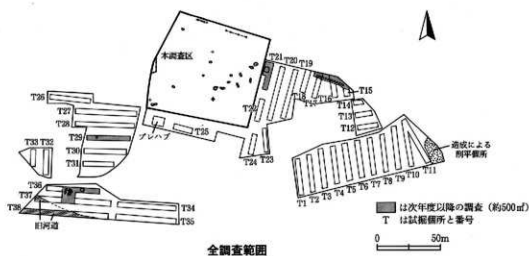


第1図 基本層序(南端中央)

4. 調査の概要と検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、古代を中心とした時期の墓塚と思われる土坑が3基、近世の土坑が1基、時期の不明な土坑が1基、溝跡が1条、近世のものと思われる掘立建物跡が1棟、柱穴列が1列となっている。

<古代の墓塚と思われる土坑> 本調査区の東側から墓塚と推定される3基の土坑が検出された。各土坑の軸方向は北~北西を示し、それぞれが4m前後の間隔をもちながらほぼ三角形に配置されている。3基のうち最も北西に位置するRD010土坑からは、検出面~埋土上層にかけて十和田a降下火山灰がほぼレンズ状に堆積する状況が確認された。いずれの遺構において出土遺物や木棺等の痕跡はないものの、隅丸長方形に掘り込まれた形状や掘り方埋土の存在と、近隣の遺跡(飯岡沢田遺跡第3次調査)から検出された墓塚と形態が類似していることなどから、古代の墓塚と推定している。



第2図 稲荷遺跡5次グリッド及び遺構配置図(全調査範囲及び本調査区拡大図)

<掘立柱建物跡> 本調査区の西端から4間×2間(暫定値)の掘立柱建物跡が検出された。柱間寸法等から近世の建物跡と推察されるが、大部分は調査区外である市道の下に延びており詳細は不明である。

<柱穴列> 本調査区の北端から全長13.3mにわたる4基の柱穴列が検出された。各柱穴の深さは8~15cm程度しかなく、上部は後年の削平を大きく受けたものと推定されるが、本来は4基以上が連なって存在していた可能性が高い。この柱穴列の1m北側には、近世~近代の遺物を多く含む埋立てられた段丘崖の縁が合わせて検出されていることから、段丘面と段丘崖を隔てる役割をもった区画の欄列であった可能性が考えられる。出土遺物はなく詳細は不明であるが近世以降のもつと推定している。

<溝跡> 本調査区の北西端付近から長さ13.7m、幅50~90cm、深さ15cmの溝跡が検出された。埋土は浅く遺構の両端部分も緩やかに消滅していることから、上部は後年の削平を受けているものと推定される。出土遺物はなく遺構の時期は不明である。

<その他> 遺物が出土した遺構としては、寛永通宝の破片が出土した近世のRD012土坑や、検出面付近から出土したために遺構に伴うものとは判断しにくい、縄文晩期~弥生初頭のものとして推定される土器(鉢の口縁部分)が出土したRD009土坑なども検出されているが、その他の土坑は不整形で時期を示すような遺物も些少なことから、詳細な遺構の時期や性格などは不明である。

<試掘調査について> 本調査区周辺の約8,200㎡について試掘調査が追加要請され、全域に3m幅で5m間隔のトレンチを38本設定し調査を行ったが、遺構配置図の網掛け部分を除き遺構は確認されなかった。

5. まとめと考察

本遺跡からは古代~近世の遺構が中心に検出されているものの、遺構の密度は総体的に薄く疎らに分布している状況が見られ、全く見られない空白域も存在する。

遺構の分布状況を時代毎に見てみると、墓墳を主体とする古代の遺構は調査区の中央~東寄りに分布し、近世の遺構は寛永通宝が出土しているRD012土坑や、北端段丘崖の縁に沿うRC001柱穴列、および西端の市道際から検出されたRB001掘立柱建物跡などで、他の遺構群とはやや離れた位置に分布している。

ほぼ中央部にあるRD009土坑からは、縄文晩期~弥生初頭のものとして推定される鉢の口縁部が出土しているが、検出面付近からの出土状況であったことから遺物と遺構の時期が一致する可能性は低い。古代の墓墳と推定される土坑は、1基の検出面付近に十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積していたことから、10世紀初頭以前に作られたものと考えられる。周辺に同時期の生活域の存在も想定されるが、現在明らかなものは、約15m東側の試掘区域から検出された平安時代の竪穴住居跡1棟(T21区から検出:次年度以降に調査予定)のみで、人々が定住していた様子をうかがわせるようなその他の遺構はほとんど見つからない。

本遺跡が分布する段丘面は周辺より一段高い高燥地にあり、北~北東側には1~2mの段丘崖をはさんだ低地に古代の竪穴住居跡が密に分布する熊堂B遺跡と隣接している。一見すると、氾濫による被害を受けにくい、高燥地である本遺跡の方に居住城が立地してもよさそうであるが、今回の調査結果を見る限りにおいて、居住城の跡がほとんど検出されない理由についての仮説を以下の通り挙げてみた。

- ①崇敬対象の森城は居住城に優先して、より水害を受けにくい土地を選んだうえで構築したのではない。
- ②全体的に遺構密度が薄いことから鑑みて、この地が高燥地であることから、居住城に優先する食糧確保のための耕作地として特化し利用されていたのではない。

今回の調査範囲は限られたものであり、仮説は筆者の推定に過ぎないものであるが、次第に周辺の調査が進むにつれて、時代毎の全体像や生活域の分布状況などがより明らかになってくるものと思われる。

なお、稲荷遺跡第5次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

1. 遺構観察表 <墓墳および土坑>

遺構名	位置	平面形	開口径(m)	縦深(m)	深さ(m)	長軸方向	備考(出土遺物等)
R D001	3A2h	楕円形	304×110	137×59	37	—	
R D002	3A2g	楕円形	128×98	80×63	25	—	
R D003	2A22m	隅丸長方形	117×79	97×51	14	—	
R D004	2A4q	円形	76×70	52×50	17	—	
R D005	2B22a	不整形円形	332×172	136×56	51	—	埋土内から石彫未成品出土。
R D006	2B22c	不整形円形	338×91	191×38	67	—	
R D007	2B21f	不整形円形	154×92	77×68	47	—	
R D008	2B22i	隅丸長方形	222×81	175×45	34	N 28° W	壁面は内側にやや円錐して掘り込まれる。
R D009	2A18w	円形	56×58	41×37	48	—	掘出前から縄文晩期～弥生初期の土器片(鉢)が出土。
R D010	2B18i	長方形	198×80	166×57	32	N 35° W	十有田を横断面を含む。
R D011	2B20n	隅丸長方形	203×57	166×39	18	N 0°	他の2基と比較して規模は小さく、やや不整形である。
R D012	2B12g	円形	92×95	82×56	10	—	古寛永・鉄釘?各1点出土。
R D013	2B16a	不整形円形	209×96	161×54	48	—	
R D014	2B10a	不整形円形	308×197	200×162	54	—	
R D015	2A14y	円形	86×87	68×76	12	—	

2. 出土遺物観察表

<土器>

No	出土遺物名	層位	器種	口径(m)	径深(m)	器高(m)	備考
1	R D009	埋土上段	深鉢	29.8	—	1.1	口縁部付近が浅型(約3cm)で穿孔される。縄文晩期～弥生初期?

<石器>

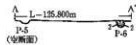
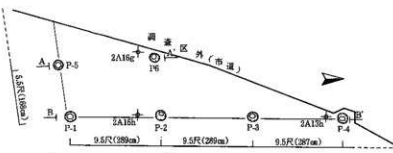
No	出土遺物名	層位	分類	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	石材	産地	備考
2	R D005	埋土下位	石輪?	5.1	6.4	0.9	30.6	頁岩	北上山地?	未成品

<陶磁器>

No	出土遺物名	層位	種類	器種	年代	保存状況
3	北端段丘壁	埋土内	肥前	皿	18世紀	底面
4	北端段丘岸	埋土内	肥前	鉢	19世紀	口縁部
5	北西端区域(試掘)	表土	波佐見?	鉢?	17～18世紀	底面
6	北西端区域(試掘)	表土	肥前	蓋かまたは火入れ?	18世紀	口縁部
7	北東端区域(試掘)	表土層乱部	肥前	皿	18世紀	底面
8	南側中央区域(試掘)	表土	肥前	蓋?	18世紀	底面

<鉄製品>

No	出土遺物名	層位	種類	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	備考
9	R D012	埋土中段	古寛永	(2.1)	(1.3)	0.1	0.7	一部のみ出土。
10	R D012	埋土中段	釘?	3.0	0.5	0.3	1.1	細い棒状の鉄製品。

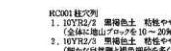
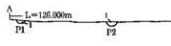
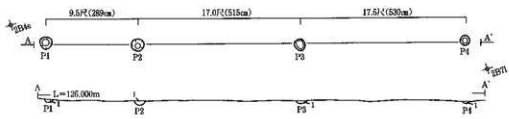


- RB001 掘立柱建物跡
- 10YR2/3 黒褐色土 粘土や中り しまりや中密 (堆山プロットを5~10%含む)
 - 10YR3/4 暗褐色土 粘土や中り しまり密 (褐色細砂を20~30%含む)

RB001 掘立柱建物跡 遺構概要表

遺構名	口径 (cm)	深さ (cm)
P1	25×32	28
P2	25×32	38
P3	35×30	26
P4	32×32	20
P5	32×30	8
P6	32×26	22

調査区外 (断面線の線)

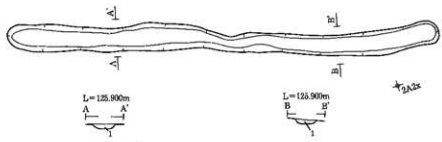


- RC001 柱穴列
- 10YR2/2 黒褐色土 粘土や中り しまりや中密 (全土に堆山プロットを10~20%含む)
 - 10YR2/3 黒褐色土 粘土や中り しまりや中密 (細かな自然礫と褐色細砂を多く含む)

RC001 柱穴列 遺構概要表

遺構名	口径 (cm)	深さ (cm)
P1	42×38	9
P2	42×38	15
P3	38×34	9
P4	32×30	8

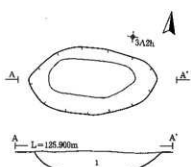
調査区外 (断面線の線)



- RG003 溝跡
- 10YR2/3 黒褐色土 粘土や中り しまり密 (堆山プロットを10~30%含む)

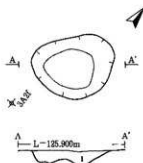


第3図 稲荷遺跡5次検出遺構(掘立柱建物跡・柱穴列・溝跡)



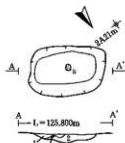
RD001 土坑

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (全体に粗砂を30%含む)



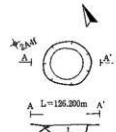
RD002 土坑

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (全体に粗砂を30%含む)



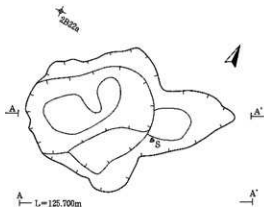
RD003 土坑

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密 (地山ブロックを30%含む。覆り方角1?)



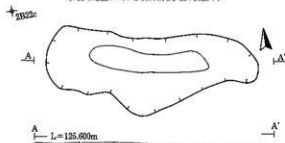
RD004 土坑

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (地山ブロックを10%含む)



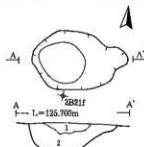
RD005 土坑

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (全体に細かな地山ブロックを40%と、部に灰化物件をわずかに含む)
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密 (全体に地山ブロックを50%含む)
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりやや密 (全体にうすく褐色土を含む)
4. 10YR5/6 黄褐色土 粘性強 しまり密 (細砂と黒色のブロックを10%含む。斜り方角上?)
5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (大きな地山ブロックを30%含む。斜りの傾斜?)



RD006 土坑

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (全体にうすく褐色土と粗砂を含む)
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまり密 (一部に地山ブロックを含む)
5. 10YR4/6 褐色土 粘性あり しまり密 (全体に黒褐色土のブロックを50%含む。覆り方角1?)

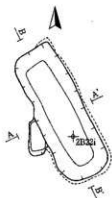


RD007 土坑

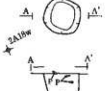
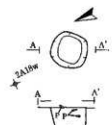
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密 (地山ブロックを10%含む)
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり かつらしまり密 (全体に細かな地山ブロックを40~50%含む)



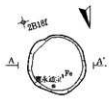
第4図 稲荷遺跡5次検出遺構(土坑)



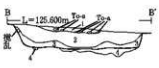
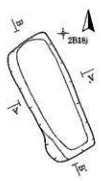
- RD008 基壇**
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密
(一般に径 0.5~2cm の自然礫を少量含み、全体にうすく褐色土を含む。埋蔵深?)
 2. 10YR4/4 褐色土 粘性あり しまり密
(全体に細かな地山礫を含み、覆の方層上)
 3. 10Y2/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密
(埋の覆土?)



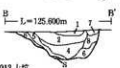
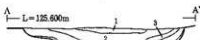
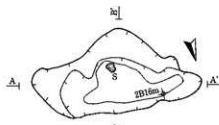
- RD009 土坑**
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり かつくしまる
(細砂の地山ブロックを 20~30%含む)



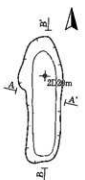
- RD012 土坑**
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密
(全体に地山ブロックを 30%含む)
 2. 10YR4/6 褐色土 粘性ややあり しまり密
(黒褐色土のブロックを 10~20%含む。覆の方層土または上村礫?)



- RD010 基壇**
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密
(覆土面付近に黒色土のブロックを縁らに含み、一部に十和田aのブロックを含む)
 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密
(全体にうすく黒褐色土を含み、一部に地山ブロックを含む)
 3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり かつくしまる
(全体に細かい地山ブロックを 30%含む。覆の方層土の一部?)
 4. 10YR4/6 褐色土 粘性あり かつくしまる
(黒褐色土のブロックをまじらに含む。覆り方層土)



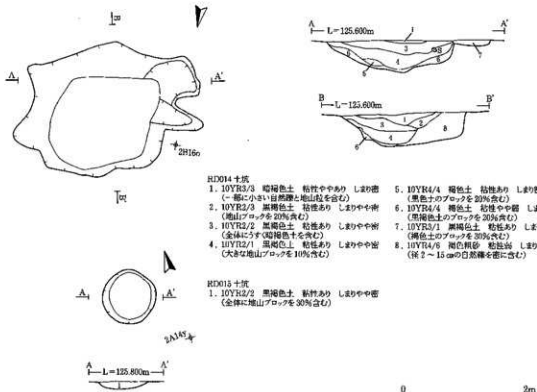
- RD013 土坑**
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまり密
(黒色土の大きなブロックを含む)
 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりやや密
(全体に粗な地山礫を 10%含む)
 3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり しまりやや疎
(地山ブロックをわずかに含む)
 4. 10YR2/1 黒褐色土 粘性あり しまりやや密
(一部に地山ブロック、うすく黒褐色土を含む)
 5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまり密
(地山ブロックを 20%含む)
 6. 10YR4/4 褐色土 粘性あり しまり密
(黒褐色土のブロックを 10%含む。覆の方層土?)
 7. *、木の根の覆土?



- RD011 基壇**
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまり密
(地山ブロックを 10%含む)
 2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり しまり密
(地山ブロックを 20%含む。覆の方層土)



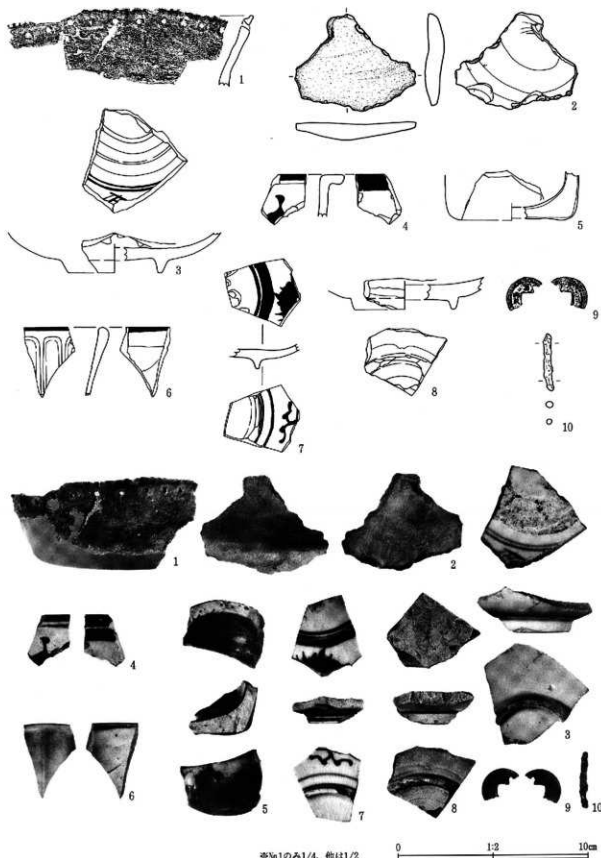
第5図 稲荷遺跡5次検出遺構(基壇・土坑)



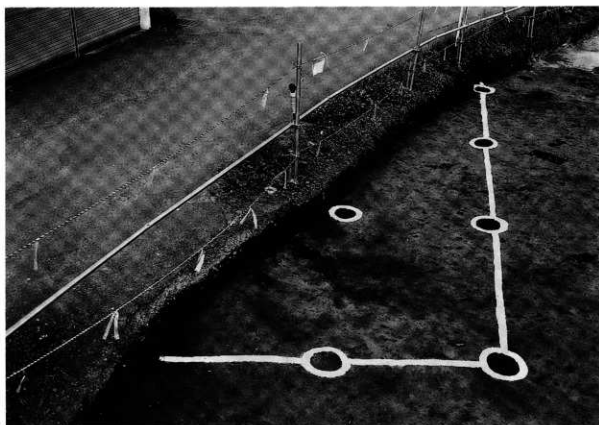
第6図 稲荷遺跡5次検出遺構(土坑)

報告書抄録

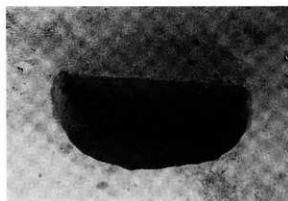
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかさいはくつちょうさりゃくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第423集							
編著者名	半澤武彦							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
稲荷遺跡 (第5次調査)	岩手県盛岡市 本宮字稲荷 12-1	03201	LE16 -2131	39度 40分 50秒	141度 07分 45秒	20020801 ~ 20021030	12,181㎡	盛岡南新都市 計画整備事業 に伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
稲荷遺跡 (第5次調査)	村落跡	古代・ 近世	古代:墓塚(3基) 近世:掘立柱建物 跡(1棟)・柱穴列 (1列)・土坑(1 基)時期不明:土 坑(11基)・溝跡 (1条)	土器1点(縄文晩 期~弥生初頭)・ 石器1点(石匙未 成品)・陶磁器・ 寛永通宝・鉄製品		遺構は、時期毎にやや偏っ て分布するが、全体的に 密度は薄い傾向が見られ る。		



第7図・写真図版1 稲荷遺跡5次出土遺物



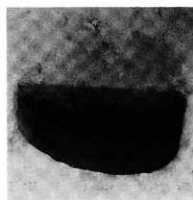
RB001掘立柱建物跡全景(南東から)



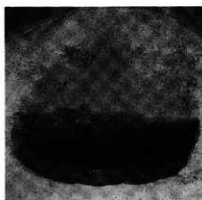
P1断面



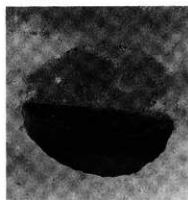
P2断面



P3断面

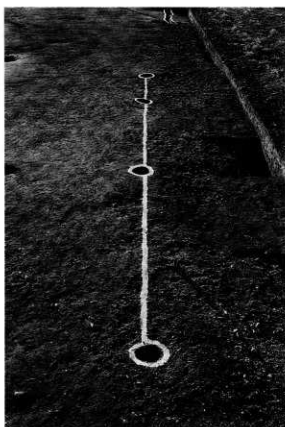


P4断面



P6断面

写真図版2 稲荷遺跡5次検出遺構(掘立柱建物跡)



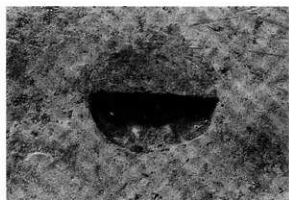
RC001
←柱穴列全景
(東から)



P1断面



P2断面

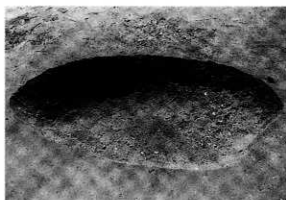


P3断面



P4断面

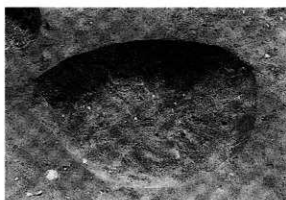
写真図版 3 稻荷遺跡 5次検出遺構(柱穴列)



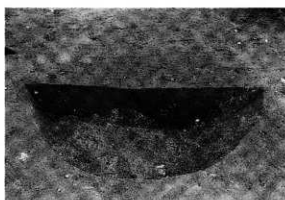
RD001平面



断面



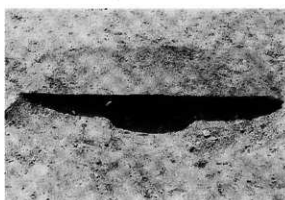
RD002平面



断面



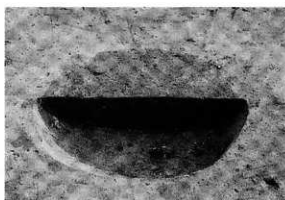
RD003平面



断面



RD004平面



断面

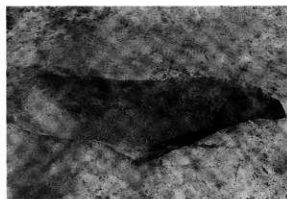
写真図版 4 稻荷遺跡 5 次検出遺構(土坑)



RD005平面



断面



RD006平面



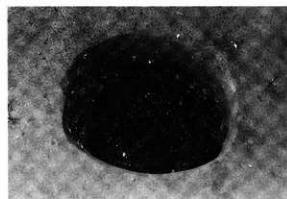
断面



RD007平面



断面



RD009平面



断面

写真図版 5 稲荷遺跡 5 次検出遺構(土坑)



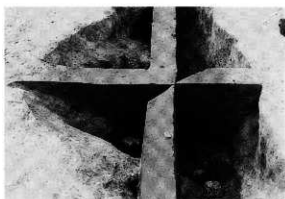
RD012平面



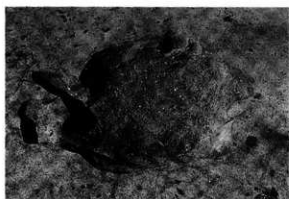
断面



RD013平面



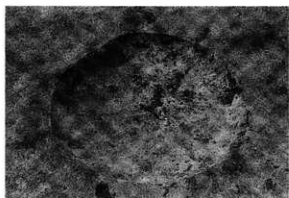
断面



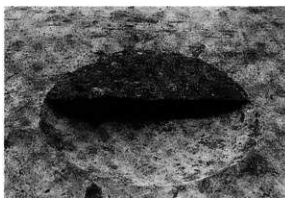
RD014平面



断面



RD015平面



断面

写真図版 6 稲荷遺跡 5 次検出遺構(土坑)



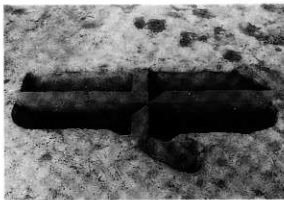
RD008墓墳検出状況



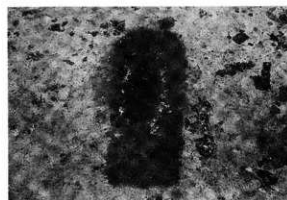
断面①



完掘



断面②



RD010墓墳検出状況



断面①



完掘



断面②

写真図版7 稲荷遺跡5次検出遺構(墓墳)



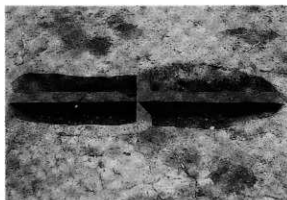
RD011墓検出状況



断面①



完 観



断面②



十和田a降下火山灰の検出状況



微細な遺物の確認作業



実測風景

写真図版 8 稲荷遺跡 5 次検出遺構(墓墳)・作業風景



RG003溝跡全景(東から)



東ベルト断面



西ベルト断面



完掘全景(南から)

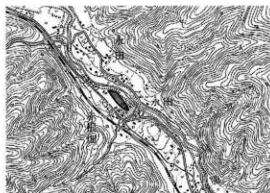


本調査区全景(↑北)

写真図版9 稲荷遺跡5次検出遺構・全景

(45) ^{ながた}永田Ⅲ遺跡

所在地	下閉伊郡新里村刈屋第1地割 赤根畑23-12ほか
委託者	宮古地方振興局土木部
事業名	一般国道340号線道路改築事業
発掘調査期間	平成14年8月9日～10月17日
調査対象面積	3,800㎡
発掘調査面積	3,800㎡
遺跡番号・略号	LF29-0161・NT-02
調査担当者	亀 大二郎・小林弘卓・藤原大輔
協力機関	新里村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中川井

1. 調査に至る経過

永田Ⅲ遺跡は、一般国道340号和井内地区道路改築事業の実施に伴い、その事業区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

本事業実施地区は、一般国道340号線の新里村に位置し、北上高地を縦断する主要な幹線の一つであるにもかかわらず、現在1車線しかなく、大型貨物車両だけでなく一般車両のすれ違いにも支障をきたしている。また、歩道が設置されている区間もごく一部で、歩行者の安全も計られていない状況にある。このため、これらの交通障害を解消し、交通の安全と円滑な流れを確保するため、現在の1車線を2車線とするものであり、平成9年度から事業執行中である。

当該事業の実施に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、宮古地方振興局土木部から平成9年12月に岩手県教育委員会に対し分布調査の依頼をしたのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成10年4月21日に分布調査を実施したが、この調査では、永田Ⅲ遺跡を含まない8遺跡の存在について平成10年6月15日付け教文第345号により回答された。

この後、念のため平成12年9月に新里村教育委員会に照会を行ったところ、新規の埋蔵文化財包蔵地（永田Ⅲ遺跡、平成12年10月13日調査実施）が発見された旨、平成12年10月19日付け新教第399号により通知された。これに伴い、岩手県教育委員会の要請により平成12年12月18日～19日に試掘調査を実施した結果、平成13年1月4日付け教文第1174号で発掘調査が必要である旨通知があったことから平成13年度に岩手県教育委員会と宮古地方振興局で協議を行い、発掘調査を㈱岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることにした。

(宮古地方振興局土木部)

2. 遺跡の立地

永田地区は新里村刈屋の北端に位置し、和井内と隣接している。標高が500～600mある山並みに東西を挟まれ、ほぼ中央を閉伊川支流の刈屋川が流れている。本遺跡は、永田地区西側山裾の田畑が段状に連なった緩やかな斜面下にある。河岸段丘上に立地しており比較的平坦なところにあるが、南側は近くを沢が流れていて一段低くなっている。

3. 基本層序

調査区中央の基本層はほぼ次の通りで、中央から離れるほど層の数が減少していく。B区北側は表土下VI層の黒褐色土が続いており、A・D区は表土下がVII層（砂礫層）になる。本来の地形は、中央部が窪んでいたと考えられる。

I a層：10Y R 4/3にぶい黄褐色土 しまり強 粘性あり 水田耕作土（表土）

I b層：7.5Y R 5/8明褐色土 しまり強 粘性あり 水田床土（表土）

II 層：10Y R 3/3暗褐色土 しまり強 粘性あり

III a層：10Y R 4/4褐色土 しまり強 粘性あり

III b層：10Y R 4/4褐色土 しまり強 粘性あり 炭化物を粒状に少量含む

IV 層：10Y R 2/3黒褐色土 しまり弱 粘性あり

V 層：10Y R 4/4褐色土 しまり強 粘性あり

VI 層：10Y R 2/3黒褐色土 しまり強 粘性あり

VII 層：5 Y 4/3暗オリーブ色砂質土もしくは砂礫層（段丘の基盤を成す層） しまり・粘性なし

4. 調査の概要と検出遺構

大別すると表土下からIII b層上面にかけて、およびV層からVII層上面にかけて2度検出を行っている。それぞれの検出において確認された遺構は、次の通りである。

（第一検出：表土下～III b層上面）

<土坑> 土坑9基をC区のIII a層上面で検出している。9基のうち2基（2・8号土坑）からは弥生中期から後期にかけてと思われる土器片（1・2）が出土している。また、廃棄焼土や焼け跡の残る跡も出てきており、蒸し焼き後の不要物を捨てていた可能性がある。1・4号土坑は土器片が何点か出土しているが、形状や埋土の状態から雨裂穴と思われる。

<焼土遺構> C区III a層上面で検出した1号焼土は比較的良好な焼成状態であった。一方B区III b層上面で検出した焼土はほとんどがブロック状に分かれており、廃棄焼土かあるいは現地性のものが割れやすい土質の影響で散らばったものと思われる。

<炭窯> 炭窯5基は表土下から検出しており、比較的新しい時代（近世以後）の遺構と思われる。平面の形状は円形、楕円形、隅丸方形と様々で、大型のものはない。遺物は、5号炭窯から断面方形の釘（37）が出土している。

（第二検出：V～VII層上面）

<住居跡> B区北西側のVII層（砂礫層）が一段高くなっている部分で石囲いを検出している。壁面が不明で規模の詳細は分らないが、かを囲むように柱穴（P1・P2）および土坑（Pit1）があり、住居跡と認定した。炉の大きさは80×60cmで、中央には厚さ5mm程度に焼けた砂が残っていた。土器は出土しておらず、時期は推定できない。

<土坑> B区で5基、C区で1基検出している。いずれも出土遺物はなく、時期は不明である。

<陥し穴状遺構> 調査区ほぼ中央のVII層上面で検出している。その形状から人為的に作られたと考えられるが、逆茂木痕もなく陥し穴として利用していたかは不明である。

<焼土遺構> 2号焼土をB区のV層上面で検出している。焼成状態は良好で範囲が広く、比較的長期間使用していたと思われる。

<柱穴状ビット> B区北端で不規則に並んだ柱穴状ビットを検出している。埋土の状態は新しく、近・現

代に作られたものがⅦ層まで達していた可能性が高い。

5. 出土遺物

遺物は土器片が大コンテナ2箱半、石器・石製品、陶磁器片・鉄製品が数点である。土器は第一検出の際は縄文晩期から弥生後期にかけて、第二検出の際には縄文中期末から縄文後・晩期にかけてと思われるものが出土している。なお、B区北側のⅦ層直上付近から弥生土器と思われるものが出土しているのは、土砂崩れ等による擾乱が原因と考えられる。石炭4点のうち3点(32~34)はC区南側のⅦ層直上でまとまって出土している。材質は1点が珪質頁岩・2点がメノウで、大きさ・形状とも良く似ている。

6. まとめ

出土した土器の多くが周りに礫を伴っているのは土砂とともに流れ込んできた為と思われる。現地性の焼土や人為的土坑も数基検出しているが、規模・大きさから見て一時的に使用した遺構の可能性が高く、定住地区としては一段上の面が予想される。土器の時期は縄文中期末から弥生後期にかけてと幅広く、今回調査した地区の山側に長期に渡って生活空間があったと推察する。

表土下から検出した炭灰や鉄製品、陶磁器類は、近くで江戸時代末に鉄を採取していたことが文献にあり、その頃の遺構・遺物と思われる。

なお、永田Ⅲ遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

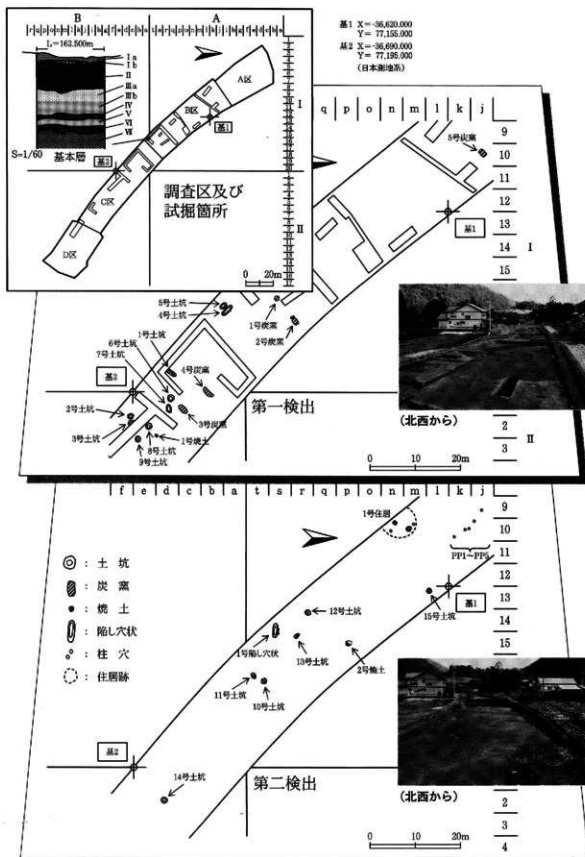
(凡 例)

遺構図版中における焼土・炭化物の分布範囲及びグリッド表現については、次の凡例を参照して頂きたい。

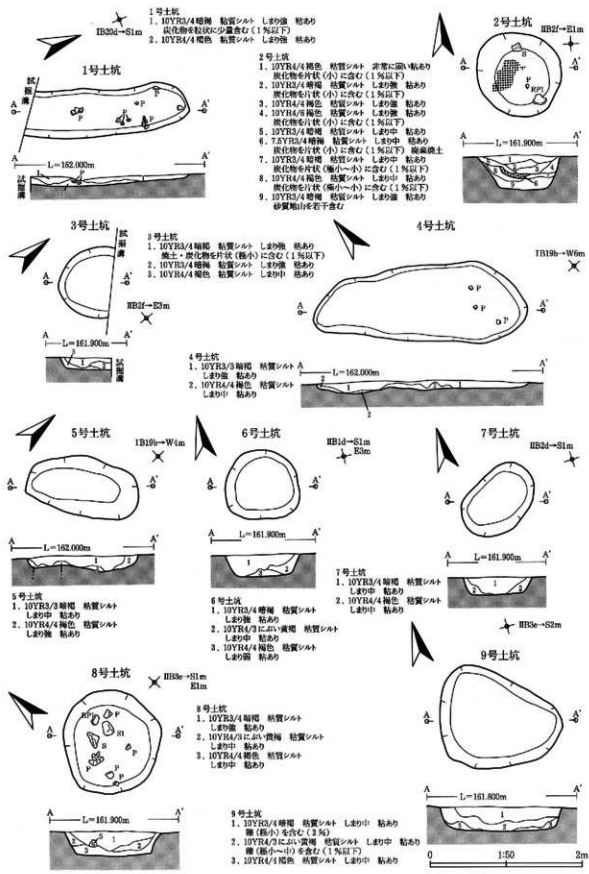
- 焼土・炭化物 ■■■: 焼土 ▨: 炭化物
○グリッド表現 I A4c→S2m・W3m: I A4cグリッドから南(S)に2 m、西(W)に3 mの位置

報告書抄録

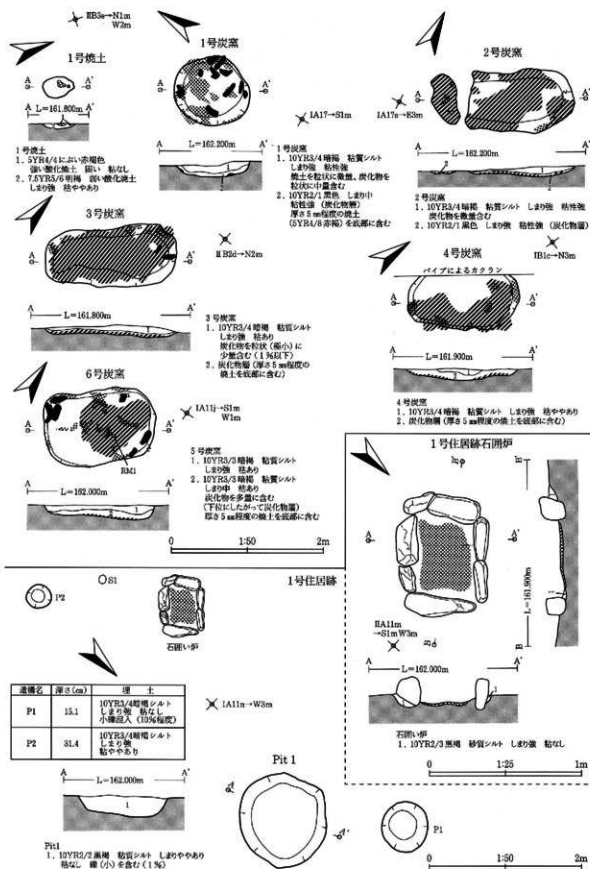
ふりがな	いわてけんまいぞうふんかざいはくつちょうざりゃくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第423集							
編著者名	亀大二郎							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃			
永田Ⅲ遺跡	岩手県下閉伊郡新里村刈屋第1地割赤根畑23-12他	03486	L F 29 —0161	39度 40分 00秒	141度 44分 00秒	20020809 ～ 20021017	3,800㎡	一般国道340号線道路改築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
永田Ⅲ遺跡	散布地	縄文・弥生時代 近世・近代	住居跡 土坑 陥し穴状遺構 焼土遺構 炭灰跡 柱穴	1棟 15基 1基 2基 5基 5基	縄文・弥生土器 石器(石鎌・磨石等) 陶磁器 鉄製品(鉄鎌・釘)	時期不明の土坑を含む		



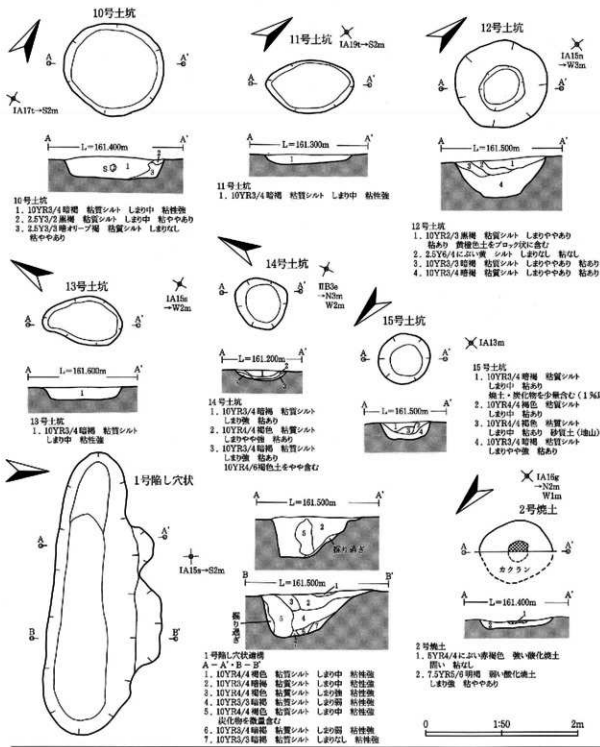
第1図 永田Ⅲ遺跡遺構配置図



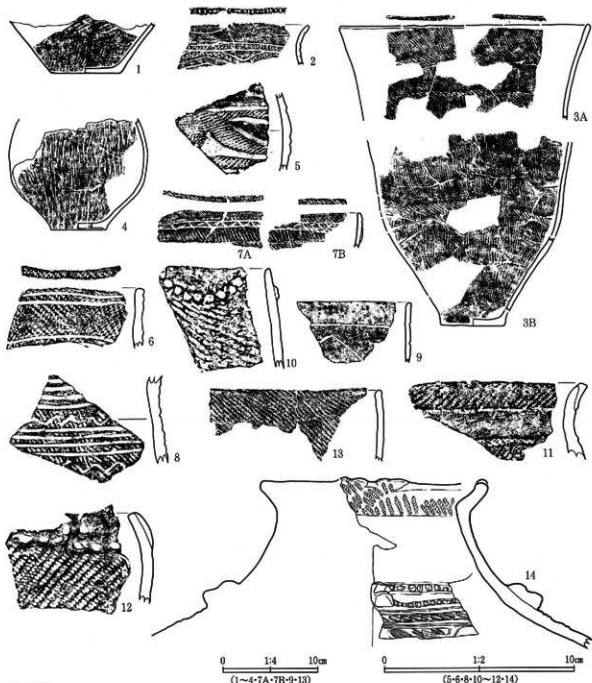
第2図 永田皿遺跡検出遺構(1)



第3図 永田Ⅲ遺跡検出遺構(2)



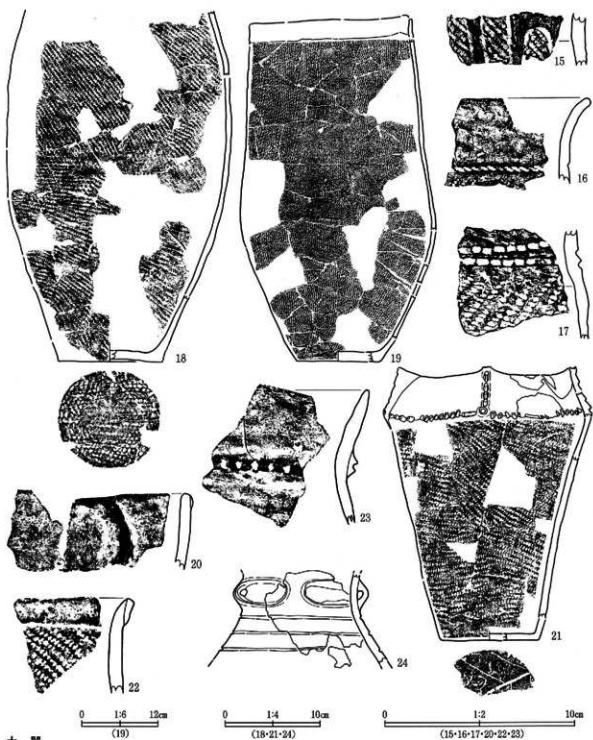
第4図 永田Ⅲ遺跡検出遺構(3)



土 器

No.	出土地点	層位	器種	部分	形状	特徴	時期	図版	写真
1	2号土坑	埋土	鉢	口縁部	L形斜め	胎土に砂を含む<2号土坑P1>	弥生前期	1/4	1/4
2	8号土坑	埋土	壺	口縁~胴部	L形直	口縁部彩色文、口縁に斜目、胴部に沈線・斜目<8号土坑P1>	弥生中~後期	1/4	1/2
3A	1A-16a	墓層上	深鉢	口縁~胴部	RL斜め	口縁に縄文、3Aと同一個体	弥生中~後期	1/4	1/4
3B	1A-16a	墓層上	深鉢	胴部~底部	RL斜め	3Aと同一個体	弥生中~後期	1/4	1/4
4	1A-16a	墓層上	壺	胴部~底部	RL斜め	橋本状?	弥生中	1/4	1/4
5	B区・T1	B層下	壺?	胴部	L形斜め	磨消縄文(彩色文?)	大槌C2	1/2	1/2
6	B区・T1	B層下	鉢	口縁~胴部	RL直	口縁に縄文、沈線	弥生後期?	1/2	1/2
7A	B区	墓層上	鉢	口縁~胴部	RL斜め	RL斜め	弥生前期	1/4	1/2
7B	B区・T5	墓層上	鉢	口縁	RL斜め	口縁に縄文、沈線間に交互斜突目	弥生前期	1/4	1/2
8	1A-11a	B層下	深鉢?	胴部	RL直	口縁に縄文、沈線間に交互斜突目、下の沈線が?に分かれる	弥生後期?	1/4	1/2
9	1A-15f	埋土層上	深鉢	口縁~胴部	RL直	沈線、山形文?	弥生後期?	1/2	1/2
10	1A-15f	埋土層上	深鉢?	口縁~胴部	L形直	口縁に磨消状縁等で囲まれた磨消縄文区画がある	縄文後期初期	1/2	1/2
11	B区	B層	深鉢	口縁~底部	RL直	折返し口縁、底部彩色文、器体押平文	弥生中~後期	1/2	1/2
12	B区	B層	深鉢	口縁~胴部	RL直	口縁部彩色文、底部磨消状突	大木10	1/2	1/2
13	B区	V層?	深鉢	口縁~胴部	RL直	胎土に砂を含む	大槌C1orC2	1/4	1/2
14	B区	V層	壺	口縁~胴部	RL直	磨消縄文、口縁・胴部にB突縁、沈線間に彩色文、磨消縄文	大槌C2	1/2	1/4

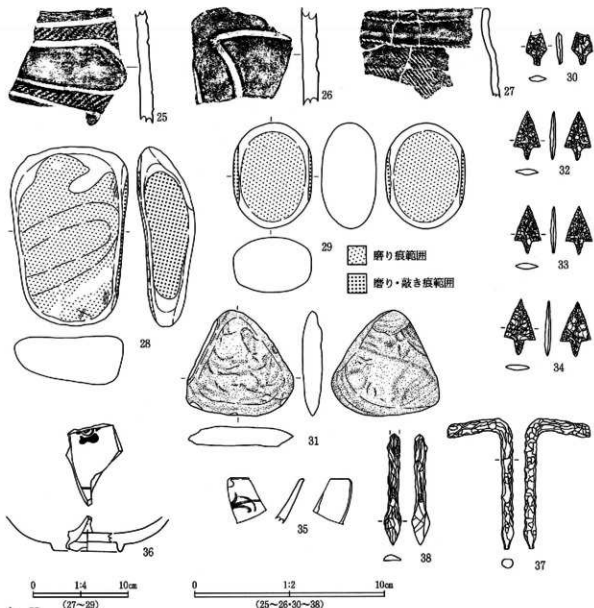
第5図 永田Ⅲ遺跡出土遺物(1)



土器

No.	出土地点	層位	器種	形状	取体	特徴	時期	原寸	写寸
15	B区	V層	深鉢	胴部	I区破	波線、尖稜文	大木5	1/2	1/2
16	B区	V層	深鉢	口縁～胴部		口縁部無文様・埋部原形押注文	縄文後期前半	1/2	1/2
17	B区	V層下	甕	胴部	II区破	胴部心付線刻突2条	弥生	1/2	1/2
18	B区北西側	V層	深鉢	胴部～底面	I区破割れ	底面心付代刺	縄文中期末	1/4	1/6
19	B区北西側	V層	深鉢	口縁～底面		口縁部無文、押注文	縄文中期末	1/6	1/6
20	B区北西側	V層直上	深鉢	口縁		跡部	大木10	1/2	1/2
21	B区北西側中	V層	深鉢	口縁～底面	II区破割れ	胴部埋部突、底面木蓋刺	縄文後期前半	1/4	1/6
22	II B-1 c	V層直上	深鉢	口縁～胴部	I区破	折返し口縁	縄文後期前半～前半	1/2	1/2
23	II B-1 c	V層直上	深鉢	口縁～胴部		口縁無文、胴部埋部・削突	大木10	1/2	1/2
24	II B-1 c	V層直上	蓋	口縁～胴部		埋部突起、沈部	縄文後期前半～前半	1/4	1/4

第6図 永田Ⅲ遺跡出土遺物(2)



土器

No.	出土地点	層位	器種	形状	部位	質地	特徴	時期	図版	写真
25	B-B-1-d	埴輪遺土	埴輪	胴部	1.口縁	砂漏区画の遺文		大木山	1/2	1/2
26	B-B-2-c	埴輪	胴部		1.口縁	砂漏、24名同一個体?		亀ヶ谷御前池-1号墓	1/2	1/2
27	B-B-3-g	埴輪上	埴輪	口縁~胴部	1.口縁	口縁から3.5cmほど幅文帯、胴部押入文		亀ヶ谷御前池-1号墓	1/4	1/2

石器

No.	出土地点	層位	器種	長さ(m)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考	図版	写真
28	8号土坑	埋土	凹石・磨石	19.0	12.3	6.1	2027.3	砂岩(北上山塊)	溝・磨痕<8号土坑S1>		1/4	1/4
29	1号住跡	床土	磨石	11.2	8.4	5.8	652.3	花崗岩(北上山塊)	2面に磨痕<1号住跡S1>		1/4	1/4
30	C1区	耳環	石環	(L7)	1.1	0.3	0.6	褐色片岩(常陸小野)	凸縁有茎、刃・茎部欠損		1/2	1/2
31	C1区	石環	石製品	5.6	5.0	1.1	48.4	カヤツルメス(北上山塊)	板状?		1/2	1/2
32	B-B-2-d	埴輪遺土	石環	2.6	1.4	0.3	0.7	珉質頁岩(奥羽山塊)	平縁有茎		1/2	1/2
33	B-B-2-d	埴輪遺土	石環	2.5	1.4	0.3	0.6	メノウ(奥羽山塊)	平縁有茎		1/2	1/2
34	B-B-2-d	埴輪遺土	石環	2.9	1.8	0.3	0.8	メノウ(奥羽山塊)	平縁有茎		1/2	1/2

陶磁器

No.	出土地点	層位	器種	形状	部位	口径(cm)	高さ(cm)	胎質等	産地	特徴	年代	図版	写真
35	S104号区	耳環上	磁器	環	口縁			染付	肥前		18c	1/2	1/2
36	B区	耳環遺土	磁器	環	底部	3.8	(1.9)	染付	肥前	コンキヤナ印判	18c	1/2	1/2

鉄製品

No.	出土地点	層位	器種	長さ(m)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴	備考	図版	写真	
37	5号塚家	灰化層上	釘	6.9	3.5	0.5	8.7	断面方形	<5号塚家RM1>		1/2	1/2
38	C4区	赤土層上	鏝	(5.5)	0.9	0.25	5.0	納溝欠損	深見層埋土		1/2	1/2

第7図 永田Ⅲ遺跡出土遺物(3)



2号土坑 平面



2号土坑 断面



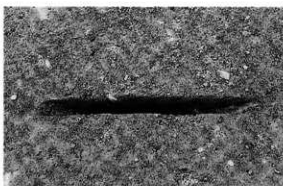
8号土坑 平面



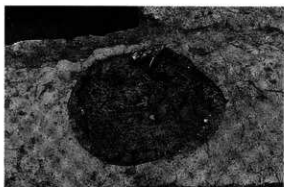
8号土坑 断面



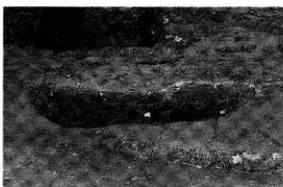
1号烧土 平面



1号烧土 断面

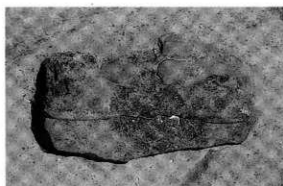


1号炭蒸 平面



1号炭蒸 断面

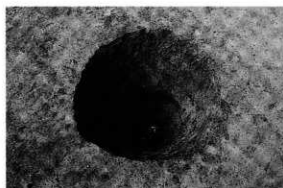
写真図版1 永田Ⅲ遺跡検出遺構(1)



5号炭窯 平面



5号炭窯 断面



12号土坑 平面



12号土坑 断面



1号陥し穴状遺構 平面



1号陥し穴状遺構 断面

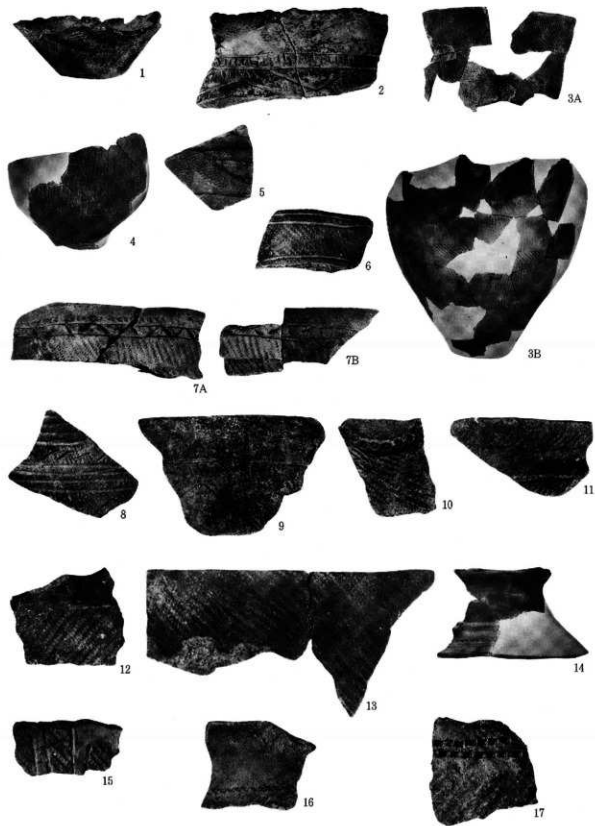


1号住居跡

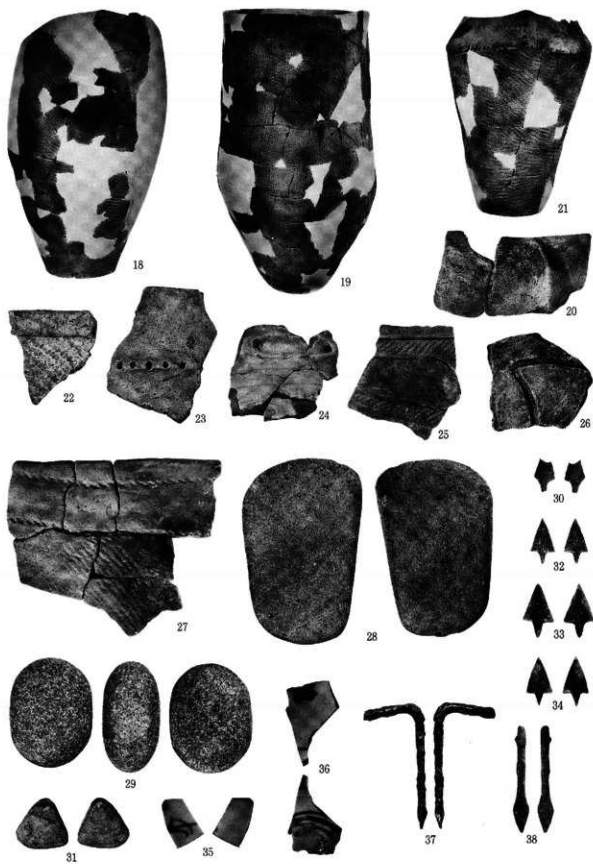


1号住居跡及びB区北端柱穴群

写真図版 2 永田Ⅲ遺跡検出遺構(2)



写真図版3 永田Ⅲ遺跡出土遺物(1)



写真図版 4 永田Ⅲ遺跡出土遺物(2)

なかつちおち
(46) 中土淵遺跡

所在地 遠野市土淵町土淵第8地割字中土淵161
委託者 遠野地方振興局遠野農村整備事務所
事業名 県営ほ場整備土淵地区(担い手育成区画整理型)
発掘調査期間 平成14年9月17日～10月30日
調査対象面積 1,600㎡
発掘調査面積 1,600㎡
遺跡番号・略号 MF46-0500・NTB-02
調査担当者 阿部孝明・吉田充・小林弘卓
協力機関 遠野市教育委員会

1. 調査に至る経過

中土淵遺跡の発掘調査は、遠野地方振興局のは場整備事業(担い手育成区画整理型)に先立ち、その事業区域内に所存する埋蔵文化財の発掘調査とその記録保存を図ることを目的として実施したものである。中土淵地区の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施し、その結果に、基づいて(遠野地方振興局遠野農村整備事務所)と協議を行い発掘調査を姉岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託業務とすることとなった。



遺跡位置

1:50,000 遠野

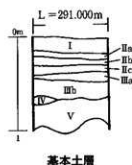
2. 遺跡の立地

中土淵遺跡はJR釜石線遠野駅より北東に約4km離れたところに位置する。西の八幡山(408m)と東の下山(363m)に挟まれ、その間を五日市川が北流する。本遺跡は五日市川により形成された右岸の段丘上に立地する。遺跡周辺の標高は約290mで、南東から北西方向に微傾斜する。現況は水田である。

3. 遺跡の基本層序

下山を含む遺跡周辺には白亜紀花崗岩が広く分布し、風化・侵食された物質により本地形が形成されている。また伏流した地下水が遺跡北側と東側に常時しみでている。遺跡の地山は同様の物質からなる更新統～完新統の灰白色粘土層で、泥炭層を介在させる。その上位に黒色土がのる。地山が窪んでいる部分では黒色土直下に十和田～中糠火山灰が時々層状に堆積する。基本土層は次の通りである。なお全層序に石英や金雲母を含む。

I層	5YR2/1黒褐色砂質粘土	しまりなし	<耕作土>
IIa層	2.5YR1.7/1赤黒色砂質粘土	風化した 数mmの花崗岩片含む	<耕作に伴う攪乱層>
IIb層	2.5YR1.7/1赤黒色砂質粘土に10YR6/1 灰褐色砂質粘土が塊状に混入する(15%)	しまる	
IIc層	10R1.7/1赤黒色砂質粘土	風化した 数mmの花崗岩片含む	
IIa層	2.5YR2/1赤黒色砂質粘土	しまる	
IIIb層	10R1.7/1赤黒色砂質粘土	しまる	<古代の遺構検出面>
IV層	10YR7/6明黄褐色礫石質粘土		<十和田～中糠火山灰>
V層	10YR8/6黄褐色砂質粘土	非常に固くしまる	<縄文時代の遺構検出面、地山>



基本土層

4. 調査の概要

検出された遺構は竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構1棟である。

<竪穴住居跡> いずれも北側の旧沢跡に隣接して検出された。沢跡は3回の時期に流れた痕跡があり、1号住居跡は2回目の時期に溢れ出た水に浸食され北壁を失い、その堆積物の一部覆われている。2つの住居跡ともに開墾時の攪乱を受け、遺構の上中那は削平されている。さらに1号住居跡は県の試掘調査で煙道部分を削平されている。

1号住居跡はL7区に位置する。最下部のみ検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.25以上×3.21mである。埋土は主に灰褐色砂質粘土である。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南壁8cm、東壁10cm、西壁8cmである。床は固くしまる。柱穴は検出されていない。カマドは東壁中央付近で検出された。開墾時の削平により燃焼部を残すのみである。径90cmの円形状の竈土が形成され、厚さは約10cmである。煙道部は削平されて存在しない。

2号住居跡はL・M6区に位置する。最下部のみ検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.20×2.74mである。埋土は1層である。住居跡地山の黒色粘土と沢を埋める灰褐色砂質粘土の混合土である。埋土上中部層は開墾時の攪乱層であり、重機による掘削で除去した。砂質粘土は花崗岩起源のもので、石英・金雲母が多く含まれる。壁は外傾して立ち上がる。壁高は北壁11cm、南壁13cm、西壁9cmである。床面は固く

しまる。多少凹凸があり、やや中央部分が浅く窪む。柱穴は検出されていない。東壁のカマド南側の床面で土坑P1を検出している。規模は70×63cmで、平面形は楕円形を呈する。埋土には焼土粒・炭化物片・須恵器坏片が混入し、底面からも須恵器坏片が出土した。貯蔵穴と考えられる。カマドは東壁の中央で検出された。廃棄後の崩落と開墾時の削平により、わずかに袖部最下部と燃焼部下部が残るのみである。燃焼部は煙道方向にU字状の不整形を呈し、規模は50×52cmである。焼土の厚さは約3cmである。底面で甕の破片が出土し、支脚に使われたと考えられる。煙道部は緩やかに下降し、煙出し部で垂直気味に立ち上がる。煙道部は長さ約2m・最大幅46cmで、煙出し部は径44×34cm、深さ27cmである。上半部が削平されているため上部構造は不明である。

<竅穴遺構> 調査区北側のC・D 8～9区に位置する。V層の地山を確認中円形状に残るⅢb層を検出した。プラン内は浅く窪み、底面ではほぼプランに沿って巡る柱穴状小土坑を13基検出した。炉跡はなく、遺物も出土しないことから竅穴遺構とした。規模は約4.1×4mである。土層観察用ベルトが調査区の冠水時に崩落したため断面は載せていない。埋土はおもに赤黒色砂質粘土で、最下部に灰褐色粘土薄層が床面を中心に広がっている。壁は四方に緩く立ち上がる。13基の柱穴状土坑のうち浅いものは自然の作用による可能性もある。遺物は本遺構に近接した場所出土している。風化により文様は不明であるが、胎土の様子から縄文後期～晩期頃と考えられる。本遺構も同時期の可能性が大きい。

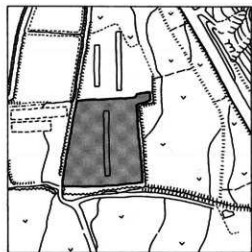
5. 出土遺物

大コンテナ1箱分の土器片が出土している。土師器と須恵器が79点、縄文土器片が2点出土している。出土場所は住居跡内と南・北トレンチ内である。器種別では坏が多く、甕の破片は4点である。1～3は1号住居跡から出土している。1はカマド内、2は埋土から出土し、ともにロクロ調整されている。3は土師器甕の底部でカマド内から出土し、内外面ともにヘラナデ調整である。4～10は2号住居跡から出土している。4は須恵器坏で、ロクロ調整され、底部は回転糸切りで切り離されている。5は土師器甕の胴下部で、ロクロ調整されている。底部は回転糸切りで切り離されている。6は須恵器坏の口縁部でロクロ調整されている。7は土師器甕の口縁部片で内外面ともにナデとヘラケズリで調整されている。8は土師器坏の底部片でロクロ調整され、内面は黒色処理が施されている。9は土師器坏の完形品である。内外面ともにナデ調整され、底部に木葉痕?が施されている。10は須恵器坏で、ロクロ調整されている。11～15は南トレンチから出土した。11は須恵器坏、13・15は土師器坏でそれぞれロクロ調整されている。11・15の底部は回転糸切りで切り離される。13は摩滅が著しく不明である。13は内面に黒色処理が施される。12は土師器甕の破片でナデとヘラケズリで調整されている。14は須恵器甕の胴部片で外面に叩き、内面に当て具痕が施される。16・17は縄文土器片で、摩滅が著しく文様は不明である。

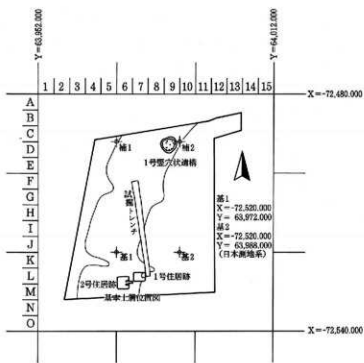
6. まとめ

今回の調査で検出された遺構から本調査区は主に平安時代の集落跡であることがわり、人々の生活の痕跡の一端を知ることができた。調査区の2ヶ所で西流する沢跡が検出され、旧沢沿いに住居跡が構築されていることがわかった。また、調査区の南側がさらに高くなっていることを考えると南側に集落の主体部がさらに広がっている可能性もある。

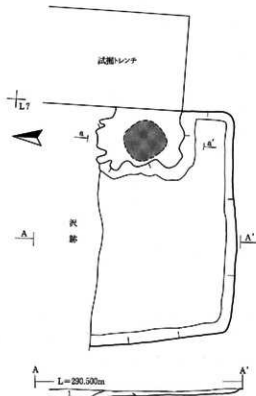
なお、中土濠遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



調査区位置図



遺構配置図



1. 7.5YR4/1 褐色砂質粘土 L&6
2. 10YR3/2 黒褐色土シルト L&6

1号住居跡

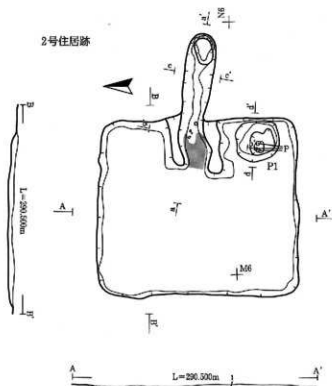


1. 7.5YR5/6 褐色土 L&6
2. 7.5YR6/1 褐色砂質粘土 L&6

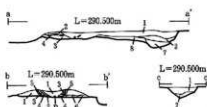


第1図 中土淵遺跡・調査区位置図・遺構配置図・1号住居跡

2号住居跡



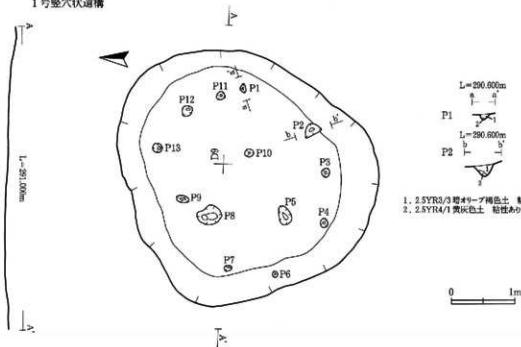
- d-d'
1. 7.5YR2/1 黒色砂質粘土と4/2 灰褐色砂質粘土との混合土 L.266
 2. 7.5YR2/1 黒色砂質粘土 土器片・炭化物片含 L.268
 3. 7.5YR4/2 灰褐色砂質粘土 土器片・炭化物片含 L.268



- a-a' b-b'
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質粘土 L.266 (天井部破断土)
 2. 7.5YR4/3 褐色砂質粘土 焼土粒混入 L.268 (天井破断部)
 3. 7.5YR4/6 褐色粘土 L.268 (溝底層)
 4. 10YR1.1/1 黒炭化物集積
 5. 7.5YR6/2 灰褐色砂質粘土 L.266 (地盤成層)
 6. 7.5YR4/1 灰褐色砂質粘土と7.5YR2/1 黒色粘土との混合土 L.268
 7. 7.5YR2/2 黒褐色砂質粘土 金雲母・灰行・石灰含 L.268
 8. 7.5YR3/1 黒褐色砂質粘土 陶磁破断点 金雲母・石灰含 L.268

1. 7.5YR4/1 灰褐色砂質粘土と7.5YR2/1 黒色粘土との混合土

1号竪穴状遺構

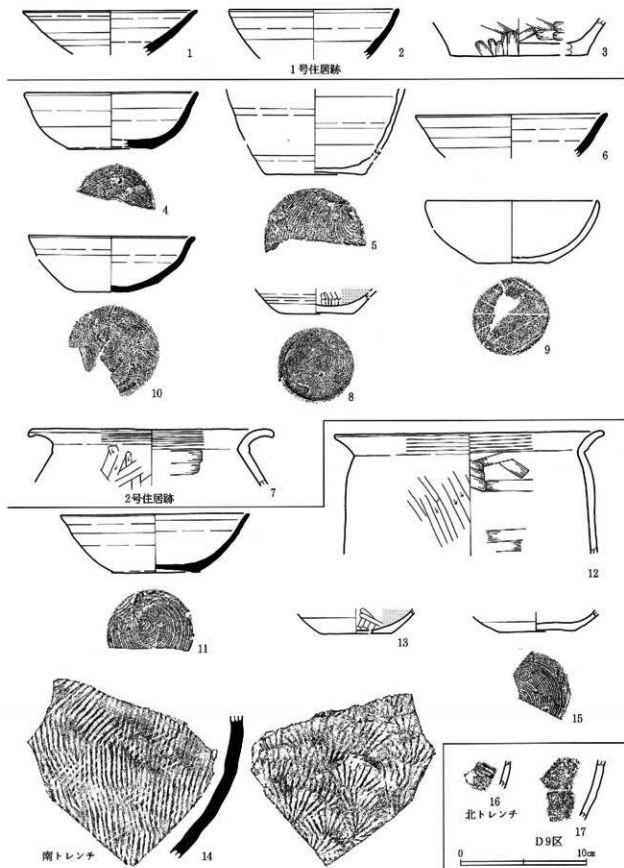


- P1 P2
1. 2.5YR2/3 暗オリーブ褐色土 粘性あり 締まり弱
 2. 2.5YR4/1 黄灰色土 粘性あり 締まり弱

※計測値はcm

柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
径(長×短)	16×10	28×18	16×13	16×14	32×20	11×9	12×10	40×31	20×12	14×14	15×14	20×16	17×15
深さ	10	17	10	11	18	6	8	15	16	10	15	10	10

第2図 中土淵遺跡・2号住居跡・1号竪穴状遺構



第3図 中土淵遺跡出土遺物



調査前風景



調査区全景(北から)



G4区土層断面



K4区土層断面



1号住居跡完掘(西から)



1号住居跡断面(東西)



1号住居跡カマド南北断面



1号住居跡遺物出土状況

写真図版1 中土淵遺跡検出遺構



2号住居跡完掘(西から)



2号住居跡断面(南北)



2号住居跡カマド南北断面



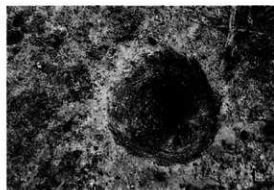
2号住居跡煙道東西断面



2号住居跡遺物出土状況



1号竪穴状遺構完掘



1号竪穴状遺構柱穴完掘(東)



1号竪穴状遺構柱穴完掘(北)

写真図版 2 中土淵遺跡検出遺構



写真図版 3 中土淵遺跡出土遺物

土器観察表

No	種類・器種	出土位置・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	割取(外/内)	備考
1	須恵器・坏	1号住・カマド	(13.9)	-	-	ロクロ/ロクロ	
2	須恵器・坏	1号住・1層	(13.5)	-	-	ロクロ/ロクロ	
3	土師器・甕	1号住・カマド	-	(11.0)	-	ヘラナデ/ヘラナデ	底面摩滅
4	須恵器・坏	2号住	13.7	6.6	4.5	ロクロ/ロクロ	底面未切り
5	土師器・小瓶類	2号住	-	(8.0)	-	ロクロ/ロクロ	底面未切り
6	須恵器・坏	2号住	(15.2)	-	-	ロクロ/ロクロ	底面未切り
7	土師器・甕	2号住	(19.1)	-	-	ヨコナデ・ヘラナズリ/ヨコナデ・ヘラナデ	
8	土師器・坏	2号住	-	(5.7)	-	ロクロ/黒色粘土・ミガキ	底面未切り
9	土師器・坏	2号住	(13.5)	5.7	5.0	ナデ/ナデ	底面未確認?
10	須恵器・坏	2号住	(13.1)	7.2	4.9	ロクロ/ロクロ	底面未切り
11	須恵器・坏	南トレンチⅡc層	(15.0)	6.9	4.7	ロクロ/ロクロ	底面未切り
12	土師器・甕	南トレンチⅡc層	(21.2)	-	-	ヨコナデ・ヘラナズリ/ヨコナデ・ヘラナデ	
13	十輪器・坏	南トレンチⅡc層	-	(5.7)	-	ロクロ/黒色粘土	厚感強い
14	須恵器・甕	南トレンチⅡc層	-	-	-	タタキ/土	
15	土師器・坏	南トレンチⅡc層	-	(5.9)	-	ロクロ/ロクロ	底面未切り
16	縄文土器・深鉢	北トレンチⅡb層	-	-	-		厚感強い
17	縄文土器・深鉢	D9区Ⅱb層	-	-	-		厚感強い

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいごうぶんかざいはくつちょうさりゃくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第423集							
編著者名	阿部孝明・吉田 充							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "			
中土淵遺跡	岩手県盛岡市土淵町 土淵第8地割 中土淵161	03206	MF 46 —0500	39度 20分 51秒	141度 34分 20秒	20020917 ～ 20021030	1,600㎡	ほ場整備事業 担い手育成区 画整理型に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中土淵遺跡	集落跡	縄文・平安時代	竪穴住居跡2棟・ 竪穴状遺構1棟	縄文土器・土師器・ 須恵器				

(47~53) ^{こまごめ} 駒込遺跡ほか6遺跡

委 託 者 農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所

事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業

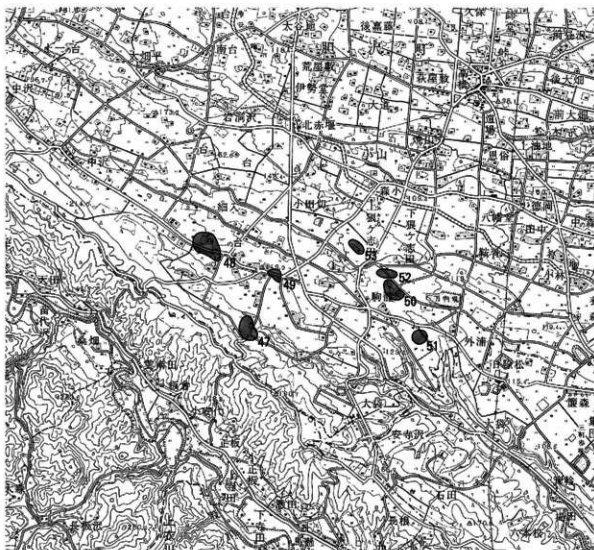
発掘調査期間 平成14年10月10日~11月8日

調査対象面積 22,000㎡

遺跡番号・略号 NE44-1256 NE44-0230 NE44-0370 NE45-0095
NE45-1049 NE45-0065 NE45-0031

調査担当者 飯坂一重・丸山直美・原 美津子・齋藤麻紀子

協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置

1:50,000 水沢

駒込遺跡ほか6遺跡の試掘調査に至る経過

国営いさわ南部農地整備事業実施地区は、岩手県の南西部に位置し、胆沢川から北上川にかけての扇状地の右辺部にあり、標高110～210mの段丘地形を呈している。この地形のなかに位置する「西風遺跡」、「二の台遺跡」、「鶴供養遺跡」、「主計谷地遺跡」、「竹地子遺跡」、「駒込遺跡」、「二の沢Ⅱ遺跡」は、「国営いさわ南部農地整備事業」の施行に伴って、その事業区域内に存することから試掘調査を実施することとなったものである。

この地区の農業は、水田を主体とした経営により発展してきたものの、所有耕地が分散し区画形状は未整備もしくは昭和30年代に整備された10a区画がほとんどで、かんがい用水不足に加え用排水路も未整備なことから農業の近代化が図れないまま生産性の低い農業経営を余儀なくされている。

このため、農用地の効率的利用と労働生産性の高い農業経営の展開が可能な生産基盤を形成するため、国営かんがい排水事業等により基幹的な用排水施設を整備し、本事業では既耕地を再編整備する区画整理875haと地目変換による農地造成8haの地域を一体的に施行し、併せて担い手への農地利用の集積による経営規模の拡大と経営の合理化を図るとともに、土地利用の整序化を通じ農業の振興を基幹として本地域の活性化に資することを目的に、現在事業を進めている。

この地区の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成8年度に分布調査を実施し、「西風遺跡」、「二の台遺跡」、「鶴供養遺跡」、「主計谷地遺跡」、「竹地子遺跡」、「駒込遺跡」、「二の沢Ⅱ遺跡」が確認されている。その結果に基づいて岩手県教育委員会は東北農政局胆沢旗ヶ石土地改良建設事業所に対し事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は東北農政局胆沢旗ヶ石土地改良建設事業所いさわ南部農地整備事業所と協議を行い、試掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成14年度事業について、平成14年1月15日付「教文第1441号」により財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。

これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団は「西風遺跡」、「二の台遺跡」、「鶴供養遺跡」、「主計谷地遺跡」、「竹地子遺跡」、「駒込遺跡」、「二の沢Ⅱ遺跡」の7遺跡について同年9月26日付で、委託契約を締結し、10月10日から試掘調査に着手した。
(農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所)

(47) ^{ならい}西風遺跡

所在地 胆沢町小山字西風
委託者 農林水産省東北農政局
いさわ南部農地整備事業所
事業名 国営いさわ南部農地整備事業
発掘調査期間 平成14年10月10日～10月28日
調査対象面積 2,406㎡
試掘面積 2,140㎡ (未了分266㎡)
遺跡番号・略号 NE44-1256
調査担当者 飯坂一重・丸山直美・原 美津子
齋藤麻紀子
協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置

1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

西風遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約7.3kmに位置し、胆沢扇状地の高位段丘面にあたる一首板段丘上座縁付近に立地する。標高は144～150mで、白鳥川との比高は約10mである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
表土 水田耕作土 層厚15～30cm
- II層 10YR3/4暗褐色粘土質シルト
盛土 一部礫混じる 層厚0～130cm
- III層 10YR1.7/1黒色シルト 旧表土
削平のためほとんど存在しない 層厚0～20cm
- IV層 10YR5/6黄褐色粘土 地山



基本土層柱状図

3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> 調査の結果、試掘範囲内においては遺構・遺物とも確認されなかった。

4. まとめ

今回の試掘調査によってT1～T25のいずれからも埋蔵文化財は確認されていない。調査区は北東に向かって緩やかに傾斜している。南側のトレンチは盛土が厚い。旧表土が見られるトレンチも南側に集中している。これに対し、表土直下地山となるトレンチは調査区内にまんべんなく見られる。調査区一帯は胆沢開拓により旧地形が改変されているものと判断される。T26～29 (266㎡) は耕作中であるため調査を行わず、次年度着手とした。なお、西風遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



西風遺跡トレンチ位置図

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいごうぶんかざいはくつちょうさりゃくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第423集							
編著者名	飯坂一重							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	コード		北緯 ° / ' / ''	東経 ° / ' / ''	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村	遺跡番号						
西風遺跡 <small>さいふういせき</small>	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 西風 <small>いわてけんいさわ いさわのちの いさわのちの いさわのちの</small>	03383	NE44 -1256	39度 04分 03秒	141度 03分 00秒	20021010 ～ 20021028	2,140㎡	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西風遺跡	散布地	—	—	—		—		

(48) 二の台遺跡

所在地 胆沢町小山字二の台
委託者 農林水産省東北農政局
いさわ南部農地整備事業所
事業名 国営いさわ南部農地整備事業
発掘調査期間 平成14年10月15日～10月30日
調査対象面積 1,964㎡
試掘面積 1,834㎡（未了分130㎡）
遺跡番号・略号 NE44-0230
調査担当者 丸山直美・齋藤麻紀子・原美津子
協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置 1:50,000 水沢

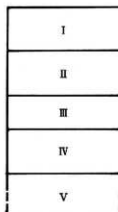
1. 遺跡の立地

駒込遺跡は、JR東北線前沢駅の北西約8.2kmに位置し、胆沢扇状地の中位段丘面にあたる上野原段丘に立地する。調査区の標高は157～163m前後で、白鳥川との比高は約10mほどである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10YR4/3鈍い黄褐色粘土質シルト 明黄褐色粒3%
表土 水田耕作土 層厚20cm
- II層 10YR6/6明黄褐色粘土と10YR3/1黒褐色粘土質シルト
の混合土 盛土 層厚20cm
- III層 10YR3/1黒褐色粘土質シルト 旧表土 層厚15cm
- IV層 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 漸移層 層厚20cm
(III～IV層は西半部の一部のみ残存する)
- V層 10YR6/6明黄褐色粘土 地山



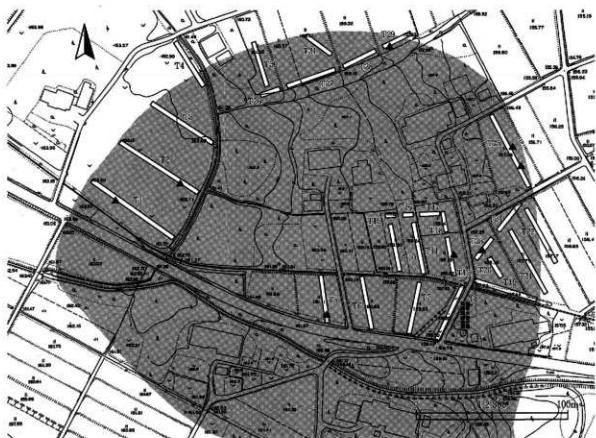
基本土層柱状図

3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> 調査の結果、T1、T2、T5、T12、T23、T29より陥し穴状遺構を各1基、T25より陥し穴状遺構2基の合計8基を検出した。遺物はT1の表土中よりフレイク1点が出土した。

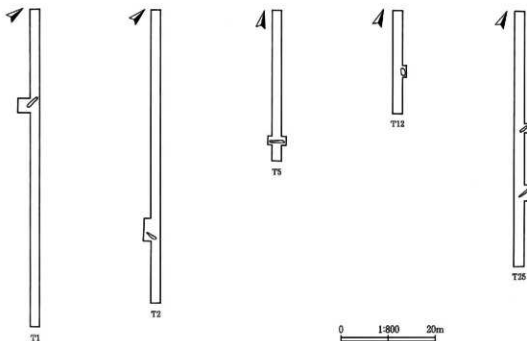
4. まとめ

T1、T2、T5、T12、T23、T25、T29でI層からIV層までを除去した(25～65cm)段階で陥し穴状遺構計8基を検出した。検出面はいずれもV層である。西半部では盛土下層に旧表土が残存するが、北東側では盛土直下で地山、南半部では耕作土直下で地山となる。このため、西半部の遺構については削平を受けずに残存したものと考えられる。T9、T13、T14は耕作中であるため調査を行わず、次年度着手とした。なお、二の台遺跡に関わる調査はこれをもって全てとする。

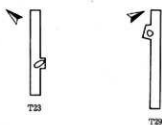


凡例 ▲ 陥し穴状遺構

二の台遺跡トレンチ位置図



二の台遺跡検出遺構①

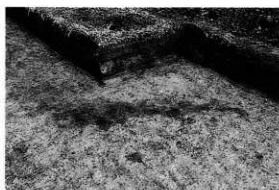


二の台遺跡出土遺物

二の台遺跡検出遺構②



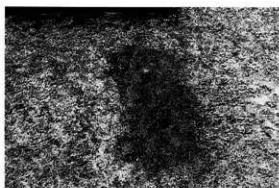
T1 陥し穴状遺構



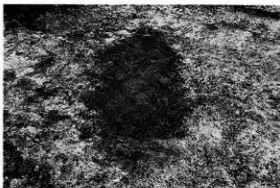
T2 陥し穴状遺構



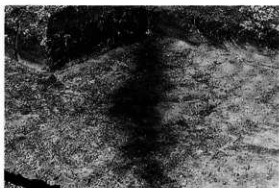
T5 陥し穴状遺構



T12 陥し穴状遺構

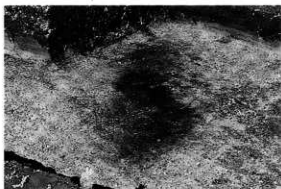


T23 陥し穴状遺構



T25 陥し穴状遺構

二の台遺跡試掘状況写真①



T25 陥し穴状遺構



T29 陥し穴状遺構



T2 平面



T2 断面

二の台遺跡試掘状況写真②

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうふんかざいはくつちょうさりゃくほう						
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第423集						
編著者名	丸山直美						
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002						
発行年月日	西暦2003年3月28日						
ふりがな 所収遺跡名	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
	所在地 市町村	遺跡番号					
二の台遺跡	03383	NE44 -0230	39度 04分 35秒	141度 02分 35秒	20021015 ～ 20021030	1,834㎡	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
二の台遺跡	散布地	縄文	陥し穴状遺構	フレイク1点	—		

(49) 鶴供養遺跡

所在地 胆沢町小山字二の台
委託者 農林水産省東北農政局
いさわ南部農地整備事業所
事業名 国営いさわ南部農地整備事業
発掘調査期間 平成14年10月23日～10月30日
調査対象面積 746㎡
試掘面積 638㎡（未了分108㎡）
遺跡番号・略号 NE44-0370
調査担当者 飯坂一重・丸山直美・原 美津子
齋藤麻紀子
協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置 1:50,000 水沢

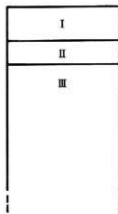
1. 遺跡の立地

鶴供養遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約7.5kmに位置し、胆沢扇状地の中位段丘面にあたる上野原段丘に立地する。標高は145m前後で、白鳥川との比高は約10mである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 表土 水田耕作土
層厚20cm
II層 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 盛土
層厚0～20cm
III層 10YR6/4にぶい黄褐色粘土 地山



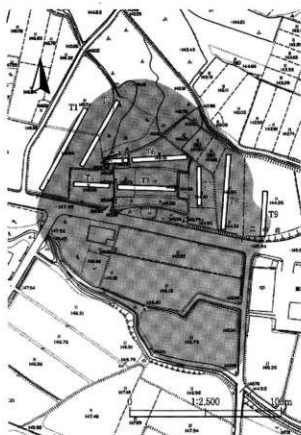
基本土層柱状図

3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> 調査の結果、試掘範囲内においては遺構・遺物とも確認されなかった。

4. まとめ

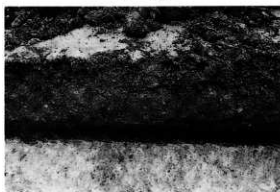
今回の試掘調査によってT1～T9のいずれからも埋蔵文化財は確認されていない。ほとんどのトレンチで盛土下で地山が確認された。標高の低い東側水田T8、T9では表土下で黄褐色の地山が露出した。T1、T2は畦畔をはさんで2枚の水田にまたがりトレンチを入れたが、いずれの水田でも暗渠施設が施されていた。調査区の水田は、胆沢開拓とその後の整備事業により、かなり大規模に改変されているものと判断される。T5の東側畑部分(60㎡)とT10(48㎡)は耕作中であるため調査を行わず、次年度着手とした。なお、鶴供養遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



鶴供養遺跡トレンチ位置図



T6 平面



T6 断面

鶴供養遺跡試掘状況写真

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいごうふんかざいはくつちょうさりゃくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第423集							
編著者名	飯坂一重							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ノット	東経 ノット	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鶴供養遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 二の台	03383	NE44 -0370	39度 04分 25秒	141度 03分 10秒	20021023 ~ 20021030	638㎡	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鶴供養遺跡	散布地	—	—	—		—		

(50) ^{こまごめ} 駒込遺跡

所在地 胆沢町小山字新田
委託者 農林水産省東北農政局
いさわ南部農地整備事業所
事業名 国営いさわ南部農地整備事業
発掘調査期間 平成14年10月28日～11月5日
調査対象面積 2,090㎡
試掘面積 1,824㎡ (未了分266㎡)
遺跡番号・略号 N E 45-0095
調査担当者 丸山直美・齋藤麻紀子
原 美津子
協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



1. 遺跡の立地

駒込遺跡は、JR東北線前沢駅の北西約5.8kmに位置し、胆沢扇状地の中段丘面にあたる上野原段丘に立地する。調査区の標高は120m前後で、白鳥川との比高は約20mほどである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト 表土 水田耕作土
層厚20cm
- II層 10YR3/1黒褐色粘土質シルトと10YR6/8明黄褐色
地山粘土の混合土 盛土 層厚20cm
- III層 10YR4/1褐灰色粘土 炭化物1% 盛土 層厚15cm
- IV層 10YR5/3鈍い黄褐色粘土質シルト 盛土 層厚15cm
- V層 10YR3/1黒褐色粘土質シルト 盛土 層厚10cm
- VI層 10YR5/4鈍い黄褐色土 地山 (南半部では礫層となる)



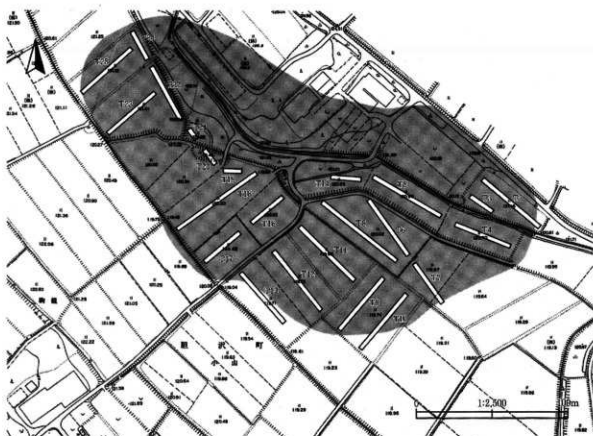
基本土層柱状図

3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> 調査の結果、試掘範囲内においては遺構・遺物とも確認されなかった。

4. まとめ

今回の試掘調査によってT1～T25のいずれからも埋蔵文化財は確認されていない。調査区は北から南に向かって傾斜する地形にあり、全域で35～60cmの盛土が認められる。南半部の地山は礫層で直上が黒色土層となるが、木根の混入が多数あり盛土であることが判明した。IV層とV層は切り盛りの際に、旧表土と地山が逆転したものと考えられ、調査区全域が削平・盛土されていることが判明した。T1、T15は耕作中であるため調査を行わず、次年度着手とした。なお、駒込遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



駒込遺跡トレンチ位置図

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりゃくほう						
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第423集						
編著者名	丸山直美						
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002						
発行年月日	西暦2003年3月28日						
ふりがな 所収遺跡名	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号					
駒込遺跡 <small>こまごいせき</small>	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 新田	03383 NE 45 -0095	39度 04分 20秒	141度 04分 15秒	20021028 ～ 20021105	1,824㎡	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
駒込遺跡	散布地	—	—	—		—	

(51) 二の沢Ⅱ遺跡

所在地 胆沢野小山字二の沢
委託者 農林水産省東北農政局
いさわ南部農地整備事業所
事業名 国営いさわ南部農地整備事業
発掘調査期間 平成14年10月30日～11月6日
調査対象面積 1,092㎡
試掘面積 1,092㎡
遺跡番号・略号 NE45-1049
調査担当者 飯板一重
協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置 1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

二の沢Ⅱ遺跡は、JR東北線前沢駅の北西約5.6kmに位置し、胆沢扇状地の中段段丘面にあたる上野原段丘に立地する。標高は118～123m前後で、白鳥川との比高は約20mである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

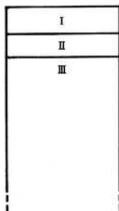
- I層 10YR3/4暗褐色粘土質シルト
表土 水田耕作土 層厚15cm
- II層 10YR3/3暗褐色粘土質シルトと
10YR4/2灰黄褐色粘土の混合土 盛土 層厚0～20cm
- III層 10YR5/6黄褐色粘土 地山

3. 調査結果

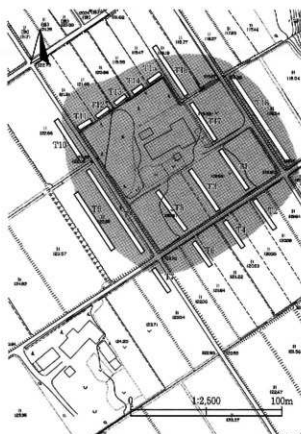
<検出遺構・出土遺物> 調査の結果、試掘範囲内においては遺構・遺物とも確認されなかった。

4. まとめ

今回の試掘調査によってT1～T18のいずれからも埋蔵文化財は確認されていない。調査区は家屋を中心に、それを水田・休耕地が囲む形で広がっている。水田は東に向かい階段状に30～40cmずつ低くなっている。家屋の西側にあたるT7～T10では15～20cmの盛土が見られる。それに対し、家屋のすぐ東の休耕地T1、T3、T17では表土直下で地山が確認され、農道をはさんでさらに東側の約70cm低い水田T18でも薄い盛土を介しただけで地山となる。調査区の水田は開拓時に削平・盛土が行われ、その後も耕作者により改変が加えられ旧地形を留めていないものと判断される。なお、二の沢Ⅱ遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



基本土層柱状図



二の沢Ⅱ遺跡トレンチ位置図



T9 平面



T9 断面

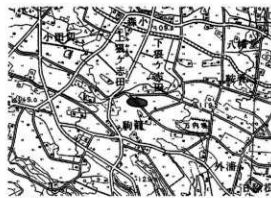
二の沢Ⅱ遺跡試掘状況写真

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりゃくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第423集							
編著者名	飯板一重							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "			
二の沢Ⅱ遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 二の沢	03383	NE45 -1049	39度 04分 10秒	141度 04分 15秒	20021030 ～ 20021106	1,092㎡	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
二の沢Ⅱ遺跡	散布地	—	—	—		—		

(52) 竹地子遺跡

所在地 胆沢町小山字竹地子
委託者 農林水産省東北農政局
いさわ南部農地整備事業所
事業名 国営いさわ南部農地整備事業
発掘調査期間 平成14年11月5日
調査対象面積 244㎡
試掘面積 94㎡(未了分150㎡)
遺跡番号・略号 NE45-0065
調査担当者 齋藤麻紀子・原 美津子
協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置 1:50,000 水沢

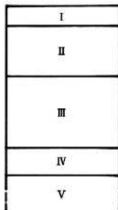
1. 遺跡の立地

竹地子遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約5.9kmに位置し、胆沢扇状地の中位段丘面にあたる上野原段丘に立地する。調査区の標高は127m前後で、白鳥川との比高は約27mほどである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト 表土 水田耕作土
層厚13cm
- II層 10YR4/1褐灰色粘土質シルト 盛土 層厚35cm
- III層 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 盛土 層厚50cm
- IV層 10YR2/1黒色粘土質シルト IH表土 層厚20cm
- V層 10YR5/4鈍い黄褐色粘土 地山



基本土層柱状図

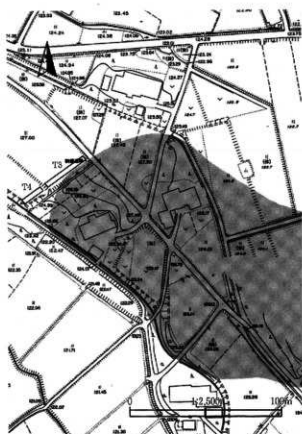
3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> 調査の結果、試掘範囲内においては遺構・遺物とも確認されなかった。

4. まとめ

今回の試掘調査によってT3、T4のいずれからも埋蔵文化財は確認されていない。

調査区は北から南に向かって傾斜する地形の中にあり、T3では表土直下が地山となるのに対して、T4では80cm以上の盛土が認められる。現況では東側に隣接する畑地が調査区の田面より一段低くなっていることから、畑地の土を削って南側の水田に盛土したものと考えられる。T1、T2については耕作中であるため調査を行わず、次年度着手とした。なお、竹地子遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



竹地子遺跡トレンチ位置図



T3 平面



T3 断面

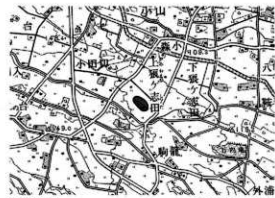
竹地子遺跡試掘状況写真

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいごうぶんかざいはくつちょうさりゃくほう						
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第423集						
編著者名	丸山直美						
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002						
発行年月日	西暦2003年3月28日						
ふりがな 所収遺跡名	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号					
竹地子遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 竹地子	03383 NE45 -0065	39度 04分 25秒	141度 04分 10秒	20021105	94㎡	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
竹地子遺跡	散布地	—	—	—	—		

(53) 主計谷地遺跡

所在地 胆沢町小山主計谷地
 委託者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事業名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成14年11月6日～11月8日
 調査対象面積 442㎡
 試掘面積 442㎡
 遺跡番号・略号 NE45-0031
 調査担当者 飯坂一重・丸山直美
 協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置 1:50,000 水沢

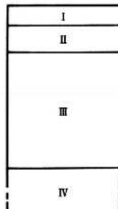
1. 遺跡の立地

主計谷地遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約6.5kmに位置し、胆沢扇状地の中段段丘面にあたる上野原段丘に立地する。標高は128～135mで岩塚川との比高は約15mである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10YR3/1黒褐色粘土質シルト
 表土 水田耕作土 層厚20cm
- II層 10YR3/1黒褐色粘土質シルトと
 10YR6/8明黄褐色粘土の混合土 盛土 層厚30cm
- III層 10YR1.7/1黒色粘土質シルト 旧表土 層厚120cm
- IV層 10YR6/8明黄褐色粘土 地山



基本土層柱状図

3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> 調査の結果T2において表土層より近世・近代の磁器片16点が出土した。遺構は検出されなかった。

4. まとめ

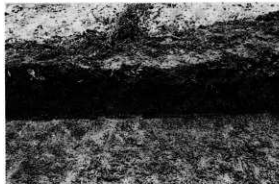
T1は水田に囲まれた湿地で、中央部が沢状に窪んでおり盛土・旧表土が確認された。現況が水田・畑地であるT2～T4は表土直下で地山となる。T2表土層より近世・近代の磁器片数点が出土した。南側上段にはかつて屋敷跡があったということから、斜面上方から押されて表土に混入したものと判断される。遺構は確認されなかった。なお、主計谷地遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



主計谷地遺跡トレンチ位置図



T3 平面



T3 (畑) 断面

主計谷地遺跡試掘状況写真



S=1/3

主計谷地遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうふんかざいはくつちょうさりゃくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第423集							
編著者名	飯坂一重							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
主計谷地遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 主計谷地	03383	NE 45 -0031	39度 04分 35秒	141度 03分 55秒	20021106 ~ 20021108	442㎡	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
主計谷地遺跡	散布地	—	—	磁器破片		近世・近代		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第423集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成14年度)

印刷 平成15年3月20日

発行 平成15年3月28日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話(019) 638-9001
FAX(019) 638-8563

印刷 株式会社
〒020-0816 盛岡市中野1-4-14
電話(019) 624-3456

